
VERITA ~ 光から続く物語 ~

山上真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VERITA〜光から続く物語〜

【Nコード】

N4149L

【作者名】

山上真

【あらすじ】

旅立ったセリカ一行と、その後を追うリウイとエクリア。更にその後を追う少年。

合流した面々は、立ち寄った迷宮で一刻を過ごすことにした。

オリ主ものであり、妄想の産物です。

原作設定とかはあまり重く考えません。

独自・捏造設定が入るでしょう。

オリ主最強物……と言うよりは、リウイとセリカ最強物となる予定

です。
スパロボ風味を目指します。

プロローグ（前書き）

本作品は妄想の産物です。

もう一本の筆が進まないで、気晴らしに書きました。

設定とかはあまり重く考えていないので、原作設定を重視される方はお気に召さないと思われます。

また、キャラクターも妄想のままに壊れる可能性があります。

タイトル通り、戦女神VERIITA光ルートED後のお話（妄想？）です。

プロローグ

鬱蒼とした森の中、生い茂る木々を何ら気にせず歩く存在があった。

光が木々に遮られているために、男性か女性かもハッキリとは分からない。

「はあ……虚しい……」

不意に歩みを止め呟いたその声音は低く、どうやら男性であるようだ。

僅かに風が吹き、遮られていた光が、ほんの一瞬男を照らす。

髪は蒼を基調とし、若干ではあるが金や黒が混ざっている。瞳は深紅。 たった一瞬の光では、僅かそれだけしか分からなかった。

「だいたい、何で俺は一人でこんな所を彷徨ってるんだ？ いや、分かってる。理解してる。ただ、納得がいつてないってだけでな……」

男はグチグチと零す。

その気持ちも分からなくはない。

生きていれば、誰が聞いているでも無しに何事かを呟くことがままあるものだ。

「……で、だ。問うが、そこら辺を踏まえた上でお前たちはどう思う？」

しかし、男の言葉は断じて独り言ではなかった。

その証拠なのだろうか？ 静まりきっていた森の中が次々と音を

立てる。そして、十数もの影が現れる。

「気付いていたか。問い返すようで済まないが、この地に何の用だ？」

影の1つが進み出て男に問い掛ける。

影は、一言で言えばヒトガタ。断じて順当な人間ではない。体軀を包む剛毛。鋭く延びた牙と爪。

獣人。それが、進み出た影の正体だった。

「依頼を受けてな。ここ最近、付近の街道を通る行商人たちを襲っているのはお前等か？」

だが、男はその異様を目にしても何ら怯むことなく獣人に答え、問うた。

「そうか……。確かにそれは我等だ。それで、我等を退治しにでも来たか？」

男の問いを認めた獣人は、静かに　しかし、威圧と殺気を込めて男を睨みながら　問い掛けた。

「そこいらはお前たち次第だ。行商人を襲っているとは言え、決して死人は出していない。そして、奪っていくのも食料や衣類のみだからな。……この点から考えるに、理由は恐らく生活苦。ならば、最低限そこら辺を保証してやれば、お前たちも行商人を襲うことはしなくなる。　違うか？」

「……認めよう。だが、どこにその様な場所がある？　誰がそれを保証してくれる？　そのような場所も者もおりはすまい。ならば、答えは決まっている」

自身の威圧と殺気をもつとせず、答える男に向かって、獣人は構えを取る。他の影も、それは同様であった。

しかし、男は尚も気にせず言葉を重ねる。

「俺が保証し、俺が案内しよう。メンフィルが前王リウイ・マーシルの血脈にして、セルノ・バルジア両王家の皇太子であるこの俺、リンス・アリア・マーシルンがな」

男　　リンスは高らかに告げた。

「メンフィルが掲げるのは『人と魔の共存』だ。今現在、若干『光陣営』に傾いているくらいはあるが、それでも決して無碍にはせん。……俺が案内する場所を治めているのは『深凌の楔魔』が第三位たる魔神ラーシエナであり、第五位のエヴリーヌと第七位のカファル、第八位たるゼフィラもいる。決して安息とは言えんが、この場に留まるよりはマシであろう。さあ、どうする？　俺の言葉を信じるも信じないもお前たちの自由だ」

「……暫し、時間を戴きたい」

リンスの言葉を受け、獣人が答えられたのは、その一言だけだった。

「お久しぶりです、ファーミシルス将軍。所用でこちらに来たので寄ってみたのですが、リフィアやリウイはおられますか？」

最終的にこちらの言葉を受け入れた獣人たちをフォルマのラーシエナたちの元へと連れて行ったその帰り、リンスはメンフィルが王都ミルスの居城へと寄っていた。

メンフィルの次王たるリフィアと同じく、リンスもリウイの孫ではあるが、普段はセルノかバルジアにて日々を過ごしている。

これは血統によるためだ。

メンフィルの現王はシルヴァン。リウイと断罪の聖騎士シルフィアの間にも生まれた子供である。

そのシルヴァンと同じくリウイとカーリアンの間にも生まれた子供である。カミーリの間に生まれたのがリフィアだ。

リフィアのフルネームは、リフィア・イリーナ・マーシルン。イリーナとは今は亡きリウイの正室であり、彼が理想を追い求める原因となった女性の名である。

一方で、リウイとセルノ王女ラピスの間に生まれた子供であるアクアと同じくリウイとバルジア王女であるリンの間に生まれた子供である。グレンの間に生まれたのがリンスである。

リンスのミドルネームであるアリアはリウイの母親の名前でもある。

リウイから続く血統は、人と魔の間に生まれたが故に、ともすれば容易く闇へと堕ちてしまう可能性を持っている。

アリアの名前は、自らが人でも在ることを忘れないようにと付けられたものだ。

リンスは自らの女性的な名前に若干のコンプレックスを持っているが、その願いの尊さも十分に理解しているつもりである。

まあそんなわけで、リンスもメンフィルの王位継承権を持っているが、セルノ・バルジア両王家の継承者でもあるために、普段はそちらで暮らしている。

だが、如何に永き生を持ち、高い潜在能力を持っているとはいえ、現在のリンスが子供であることに違いは無いのだ。

それ故にリンスは、こちらへ来た際、欠かさず城へ寄ることにし

ていた。

そして、城に入ると同時にメンフィル軍の大將軍であるファームシルスと出会ったので、挨拶がてらリフィアたちが居るかを聞いてみたわけである。

「おや？ お久しぶりですリンス様。生憎ですが、リウイ様リフィア様含め、現在は大半の者が不在となっております」

だが、ファームシルスの返答はリンスの期待を裏切るものであった。

「……と、言われますと？」

「つい先日の事となりますが、『神殺し』セリカ・シルフィルが旅に出るといふ情報が入りまして、それを知ったリフィア様が同道すべく出立。お目付役としてペテレーネとマリーニヤも同行。仕事で手の放せなかつたりウイ様及びエクリア様も、片付くと同時に後を追われました」

「そうですか……。感謝します、將軍。自分も後を追ってみるとします」

「左様ですか。では、セルノとバルジアへはこちらから連絡を入れておきます。しかし、そう簡単に追いつけるとも思いませんが？」

「ええ、自分もそう思います。が、徒歩でなければ追いつく可能性も高まります」

言って、リンスは踵を返した。

「……フッ！」
「……ハッ！」

刺突の一撃と払いの一撃が、それぞれに魔物を屠る。

刺突を繰り出したのはリウイ。斬撃を繰り出したのはセリカだ。

片や漆黒の神魔王。片や知識の探求者である。

神魔王がその手に持つは、絶大なる闇の力を秘めた刺突剣インペリアル・エペ。一方の探求者が持つのは、あらゆる罪を明らかにする裁きの聖剣リブラ・クルース。

この両者を前にしては、塵と化すが魔物の必然であった。

だが、魔物の数は未だに多く周囲に蠢いている。

如何に両者が強かろうとも、ただ刃を振るうだけでは一体ずつしか相手に出来ない。

当然の如く、次の相手へ向き直るには僅かながら時間を有する。

魔物としても、その瞬間を見逃す事は出来ない。

彼我の実力差は、魔物の方が嫌と言うほど理解している。いや、仕掛ける前は己の優勢を疑っていなかった。目の前にいるのは所詮己の獲物に過ぎぬ……。そう思って仕掛けた魔物たちは、次の瞬間に深い後悔と絶望を抱いていた。

己の敵う相手ではない。そう認識した瞬間には既に遅く、最早逃げても叶わない。

故に、魔物たちが生存するためには、如何に可能性が低くとも自らが勝利する以外にない。

だからこそ、その僅かな瞬間に魔物は仕掛ける。仕掛けようとした。

魔物は忘れていた。相対しているのはこの2人以外にもいることを、リウイとセリカの凄まじさに吞まれ、気を取られ、忘れていたのだ。

「最高の位置！」

氷結が舞う。

「見事的です」

昏い闇が辺りを包む。

「余は情けなど持たぬー！」

神聖なる光が貫く。

「……終わったか」

僅かな静寂の後、リウイが呟いた。

先程まで周囲を取り囲んでいた魔物の気配は、最早微塵も感じられない。

「依頼は完了した。宿に戻るとしよう」

セリカが続く。

依頼された魔物の退治は終了した。最早ここにいる意味はない。そして歩き出そうとしたところで、その足を止めた。

「……この気配はっ!?!」

先程までの魔物とは比べものにならぬ尋常ならざる気配が近付いてくる。

リウイ、セリカを始め、ここにいる者たちは皆その気配の持ち主を知っていた。そして知っているからこそ驚愕せずにはいられない。

何故？ 考える間もなく彼我の距離はゼロとなった。
そこにいたのはカファルー。深凌の楔魔が第七位である。いや、カファルーだけではない。その背中には誰かが乗っている。真っ先に思い浮かぶのは、同じく深凌の楔魔であるラーシエナだ。だが、違う。ラーシエナであるならば、黒き翼が無ければおかしい。背に乗る人影からは翼が見えない。
では誰だ？ エヴリーヌか？ パイモンか？ ゼフィラか？ デイアーネか？ 残りの深凌の楔魔の名が次々に浮かぶ。
その思考を答えに導いたのは、他ならぬその人影本人だった。

「……よつと。ありがとう、カファルー。さて、追いついたぞ？ リウイ、リフィア」

背中より降り立った人影は、カファルーに礼を言い、次いでリウイとリフィアを見つめていった。

「おお！ 誰かと思えばリンスではないか！ 余はこれでもないほどビックリしたぞ？」

そう、その人影はリンスだった。
徒歩で追いかけるとするならば、容易に数日の差を縮めることは出来ない。

なので、王城を発ったリンスは、直ぐさまフォルマへと戻りカファルーに助力を頼んだのである。

「旅に出るなら俺も誘え。ただでさえスケーマでの決戦には参加できなかつたんだ。これ以上の仲間外れは御免被る」
「なるほど……。それはすまなかつたな。しかし、お前も執務があるのではないのか？」

「リウイが言えることではないだろう？ 父も母も未だ健在。俺の

仕事など微々たるものだし、それとて既に片付けている。　　そも
そも、放浪癖は他ならぬリウイから続く血統だ」

リフィアとリウイに挨拶を済ませたリンスは、他の面々へと向き
直る。

「お久しぶりです、エクリア様。この度はリウイやリフィアに付き
合わせてしまったようで申し訳ありません。ペテレーネ殿も申し訳
ありません」

「いえ、私もセリカ様にお逢いしたかつたし……」

「とんでもないです」

「カーリアン殿……の場合、放浪癖は元からか……。マリーニヤも
すまないな。リフィアの我が儘には疲れるだろうが、変わらず仲良
くしてくれると嬉しい。俺とも仲良くしてくれるともっと嬉しい」
「なぐんか釈然としないわねえ」

「いや、まあ友人として……ね？」

「さて、残る初見の御二方が『神殺し』セリカ・シルフィル殿と、
その使徒であるルナ・クリア殿だとは思いますが……。ウーン、服
装から見るに貴女がルナ・クリア殿で間違いないと思うのですが、
合っていますか？」

「ええ。私がルナ・クリアです」

「と、なると……貴女がセリカ殿？　いやいや、セリカ殿は男性だ
と伺っていましたが、まさか女性だったとは」

「……俺は男だ」

面々と挨拶を交わすリンスは、セリカを目にして驚いた。その人
物は女性としか見えなかった。

確かに、元は女神の身体であるが故、女性と見紛うとは聞いてい
たが、これでは女性そのものである。

その驚きを何とか堪えて放った台詞は、他ならぬ本人に否定され

た。

「え！？ 本当……ですか？」

「本当だ」

再度問い掛けるも、答えは変わらない。

それでも信じられず、周囲の面々に視線で問い掛けたが、答えは変わらなかった。

「……いや、失礼しました。不快にさせてしまい申し訳ありません。

リウイ・マーシルンが孫、リンス・アリア・マーシルンです。改めてよろしくお願いいたします」

未だ信じられぬものの、社交場に生きる性で以て、何とか挨拶を終えたリンスであった。

「さて、ここが酒場で聞いた迷宮だな」

リンスがリウイたちと合流して数日後の早朝、リンス、リファイア、マリーニヤの3人はとある迷宮の前にいた。

何でも、ある一定地点まで進むと開かない扉があるらしい。それだけなら特に珍しくもないのだが、鍵穴も一切無く、仕掛けらしき物も見当たらないとなれば、どこことなく興味を惹かれるものである。

「けど、私たちだけで本当に大丈夫？」

「大丈夫だ！ 余等に敗北の二文字はない！」

不安を零すマリーニヤに、リフィアが根拠無く言い放つ。

「ああ〜不安だ〜」

「何を言うか！」

「リフィアのは勢いだけで根拠が感じられないだよ。まあ、マリーニヤもそう悲観的になることはないさ。書き置きは残してきてるし、情報通りならどっちみち行き止まりで立ち往生することになる。仮に、何か危険があったとしても、俺たちだったらそうそう遅れは取らないさ。一応、保険も用意してるしな……」

「「保険？」」

リンスの言葉に、リフィアとマリーニヤは異口同音に首を傾げる。

「ああ。実体化しろ、パイモン」

リンスが言うと同時に、彼の首飾りが中空で歪み、暫しの後、そこには1人の男性がいた。

パイモン。深凌の楔魔が第六位である。

「お久しぶりです、リフィア様。マリーニヤさん」

「御主は!？」

「何だつてアンタが!？」

「いえいえ、リウイ様が真に我が主に相応しくなられる刻を待つにしても、出来る限り近くで待ちたいのが人情と言うものですからね。その辺りをご説明した上で、リンス様に首飾りとして身に付けていただいているわけです。まあ、今のリンス様では力量的に私の全力を引き出すことは出来ませんが、それでもかなりの護りたる自負はあります。俗に言うギブ・アンド・テイクです」

実体化したパイモンは、本心の見えないにこやかな笑みを浮かべて述べる。

「リンス！」

パイモンに言ってもどうにもならないと悟ったりフィアは、リンスへと鋭い視線を向ける。

「ま、そう言うことだ。当然の如く裏で何かしらを考えているとは思うが、それでも尚俺は信じよう。たとえ裏切られたとしても、恨まず、最後には御しきってみせるさ。……その程度が出来ぬようでは、俺たちの理想は夢のまた夢と化してしまう」

リウイから続く理想である『人と魔の共存』は、平和・平穩を目指すものだ。

その理想を果たすためには、たとえ敵であったとしても、相手によつては許す度量を持つことが必要不可欠。

そして、その度量を持っているが故に、ラーシエナたちはメンフイル領のフォルマで暮らしているのだ。ならば、同じ深凌の楔魔であるパイモンに対しても適用しない道理はない。

「ウム、それは事実である。分かった。パイモンよ、余も御主を信じようぞ！」

「これはありがたいことです。では、私は再び首飾りへと戻りましょう」

「……さて、奥へ進むとしよう」

首飾りへと戻ったパイモンを身に着けたリンスは、奥を見据えて言った。

「サツパリと魔物が出てこないな……」

「そうね」

「不可思議な迷宮である」

迷宮に入ってからかなりの距離を歩いているが、未だ魔物と出会わない。

遺跡であれ迷宮であれ、こういった場所では魔物が出てくるのが常と言うものである。

魔物が出てくるからこそ、危機感や緊張感はより高まる。それは生存本能を強く刺激する。矛盾しているが、迷宮や遺跡においては、魔物がいるからこそ生存率が高まる一面も存在しているのだ。しかし、この迷宮ではそれが無い。

よって、今現在3人はかなりリラククスしていた。

それでも、流石に最後の一線までは気を抜いていない。

暫く歩いた3人の前に、それは現れた。

「扉……だな」

「開く？」

情報通りであれば、開かない扉があるはずである。この迷宮に入って初めての扉なので、これがそうかは分からないが、可能性は低くない。

その扉には、何かが描かれていたような跡があったが、風化したのか掠れて殆ど読み取れなかった。

より良く見ようとマリーニヤが扉の前に身を乗り出し、僅かに遅れて扉は多少の音を立てて左右に開閉した。

「……開いたわね」

「……開いたな」

「先に進むぞ！」

扉の先は、些か趣が異なっていた。
先程までと違い、自然に出来た感じはしない。かと言って、人為的に創られた感じもしない。

無理矢理言葉で表すならば、及びも付かぬ超常的なナニカで創られた感じと言ったところだろうか。

暫し進むと分かれ道があった。直線、右曲がり、左曲がりの三叉路。

顔を見合わせ1つ頷き、取り敢えず左へと進む。

暫し進むと再び扉があった。開けようとするも開かない。3人が順に試しても無理だった。

道を戻り、今度は右の方へと進む。

進むとやはり扉。マリーニヤが開けようとしても無理だったが、リンスやリフィルが扉の前に立てば容易く開いた。

扉は開いたものの先には進まず、入り口からざっと中を観察するに留める。中はがらんどろであり、唯一転移門だけが異彩を放っていた。

再度道を戻り、今度は直進する。

またもや分岐があったが、気にせず直進する。

どれだけ分岐を無視して直進してきただろうか？ 一際大きな扉があった。

扉には絵が描かれている。

「この絵は何じゃ？」

リファイアが呟く。 が、リンスもマリーニヤも答えを持ち合わせてはいない。

「さて……な。想像は出来るが、何にせよリウイたちと合流した方が良さそうだ」

「ふう……帰還の門が無いのは痛いわねえ」

「魔物は出てこぬのじゃ。それに、最初の扉まで戻るだけじゃ。問題ない！」

そして、3人は来た道を戻っていった。

迷宮部分には帰還の門が設置されていたので、取り敢えずそこま
で戻ればゆっくり出来る。

「3人がいない？」

起床し食堂に足を運んだりリウイは、その報告に眉を顰めた。

「はい。宿の主人の話では、明け方近く外に出て行ったそうです。恐らくは近くの迷宮に向かったのでは……との事です。現に、リンス様の部屋にこの様な書き置きが残されておりました」

「そうか。主導は考えるまでもなくリファイアだな。まったく……リンスとマリーニヤが抑え役になってくれていることを信じよう。」

と、言うわけで俺たちは用事が出来た。お前たちはどうする？」

「俺たちも同行しよう。……エクリアが心配している」

「すまない。感謝する」

「気にするな。騒がしいのも嫌いじゃない」

取るべき行動を決め、食事をすませる。

リウイとしては直ぐさま行きたいところではあるが、何の準備も無しに行動は出来ない。

それに、隠しているようではあったが、リンスが身に着けている

物からパイモンの気配が感じられた。自分を主に戴くことを望んでいる以上、リファイアたちの安全は保証されたと考えても問題はないだろう。傍にいて護らなかつたとあれば、自分の怒りは間違いないパイモンへと……引いては闇へと向かう。それは更なる光への傾倒であり、パイモンとしても望むところでは無いはずだ。

（何だろうな、この感じは……？）

協力することを即答した次の瞬間、セリカは自身の言動に戸惑っていた。

エクリアをダシにしてしまったが、それは後付の理由に過ぎない。自分でも分からぬままに協力することを述べてしまい、自身の瞳にエクリアが入ったからこそ、それを理由として告げた。

自身でも不明な理由。それは一体何だろうか？

（まあいい。分かるときが来れば自ずと分かる）

早々と思考にケリを着け、セリカは静かに箸を進めた。

「ウム、美味しいぞ」

「同意です。美味しいですよ、マリーニヤさん」

「はは、ありがと。けど、リンスのも充分に美味しいわよ」

「そう言ってもらえると嬉しいですね」

迷宮から出た3人は、暖かな陽射しを浴びつつ遅めの朝食を取っていた。

メニューはサンドイッチやフライドポテトなど、歩きながらも食べられる物であり、用意したのはマリーニャとリンスである。

風の中に、咀嚼音が静かに流れる。

「見付けたぞ。まったく……あまり心配をかけさせるな」

食事を終わると同時に、リウイたちがやって来た。

「すまないな。……少しばかり中を調べてみたが、この迷宮は中々に面白そうだ。セリカ殿も連れてきたのは好都合。一緒に探索と行きましょう」

「何故、俺がいると好都合なんだ」

「開いたり開かなかったりする扉があるんです。全部を試したわけではないので推測でしかありませんが、恐らくは、純粹な人間にしか開けられない扉、現神に所縁ある者にしか開けられない扉、そして古神に所縁ある者にしか開けられない扉の三つに分けられていると思います」

「……それで俺か」

「はい。俺たちが開けることの出来た扉の中には何れも転移門がありました。転移門の先には行ってないので、その先に何かあるかは分かりませんが、恐らくは仕掛けか何かがあると思われる。行ける範囲の最奥には大きな扉があり、それには三つの絵が描かれていますので……」

「……いいだろう。元よりアテのない旅路。寄り道をするのも一興だ」

そして、一行は迷宮の最奥を目指して進んでいった。

「さて……一体何だったのだろうか？」

最奥の扉の中で、リウイは呟いた。

途中の扉を開くと、何れも転移門があった。

どの転移門の先にも危険は一切無く、延々と異なる映像を見せられただけだった。

例えば、父親を追い求める少年の成長譚であったり、桃色の髪を持つ少女とその騎士たる黒髪の少年の冒険譚であったり、後に魔王と呼ばれる少女の話であったり、拠り所を護ったが故に拠り所を失う事となった少年の話であったり、他にも様々だった。

そうして、全ての映像を見終えると、巨大な扉が開いたわけである。

時代背景もてんでんばらばらであり、何の意味があったのかサッパリと分からない。

悩む一行の耳に、リンスの声が届けられた。

「え〜と『共生者たちよ……我が遊戯場へ……ようこそ。……鍵たる……映像は……定められし……流れである』……か？ 難しくて読み辛いな。『異なる結末を……開きし者には……応じた……加護を授けよう』……で、合ってるはず。『全ての……結末を……開くことを……望む』……これで終わりだ」

リンスが壁に書かれた文章を読み終えると同時に、入り口から見て左方向の壁がスライドし、隠された道が現れた。

「『遊戯場』とな？」

「これにはそう書かれている。遊ぶんなら道の先に行け……そういうことだろうな」

皆がどうしようかと悩む。

「行ってみるか……。遊戯に興味は無いが、此程までに大がかりな仕掛けだ。ならば、『加護』とやらもそれ相応のものだろう」

「一理ある……。か。それに、もしかしたらこれは先史文明を題材にした物かもしれんしな……」

「決まりね」

道を進むと広間があり、等間隔に扉が設置されていた。

扉には遊戯のタイトルと思しき物が書かれており、その下には、幾つかの長方形が描かれている。

長方形同士が線で結ばれており、長方形の中に文字の書かれている部分と書かれていない部分があったので、恐らくはこれが用意された結末であり、或いは流れの中の分岐点なのだろう。

扉を開くと、やはり転移門があった。

転移門は、扉によって一つだったり二つだったりと分かれており、また、目盛りと思しき物が付随している転移門も存在した。

「数が多いな」

「どうする？」

見たところ、目盛りは時代調節をするための物であるらしい。

目盛りが付いているということは、それだけ永い期間を題材にしている遊戯であり、目盛りが付いていないのは、一定期間を題材にしていると思われる。

前者後者問わず結末の数はバラバラであり、どれが早く終わる……ということも無いみたいだ。

「転移門の数は、遊戯の中に異なる世界があるか否かによるようだ。各々が黙考する。」

実際に永い時間を拘束されるのであれば、リウイやセリカたちならばまだしも、純粋な人間であるマリーニヤは耐えられない。

「? そう言えば、マリーニヤはどこじゃ?」

「リンス様もおられません」

初めてリンスとマリーニヤがいないことに気付く。

探しに行こうとしたところで足跡が響き、リンスとマリーニヤが現れる。 どうやら、今まで来ていなかったらしい。

「入り口の所に注意書きがあった。目盛りは時代調節用らしい。で、転移門も異なる世界が用意されているかどうかで数が分かれているってさ。永い期間を題材にした遊戯も、フラグとかいう奴を回収するための物であって、実際に永い期間を過ごす必要はなく、遊戯である以上、止めようと思えばいつでも止める事が出来る。その他にも、複数参加可能な遊戯と不可能な遊戯があり、中には最初は1人だけしか出来ないが、途中から複数参加できる遊戯もあるらしい」

リンスの言葉に、皆が首を傾げる。

「注意書きなぞあったのか? 余は気が付かなかったぞ」

「うん。床の様相がそのまま注意書きになっててさ。もう、読み難いのなんのって」

言って、コキコキと首を鳴らす。

「まあ、何はともあれ、これで安心して遊戯をする事が出来る! 皆で完全制覇を目指すのじゃ〜!」

「おー! って、皆ノリが悪いわね〜」

ただ1人、リファイに次いで拳を掲げたカーリアンが口を尖らせる。

「俺のキャラではありませんので……」

「は、はは……」

リンスの言葉とマリーニヤの乾いた笑いが、広間に響き渡った。

プロローグ（後書き）

VERITAをやったら、ふと書きたくなりました。
妄想の産物ではありますが、感想をもらえると嬉しいです。

開始（前書き）

取り敢えずオリ主編。

5 / 2 2 サブタイトル変更。

開始

転移を終えたリンスは、その眩しさに手を翳した。

「どうやらここは屋外であるらしい。燦々と降り注ぐ陽の眩しさが、何よりも雄弁に証明していた。」

「転移門は……無いな。止めようと思えばいつでも止められるとあったが、どうすればいいんだ……？」

周囲を確認しながら、リンスは呟いた。

「転移門が無いのは妥当な所だと思う。」

「舞台の中にまで存在しているのは、それは現実の一端であり最早『遊戯』と呼べないだろう。そうは思うが、終了方法が分からない。……終了方法が分からないのでは、やはりそれも『遊戯』と呼べない。」

「思考するリンスは、ふと、自分の服装が変化していることに気が付いた。」

「冒険に出るとあって装備していた鎧や武器が無くなっており、代わりに平時を過ごす私服を身に着けていた。せめてもの救いは、パイモンが変化した首飾りはそのままだということだろうか……。」

「パイモン？」

（「何でしょうか？ リンス様」）

「いや、確認がてら……な。しかし、いくら遊びとは言えこれはハッキリと拙いな」

「試しに首飾りに声を掛けてみれば、しっかりとパイモンから念話が帰ってきた。」

「その事に僅かながら安堵の息を吐いたリンスだったが、それを聞

いた瞬間、表情を引き締めて零した。

耳に届いたのは咆吼。

何の咆吼かまでは不明だが、少なくとも観賞動物の類ではあるまい。

焦りつつも冷静に、現時点の自分に出来る対処を確認する。

咆吼とは逆方向にダッシュ。……身体能力は変わらないようだ。

これならば、最低限逃走することは出来る。出来るが、所詮は一時しのぎに過ぎない。今いる場所が分からない以上、向かいうる結末は想像に難くない。

とは言え、たとえ一時であろうとも時間を稼げることが分かったのだ。

それだけで、取り得る行動の範囲と幅が広がりを増す。

「ん？ これは……？」

いくらか落ち着きを取り戻したリンスは、ポケットに何かが入っていることに気付いた。

「なるほどな。しかし、こっちは何だ？ 機械の様だが……」

ポケットの中から取りだした物を見て、リンスは装備の行方に関して納得を得た。

ポケットの中に入っていたのは二つ。

一つは自身の絵やらが描かれたカード。もう一つは、それと同程度の大きさである機械。

機械に関しては後で調べるとして、リンスは行動の範囲と幅を更に広げることにした。

それ則ち、己の安全の確保にして咆吼の主の撃退。

手段は既に得た。カードがそれを可能とする。

カードは”仮契約カード”と呼ばれる物だ。

遊戯を始める前に見た『鍵たる映像』とやらで、名称も使用法も判明している。

「さて……己が道を斬り開くとするか」

瞳を鋭くし咆吼が聞こえた方角へと向き直ったリンスは、カードを掲げて静かに言霊を放った。

「来たれ……！」

「あ奴……一体何者じゃ？」

彼女は、我知らずそう零していた。

無自覚に零したのだから、それは決して疑問ではない。しかし言葉として放たれてしまった以上、彼女の同行者は、それを己に対する問い掛けだと思ってしまった。

「分からないわ。アリアドネー（アリアドネー）の騎士である可能性もあるけど、アレほどの腕前を持つているのなら、まず間違いなく覚えている。

なのに思い浮かばない以上、違う可能性が高いわね。……そもそも、うちの騎士だったら迂闊に『魔獣の森』になんて入らないだろうし、たとえ入ったとしても『餌場』には行かない筈よ」

故に同行者は答えたが、それは『正体不明』という事実を浮き彫りにしただけであった。

「ふうむ。ラカンとどつちが強いかのう？」

「さあ？ 普通に考えれば『生けるバグキャラ』ジャック・ラカンだとは思うけど……あの少年も全然力を入れてないみたいだし、今はどうとも言えないわね……」

「よし！ 決めたぞ、セラス。妾はあの者を我が護衛にスカウトする」

「テオ……。ふう……。いいわ、言っても聞かないだろうし、交渉は私も手伝ってあげる」

アリアドネー騎士団総長セラスは、言い出したら聞かないヘラス帝国第三皇女テオドラの言葉に溜息を吐いたのだった。

「何と言うか……。弱いな。さっき焦ったのがバカバカしく思えるほど……」

それが、リンスの素直な感想だった。

目の前にいるのは咆吼の主である黒龍。

その威圧感といい、爪牙やブレスの威力といい、龍の名を持つに相応しいとリンスは思う。しかし、それだけだ。

目の前の黒龍のそれは、ハッキリ言ってカファルーに劣る。

「どうするかな……。？ 殺るのも可哀想だし……」

使い慣れた刃を振るいながら、リンスは思案する。

襲いかかってくる以上、返り討ちにしても問題はないだろう。

そうは思うが、コレが放牧中の誰かのペットである可能性も捨て

きれない。

「はあ……仕方ない。戦意喪失願うとするか」

溜息を吐き、リンスは魔術の詠唱に入る。

隙だらけとなってしまうが、今までの遣り取りから然程のダメージを負わないだろう自信がある。

現在装備しているアクセサリ『首飾り・パイモン』の依存スキルである『手加減』を発動しているので、間違っても殺すことはない。

地道に攻撃し続けても良いのだが、そんな事をしていては間違いなく日が暮れてしまうだろう。そうなってしまつては、情報収集も何もあつたものではない。

「闇に沈め……！」

言葉と共に放たれたのは、暗黒の槍。

その名を『死愛の魔槍』といい、封印王ソロモンの力を源とする魔術槍である。

ターゲットは一体しか選択できないが、付加価値がそれを補つて余りある。

時間と共に戦意を低下させる『恐慌』状態と魔術を使用不可能にする『沈黙』状態を引き起こし、ついでとばかりに相手の体力を吸収する『HP吸収』効果も持っている。

その効力に比例してそこその魔力を消費するが、その点も問題ない。

深凌の楔魔にして、ソロモン七十二柱の一柱でもあるパイモンの実力は伊達ではないらしい。

彼が変化した首飾りを装備しているだけで、時間と共に消費した魔力が回復する『MP再生』や魔力の消費を抑える『賢者の魔力』

を始め、様々な効果を得る事が出来ているのだ。

自身が未熟であるが故に、その全てを引き出す事は出来ていないが、それでも充分である。

「ここが貴様の終焉だ……！」

ダメ押しにもう一発放つ。

放たれたのはクリティカルな一撃だったが、やはり死ぬ事はない。それから然程の間をおかず戦意を喪失した黒龍は、リンスに向かって静かにその頭を垂れた。

「ん？ 俺に仕えたいのか？」

その所作を見たリンスは、言葉が通じないと分かっているながらも問い掛けずにはいらなかった。

そして、そんなリンスの問いに答えるかのように、黒龍はグルルと息を吐く。

「いいだろう！ 今からお前は俺の仲間だ！」

リンスは高らかに宣言する。

意に沿わぬ者を仲間や配下にする際は精神戦で屈服させる必要があるが、自ら望むとあればその限りではない。

「思いがけず仲間を得る事になったが、さてどうするか……？」

黒龍の背に乗ったリンスは、次の行動を考える。

移動範囲は格段に広がったが、逆に情報を得るのは難しくなった。

如何に自分に従う事になったとは言え、龍は龍だ。

街や村など、人のいる場所へと連れて行くのは問題があるだろう。ここみたいに森とかが近くにあるならば大丈夫だろうが、そんな場所は限られているだろうし、そもそも自分はその場所すら知らない。

「ま、ここは行動あるのみか……」

ある種開き直ったリンスは、黒龍に指示を出す。
指示を受けた黒龍は、雄叫びを上げて、空へと飛んだ。

「暇じゃ……」

授業中の教室で、リフィアは呟いた。
頬杖をつき、その瞳は窓の外へと向けられている。

「それではこの英文の訳を……リフィアさん、お願いします」

誰かが何かを言ってるが、そんなものは自然と聞き流す。

この舞台は先史文明を題材にしているのだろう。使われている文字は古代語と呼称されるものであった。

本来ならそれらを解読するのは楽しい筈なのだが、ちっとも楽しくなかった。

時間は掛かれども、一つ一つ、悪戦苦闘しながら理解していくのが楽しいのだ。

時にふて腐れ、時に投げ出したくなるが故に、理解した瞬間の喜びも一入ひとひらなのだ。

しかし、やはりこれは『遊戯』に過ぎないのだろう。

言葉はどうか分からないが、文字に関しては、古代語で書かれた文字の上に自らがよく知る文字で訳されており、己が文字で書いても自動的に古代語へと変換される始末である。

純粹に『遊戯』として見れば面倒が無くて楽なのだろうが、異なる視点から見れば興ざめな事この上ない。

「あのく、リフィアさん？」

やはり誰かが何かを言っているが、またしても聞き流す。

今現在のリフィアの見地から言えば、楽しいのは『人付き合い』だけである。

この舞台から抜け出せば自身は王族の身であり、この様に気さくな会話をする事が出来る相手　つまりは『友人』と呼べる存在　など限られてくる。……精々がマリーニヤとエヴリーヌくらいであろう。

それ故に放課後や休み時間以外は、リフィアにとって暇な事この上なかった。

「はあ……つまらん。　あぐつ！？」

深い溜息を吐いたリフィアの頭頂部に、予期せぬ衝撃が訪れた。

頭をさすりつつ後ろを見れば、マリーニヤが怒気を顕わに微笑んでいた。

その拳は握りしめられており、殴られたのだと分かる。

「マリーニヤ、一体何をするか！」

「うっさい！　当てられてるんだから、さっさと問題を解きなさい！」

抗議の声を上げるも一言で片付けられ、片付けた当人は黒板を指

さす。

流石にそうまで言われれば、殴られた理由も自業自得と分かる。理解したが故に文句を言う事はないが、痛いものは痛い。頭をさすりつつ、リフィアは黒板の前へと進む。

「……これで良いか？」

思案も何もせずさっさと訳を書いたリフィアは、自分を当てた人物へとつまらなげに問い掛ける。

「あ、はい。……結構です」

問われた教師は、どもりつつもOKを出した。

「はあ……暇だ」

席へと戻るリフィアの眩きは 彼女の意図ではなかったが 教師を苛む事となった。

「少々訊きたい事があるのですが、構いませんか？」

「あ、ああ……。何じゃ？」

目の前の少年の問いに、テオドラはどもりながらも返す。

テオドラとしても、少年をスカウトするつもりだったので話しかけられた事に関しては問題ない。問題なのは、少年が黒龍から降り立ったという事実である。

黒龍と言えどもピンからキリまでいるのは違いないが、何れにしてもそう簡単にヒトが倒せる存在ではない。

それでも、倒すだけならばまだ分かる。　　が、この少年は従えているのだ。

如何ほどの実力があればそんな事が可能となるのか、テオドラには想像も出来ない。

穏健な龍ならば、まだ分からないでもない。　　しかし、黒龍は総じて凶暴であり、それに加えて、目の前に鎮座しているのは『魔獣の森』に住まう龍なのだ。

その事実がテオドラを驚愕させると同時、より少年を欲しくさせてしまった。

「ここが何処になるのか教えて欲しいのですが？」

「その質問に答えるのは構わないけど……貴方、時間に余裕はあるかしら？」

「ええ。まあ……」

「こちらとしても貴方に訊きたい事があります。余裕があるのであれば、近くに私が長を務める学園があるので同行してもらえないかしら？」

その言葉を受けて、リンスは暫し思考する。

同行するのは吝かでない。地図も何も無いのだ。口頭で説明されるよりも理解できるだろう。

眼前の女性たちは、恐らくテオドラとセラスだと思われる。

その人柄は　『鍵たる映像』で見た限り　信じるに値する。

「……コイツも連れてって大丈夫ですか？」

「まあ……何とかなるでしょう」

当然の如き問い掛けに、セラスは肯定を以て返した。

「ん？ おお！ マリーニヤよ、リンスからメッセージが届いたぞ！」

「うん。私にも届いた」

「楽しみじゃな。数日中には来るらしい」

手に持つ機械を見ながら、リフィアは喜びを顕わにマリーニヤに告げた。

隣に座るマリーニヤも、機械を見ながら言葉を返す。

この機械は『遊戯』を始めると同時に持っていた物であるが、回収した『フラグ』の確認機能やプレイヤー同士の連絡機能など、様々な機能を持っていた。

最初の内は意味の分からない言葉もあったが、すんなりと理解する事が出来た。

自分たちと異なる転移門に入ったリンスは、僅かであるが開始時期からして異なっていたらしい。

そうは言っても、一晩寝ただけで数日経っている時もあったそうだ。

その事から考えるに、実際に行動するのはフラグを回収する時だけみたいである。

自分たちは連日行動しているが、実際の主人公であるネギがいるのだからそれも当然かと思う。

プレイヤーである自分たちは介入者であり、フラグを得なければ介入できない制限がある。

同じクラスであるにも拘わらず、最初の内はネギや明日菜と会話する事すら出来なかった。 彼らは開始時からのメインキャラク

ターであるが故に、会話するにもフラグが必要だったのだ。

その事を知ったのは、この時点ではサブキャラクターである夕映と仲良くなった時だった。

夕映と仲良くなる事によってのどかや木乃香を紹介され、木乃香と仲良くなる事によって明日菜を紹介された。

一方のリンスは、この時点では何ら話題に上らない”魔法世界”からの開始である。

必然的に彼が得られるフラグは少なくなり、瞬く間に時が過ぎ去ったようだ。

「しかし……長つたらしい役職名じゃな」

「それには同意するわ」

リフィアの言葉に、マリーニヤは一も二もなく同意した。

「『ヘラス帝国第三皇女テオドラ専属護衛騎士長』リンス・アリア・マーシルンです」

リンスはテオドラから渡された身分証を提示しつつ、異様に頭の長い老人へと自己紹介をした。

今現在彼がいるのは、麻帆良学園の学園長室である。

リンスとこの部屋の主である近衛近右衛門以外にも、2名の姿があった。

白いスーツを着た眼鏡の男性と中等部の制服を着た金髪の少女である。

「よく来られた。当学園の学園長を務めている近衛近右衛門じゃ」
「同じく、当学園にて広域指導員を務めていますタカミチ・T・高畑です」

「フン……エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

それぞれが自己紹介をすませて、話は本題へと入る。

「さて、早速ですが俺は何を？ 我が姫からは『麻帆良へ行け』としか言われていないものでして……」

「やって欲しい仕事は二つ。魔法生徒を鍛える事と特定人物の護衛じゃ」

「ただまあ、その肩書きを伏せたままやって欲しいんだ」

「フム……この世界は魔法が秘匿されているとの事ですし、その条件も理解できます」

近右衛門とタカミチの言葉に、リンスは納得の声を出す。

「これがその資料じゃ」

近右衛門がA4サイズほどの茶封筒を差し出してくる。

二つあるので、魔法生徒用と護衛対象用に分かれているのだろう。

「拝見します」

資料には生徒の名前、在籍する学校とクラス、客観的に見た性格と実力が書かれていた。

「なるほど……」

目を通し終えたリンスは、ポツリと呟いた。

どちらの資料にも、リフィアとマリーニヤの名前は載っていない。
った。

その時点で、実力云々の信憑性は無いに等しい。
純粋な人間であるマリーニヤはともかくとして、リフィアは膨大な
な魔力を持っている。

今ここにいるだけでも、その魔力を感じ取ることが出来るほどだ。
この部屋の面々もそれには気付いているはずだ。 にも拘わら
ず載っていない。

(考えられる理由としては、上手いこと一般人を装っているからな
のだろうが……)

だが、たとえそうだとしても、痕跡を一切出さない事など不可能
だ。

しっかりと見ていれば、2人の力量の一端を垣間見ることも出来
たはずである。

(危機管理意識が低いということか……)

結論に達したリンスは、静かに告げた。

「了解しました。 が、やり方は俺に一任させていただきます」

「ほう？ どうするつもりだ？」

「取り敢えずは、自分の目で確かめさせてもらいます。 それ以外は
その後で決めますよ。 悪いが教室へ案内していただけるかな？」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「……着いてこい」

リンスが立ち上がり、エヴァンジェリンが先導する。

「さて、吉と出るか凶と出るか……」

両者が立ち去った後で近右衛門が零した言葉は、扉に遮られて届くことはなかった。

「それでは、これでホームルームを終了します。皆さん気を付けて帰ってくださいね」

麻帆良学園本校女子中等部3・A担任であるネギ・スプリングフィールドの言葉が終わると同時に、それまで静かだった教室は一気に喧騒に包まれた。

部活へ行く者、そのまま帰る者、それぞれが準備するのを横目にネギが教室から出ようとしたところで、前触れもなく扉が音を立てて開かれた。

「……ここだ」

「どうも」

入ってきたのは、学園長に呼び出されていたエヴァンジェリンと、見知らぬ少年だった。

蒼の中、微妙に金と黒が混ざっている髪。鋭い深紅の瞳。充分に『美少年』と呼べるだろう。

「あの、貴方は？」

「……………」

ネギが少年に尋ねるが、少年は言葉を返すことなく教室内を見渡している。

「前途多難だな……」

「は？」

少年の発した言葉に、ネギは思わず疑問を漏らす。……どんな穿った見方をしても、自分の問いに対する答えだとは思えない。

「リンス・アリア・マーシルン。フリーの何でも屋。学園長である近右衛門より仕事の依頼を受けた。依頼内容はまだ秘密。これでも年齢は18を超している」

尚も教室内を見渡しながら、ネギに目を向けることなくリンスは淡々と呟く。

「ウム！ ようやく来たか！」

「さつさと帰りましょ？」

リフィアが無駄に居丈高に述べ、そんな彼女を押しながらマリニーヤがリンスの元へとやって来る。

「ああ。悪いが早速案内を頼む。物凄く眠い」

魔法世界と違い無駄に気を付けることが多かったために、リンスの精神的疲労は大きかった。

そして、この学園の危機管理意識の低さがそれに輪を掛けていた。自分が教室内に入ると同時に様々な視線が寄せられた。

好奇や警戒はまだ分かる。

異端や正体不明に対するものはどこもかしこも変わらない……そ

う言っことなのだろう。

しかし、軽く警戒のレベルを越した視線の主もいた。それはただけでない。護衛として本末転倒である。

護衛の仕事は主の身を護ることであり、そのための一番の方法は『敵を作らない』ことである。

名乗りを上げた今現在も、視線の温度は変わらない。

「本当に前途多難だ……」

リフィアに手を引かれつつ、リンスは深い溜息を吐いたのだった。

「お帰りなさい。まだ数分しか経っていませんが、もう終わったのですか？」

部屋に着くと同時に『遊戯』を止めた3人を迎えたのは、ペテレーネの言葉だった。

「たったの数分じゃと!？」

リフィアが驚きの声を上げた。……声こそ上げなかったものの、リンスとマリーニヤの表情も驚愕に染められていた。

「まあ、そういう物であると認識しておいた方が良くいんだろうな……。装備類も自動で変更されているし、カードに加えて機械も無くなっている」

「? どういう事ですか？」

リンスの呟きにペテレーネが聞き返す。

「上手くは説明できないが、装備類はそれぞれの『遊戯』に相応しい物に自動的に変更されているらしい。俺たちが入っていた『魔法先生ネギま!』であれば、『仮契約カード』の『アーティファクト』扱いになっていた。機械の方はカードと一緒に持っていた物で、色々な効果を持っている。恐らくは、言語や文字の変換もそれによるものだろう」

「そうなのか？」

「確証はない。それでも、中と外で明らかに違うのは機械の有無だけだ。文字が違うのは明らかである以上、機械による効果だと考えるのが妥当だろう。カードの方は必ずしも持ち運ぶ必要が無いが、機械の方はそうじゃなかったことから、そう結論付けるのが普通だ」

リンスの言葉に、リフィアとマリーニヤは理解の色を示す。

彼女たちは常に持ち歩いていたが故に試した事は無かったが、言われてみれば納得できる。

言わば、あの機械はプレイヤーである証なのだろう。

カードを持っていないからこそ、起こり得られるフラグはあっても、機械がなければフラグ自体が発生しない。

そもそも、プレイヤーであり介入者であるからこそ、自分たちはフラグを必要とするのだ。　　そうでなければ、そんな七面倒な事は御免である。

「ところで、ペテレーネは遊ばんのか？　他の者たちは遊んでいるのじゃろっ？」

「何で遊ぶか迷ってしまいました……」

リフィアの言葉に対するペテレーネの返答は順当なものであった。最初から複数参加が出来たからこそ、自分たちは『魔法先生ネギま!』を選んだのである。が、それは殆ど例外みたいなものであり、大抵は個人参加から始まるようだ。

「ま、そこら辺は個人の自由だろう」

言って、リンスは再び転移門へと入っていった。

「待たぬか！ 行くぞ、マリーニャ！」

「はいはい」

リンスに続いてリフィアとマリーニャも転移門へと入っていく。

「行ってらっしゃいませ」

見送ったペテレーネの言葉が、静かに響き渡った。

「ソファアを借りるぞ」

言うなり、2人の許可も得ずリンスは横になる。

それから然程間をおかず、リンスの寝息が聞こえてきた。

「寝付き良いわね」

「それだけ疲れておったと言う事じゃな……。それはともかく、さっさとフラグを確認するぞ」

マリーニヤの感想に答え、リフィアは機械を操作する。

回収したフラグを確認することによって、介入できるイベントの有無が表示される。逆を言えば、例えフラグを回収していても、確認していなければイベントには介入できない。

「はいはいっと。……あれ？何か増えてるわね……」

「恐らくはリンスの回収した物じゃろうな」

マリーニヤの呟きにリフィアが答える。

アリアドネーやヘラスの名称を見る限りでは、そうとしか思えなかった。

「キーフラグやエンドフラグも幾らか回収されてるわね」

この機械によると、フラグは三種類に分かれているらしい。

まず一つは人物フラグである。

人と人には繋がりがあ。それぞれが線で結ばれているのだ。

その一方で、結ばれていない者もいる。

線は太さが異なっており、太ければ太いほど親密関係にある。

親密度の高い人物ほど紹介されやすく、紹介されるには紹介者との仲を深める必要がある。

また、この繋がりは時間と共に変動する事もある。

夕映を例に挙げると、のどかとの線が一番太く、次いで木乃香とハルナ。だいぶ太さが変わってバカレンジャーと言った感じで、その他のクラスメイトとは結ばれていない。

つまり、現時点で夕映から紹介されるのは図書館探検部とバカレンジャーのみであり、その中でものどかが一番紹介されやすいと言いうことである。

二つめがキーフラグである。

これはイベントに介入する際に必要となる物だ。キーフラグは一つで済む場合もあれば、複数必要となる場合もある。

単純に必要な数が少ないほどイベントの重要度が低いわけでもなく、あればあるだけ困らない。

また、これを必要とせずとも必ず起こる強制イベントが存在する。三つ目がエンドフラグである。

これは異なる結末を迎えるために必要となる。

その結末自体も一つだけではないようで、これもあればあるだけ困らない。

そんなキーフラグやエンドフラグが回収されているのは大きい。

「フム……。現在介入できるイベントは『桜通りの吸血鬼』か……」
「まだ余裕はあるし、リンスが起きてから決めても問題ないんじゃない？」

イベントの介入も善し悪しである。

たとえばAと言うイベントに介入したが故に、Bと言うイベントに介入できない事がある。

また、介入の際に制限を受けることもあるのだ。

その制限も様々で、人数制限の場合もあれば性別による制限の場合もある。

それ故に、安易に決めるのは問題があった。

「そうじゃな……。介入できるイベントが増える可能性もある。今は保留としておこう」

なので、リフィアはひとまず先送りにする事にした。

リンスは、初めての強制イベントを夢に見ていた。

「本気　いや、正気ですか？」

テオドラとセラスに案内された場所で、開口一番告げられたその言葉の内容を吟味した上で、リンスはそう言葉を返していた。

「本気だし正気じゃ！」

一方のテオドラは真正面から肯定していた。

流石にリンスも呆気にとられた。

この『遊戯』における自分の立場がどの様なものかは分からないが、それでも怪しいことに変わりないだろう自分を護衛にする。…
…目の前の人物、ヘラス帝国第三皇女であるテオドラはそう宣ってくれたのだ。

「何故でしょうか？　俺は貴女方との面識はないはずです」

「なに、そう大した理由ではない。一つは御主の強さが欲しいと思つた。黒龍相手に手加減したままで勝ち、その上　こつという言い方はアレじゃが　支配下に置く者など妾は初めて見た」

「その点には私も同意するわ」

理由を尋ねるリンスにテオドラが答えセラスが同意する。

「もう一つの理由として……これはカンじゃが、御主ネコを被つてるじゃろっつ？」

次いで、ニヤリとしながらテオドラが放った言葉を聞いたリンスは

「……は、はは、よく分かりましたね？」

苦笑しつつ、肯定した。

「なに、妾も従者の目があるところや表舞台ではネコを被っておるからの。しかし、正直に言えば疲れることこの上ないのじゃ」

「それには同意だな。まあ、俺の場合敬うに値する人物が相手であれば、猫を被らずとも敬語で接するが……」

「……では、妾は敬うに値しないと？」

「今現在は……の注釈が付くけどな」

「正直な男じゃな。だからこそ、妾の護衛に欲しいんじゃないが？」

リンスは暫し思考する。

これは願ってもない話でもあった。

帝国の第三皇女……この後ろ盾は、情報を収集する上でも役に立つだろう。

そして、この屈託のなさ。……どことなくリフィアを彷彿とさせる。

「OKだ。その話、呑もう」

「フム……その割に敬語は無しか？」

「俺が貴方を認めた時には敬語を使わせていただくよ。ああ、忘れていた。俺の名はリンス。リンス・アリア・マーシルンだ」

そして、リンスはテオドラの護衛となった。

開始（後書き）

次は誰を書こう……？
リウイにするかセリカにするか……。

変革（前書き）

妄想があっちへ行ったりこっちへ来たり。
お待たせしました。第3話です。

変革

……それは『遊戯』の筈であり、その刻までは真実『遊戯』であった。しかし、たった一つの行動によって、『遊戯』は『現実』へと変革した。

鳴り響くのは金属音。

澄んだ音の場合もあれば、耳障りな場合もある。

等間隔で鳴るかと思えば、いきなりリズムが変化する。

その光景は彼女たちの現実を超えており、それが故に夢だと思いたいのが正直なところであった。だが、耳に響くその音が……否応なく『現実』だと告げていた。

(一体全体、今日は何だったのよ……?)

目の前で繰り広げられている、とても現実と思えない現実を見つめながら、神楽坂明日菜はそんな事を思った。

鳴り響いている金属音。……その正体は槍と剣の激突音である。そう分かつてはいるのだが、眼前の光景を見ただけではとても分らない。

何故ならば、実像が捉えられないのだ。

槍と剣が立てている音であるが故に、当然の如く使用者が存在する。

よって、両者が離れた際や動きを止めた際には、その実像が認識できる。

しかし一度激突すれば、正体が分かっているにも拘わらず 正体が分からなくなる。

そして、激突した際にも使用者の姿だけはハッキリと認識出来ており、その事実が音に輪を掛けて『現実』だと証明していた。

槍の使用者は、まるで『青』を代名詞としているかの様な男。…ランサーと名乗っていた。

他方、剣を使っているのは、クラスメイトであるリフィア・イリーナ・マーシルンの従弟だという少年。…リンス・アリア・マーシルンという名前だ。

激突音が鳴り響きながらも、使用者の姿はハッキリと分かり、それでいて得物の姿はボヤけて見える。

自分の担任、ネギ・スプリングフィールドが『魔法使い』だと知った時にも大層驚いたものだったが、眼前の光景に比べれば、そんなものはどうということがない。

如何に魔法使いであろうと、ネギからは 子供である事も関係しているのだろうか 恐怖感を感じないのだ。

恐怖感という点で見れば、まだ出会って間もないが、普段のリンスからも感じる事はない。

だが、それはあくまでも普段であり 今のリンスからは恐怖を感じる事この上ない。

その一方で、確かな安心感もまた、リンスから感じるのだ。

「……ばれ」

自分の口が刻んだ言葉を、明日菜は認識していない。故に、それは無意識から出た言葉。

「頑張れ」

再度、無意識に同じ言葉を刻んだ。

それは応援の言葉。

それは、ある種の感情の表れ。

「負けるな」

またもや無意識に出た言葉であったが　今度は発した事に気付いた。

そして、その事に気付いてしまえば、明日菜に迷いはなかった。

「頑張れ！　負けんじやないわよ！　勝ちなさい、リンス！」

己が意識下で、ハッキリと告げる。

明日菜は、リンスに負けて欲しくないと思っている。

この状況下では様々な理由が思い当たり、どれが一番強いのかは分からない。

それでも、ハッキリと分かる事があった。

今日、リンスがエヴァンジェリンにした行為を見た際に自分が抱いた感情が、どこかへ行ってしまったという事。

そして、恐怖を感じているにも拘わらず、今の自分が笑顔である事。

言葉に出した今の自分は、リンスの勝利を微塵も疑っていないという事だ。

「当然だ！」

そんな明日菜に答えるかのようなリンスの咆吼が、鳴り響く金属音を貫いた。

のどかの悲鳴が聞こえ、その場に駆けつけたネギ、明日菜、木乃香の3名は、その光景を現実のものとして認識するまでに多少の時間を必要とした。

場所は桜通りであり、そこには悲鳴の主であるのどかがいた。……どうやら気絶しているようだが、まあそれはいい。

他に、長い金の髪を靡かせた黒ずくめの格好をした人物と蒼い髪が映える少年もいた。……それも構わない。

故に、異常なのは他の要因による。

「む……むぐっ……んむっ……んーっ……んんっ……」

それは荒い息遣いであったり、艶めかしい女性の声であったり、聞こえるはずのない水音であった。

「んう……むーっ……むっっ……んくっ……んむっ……!？」

一言で現せば、金髪の少女が蒼髪の少年にキス　それもディーブなやつをされていた。

「ぶはあっ……どうだった？　気持ちよかっただろ？」

「キ、キサマ……!」

唇を離して問い掛ける少年に、少女は怨嗟の声を出す。

「ちよつとアンタ！　女の子に何やってんのよ!」

「そ、そうです!」

「ネギ・スプリングフィールドに神楽坂明日菜嬢か……。明日菜嬢はともかくとして、お前に言われる筋合いはないなネギ少年。俺は

ただ宮崎のどか嬢を護つたにすぎんよ。なあ？ 『桜通りの吸血鬼』
エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル嬢？」

顔を赤くしつつも詰め寄る明日菜とネギに対し、少年は何処吹く
風と切り返す。

「つて、誰かと思えばリンス君やん？」

「おや？ 名前を覚えていただいているとは光栄だね、近衛木乃香
嬢」

「木乃香嬢つて……何や照れるわ」

「はは、照れることはない。美人は男の賛辞を受けて、より輝いて
いくものだ。 とは言え、照れた顔が可愛いのも事実だがな」

声を揃え、リンスと木乃香が笑う。

「ま、それはともかくとして、後はお前の仕事だよネギ少年。父親
の犯した罪を償ってこい」
「ど、どういうことですか？」

リンスの言葉に、ネギは目で見えるほど狼狽する。

「それは本人に直接確認することだ。俺は木乃香嬢とのどか嬢を寮
へと送り届けるんでな」

「……私は？」

「君次第だな、明日菜嬢。送って欲しいのなら一緒に送り届けるし、
ネギ少年が心配なら同行すればいい。……今現在、君の立場は非常
に微妙だ。まあどちらにしろ早いか遅いかの違いでしかないと思
うが、よく考えて決めることだ。……もつとも、俺個人の感想を言
わせてもらえば一緒に来た方が良くと思うがな」

「なんでよ？」

「大した理由じゃない。美人を抱きたいと思うのは男として当然……それだけの事だ」

リンスの言葉に明日菜はハツとする。

そう、リンスはエヴァンジェリンにディープなキスをしていたのだ。

確かにネギも心配である。

しかし、自分が着いていかなかった場合、木乃香とのどかがどうなるか？

明日菜の脳裏に浮かんだのは、リンスにディープキスをされて悶える木乃香とのどかの姿であった。

考えすぎだと思いたいが、現実にかかる可能性がヒシヒシとする。

「あーもうっ！ 私もアンタと一緒に行くわよ！」

結果、明日菜はリンス　　と言うよりは、木乃香とのどか　　と

一緒に行く事を選択した。

「良い答えだ」

その言葉を聞いたリンスは、笑顔で言ったのだった。

(さて、ここから先はどうなるか……?)

のどかを抱き抱え、明日菜や木乃香と共に女子寮への道を歩きながらリンスは思考する。

今起こっている事は、最早『遊戯』ではなく『現実』である。

事の切欠は数日前。

この『魔法先生ネギま!』という『遊戯』の舞台で、リフィアにマリーニヤと合流したその日の翌日。

眠りから目覚めたリンスに、兩名がどうするかを訊いてきた。

その時のリンスの返答によっては、未だ『遊戯』であったのだから。しかし、それは既に取り返し効かない『過去』となった。

(悩んでも仕方ない……。己が『未来』を決めるのは、常に己の選択だけだ。引いては、それが周囲の、そして世界の『未来』をも変える。……やってやるさ。リウイに出来たんだ。ならば、俺に出来ない道理はない)

決意を新たにすると同時に、リンスはそれを感じた。

「止まれ。 いや、後ろに下がれ」

「え？ ちよ……!？」

のどかを明日菜に渡し、2人を庇うように前へと出ながら、リンスは警告する。

急にのどかを渡された明日菜は文句を言おうとしたが、自然と口は閉じられた。

リンスの言葉の意味が、明日菜にも理解できたからだ。 いや、

正確には何も理解できてなどいない。

ただ、本能で分かったただけだ。

自分たちは、現在非常に危険な状況にある。……それこそ、死んでもおかしくないほどに。

そして、それが分かったのは明日菜だけではない。

「え……なんやの……これ……?」

「お嬢様っ!」

木乃香と、彼女を影から護衛していた刹那もだ。
木乃香の顔は蒼白と化し、思わず出てきた刹那にしても、その全身が震えている。

それでも尚木乃香を護ろうと前に出ようとする刹那だったが、リンスの腕に遮られた。

「動くなと言った。……下手に動かれると護りきれん」
「……くっ」

言い返そうにも、刹那は言い返せなかった。

自分は恐怖に吞まれ全身が震えていると言うのに、リンスはまるで平常なのだ。

「どこのどいつだ？ 折角この娘たちを巻き込まないようにしたつてのに……」

「そいつは悪かったな。だが、クソつまらねえ仕事に従事させられてた矢先、テメエみてえな強者をみかけちゃったら……普通は見過ぎす事なんか出来ねえだろう？」

リンスのぼやきに答えるかのように、その存在はゆっくりと姿を現した。

その存在を一言で現すならば、『青』か『騎士』といったところだろうか？

此程の存在感を持っているならば、そしてそれを知っているならば、どれで言っても通じるだろう。

全身を包む青に、所々銀が奔っている。逆立ったその髪も青だといつのに、その手に握るものだけが、真紅と異彩を放っている。

いや、異彩を放っているのは色だけではない。

異彩と言っているのであれば、形状からしてそうであろう。

それは槍。禍々しさすら感じるほどに紅い槍だった。

この現代社会においては、武器というだけで異彩を放っている。

「ま、こいつを見れば分かるだろうが、俺はランサーだ。さて、テメエは何のサーヴァント いや、言わなくていい。試してみりゃあ……すぐに分かんたろうっ！」

言つと同時に、ランサーは突っ込んできた。

瞬く間に距離が縮まっていく。

「チツ……っ！」

速度のままに繰り出される刺突。

リンスは舌打ちしながらも、即座に己の得物を抜いてそれを弾く。ギヤイン……と、耳障りな金属音が木霊した。

「ま、当然防がれるよな」

奇襲に近い一撃を防がれたにも拘わらず、ランサーからは落胆の色が見受けられない。

自身の言葉通り、防がれて当然だと思っているのだろう。

「イキナリだな」

「ああ？ 何言ってやがる？ サーヴァント同士が出会ったんだ。やることなんか一つしかねえんだし、全然イキナリじゃねえだろうが？」

リンスの言葉にも、当然の如くそう返してきた。

「大剣か……。と、なるとテメエがセイバーか？ まあ、精々楽し

ませてくれよ？

でなきゃ、その心臓貰い受けるぜ？」

リンスの武器を見ながら飄々と語るランサーだったが、不意に態度を一転させる。

己が得物を構えたその姿には微塵の油断もなく、その身から放たれる殺気にしても、先の一撃の比ではない。

「はぁ……仕方ない」

溜息を吐きつつ、リンスは己が得物を左右に割った。

両刃の大剣が、二振りの刀へと変化する。

「待たせたな。我が連撃……受けきれるか！」

二刀を構えるリンスもまた、ランサーへと殺気を向ける。

「ハッ……征くぜ！」

「フツ……征くぞ！」

そして、両者は激突した。

「どうする？ そろそろ止めに入る？」

桜の木に腰掛けて、その光景を眺めつつ、マリーニャはリフィアへと問い掛けた。

眼下では、エヴァンジェリンから父親の所行を聞かされている最

中のネギが打ち拉がれている。

リンスに唇を奪われた八つ当たりも兼ねているのだろう。

落とし穴という単純な罠に掛かり、ご丁寧にも水浸しであったが故に溺れてしまい、更にはニンニクやらネギやらを投げ込まれて幻術が解け、最後には”登校地獄”の呪いを掛けられたという、自身の汚点でもあるその話を、エヴァンジェリンは嬉々として語っていた。……どうやら、頭に血が上っており冷静な判断が出来ていないらしい。

「フム……まだ必要なだろう。聞いてて面白いし……何より、未だ実害は出ていない」

「それはそうんだけどさ。何て言うか……居た堪れなくなってくんのよね」

リフィアの言葉通り、端から見聞きしている分には面白いし、精神的なダメージはあれども、物理的なダメージをネギは負っていない。

それは事実なのであるが、普段のエヴァンジェリンの態度を知っているマリーニャとしては、彼女が正気に戻った時の事を想像すると、精神的にクくるものがある。

「……何であろうか？」

リフィアの口から疑問が放たれる。

何だかんだでそこそこ付き合いの永いマリーニャは、その言葉に込められた重さに気付いた。

リフィアの視線を追う。

「……何？」

マリーニヤも疑問を零した。
そう遠くない場所で、空間が歪んでいる。
その様は、まるで水面に波紋が奔っているかのよう。
規則正しさと不規則さを併せ持っているように見える。

「え？ 何で……？」

歪みが消えたかと思えば、そこには4つの人影があった。
4人共に女性である。

その内の3人は初見であるが、残りの1人は知っていた。

「ルナ！」

叫び、リフィアは枝から飛び降りる。

「ちょ……待ちなさい、リフィア！」

続き、マリーニヤも飛び降りた。

「その声は……リフィア皇女にマリーニヤ？」

声が聞こえたのだろう、ルナと呼ばれた女性が振り向く。

「おお！ やはりルナだ！ 一体今のはどうやったのだ？」

長い黒髪を翻らせる、その女性の名はルナ・クリア。

かつてマーズテリアに仕え、教団を見限った後は『神殺し』セリカ・シルフィルの使徒となり、今まで一緒に旅してきた、リフィアとマリーニヤの仲間である。

「どう……と言われても、答えようがないわね。無理矢理に休暇を取って4人で買い物をしていたら、突然周囲の景色が歪んで、気が付いたらここにいたのだから。そうそう、紹介しておくわね。こちらは私の友人たちよ」

人差し指を口元に当てつつ、僅かに首を傾げながら、ルナ「クリアはリフィアに答える。

次いで、手を打ち合わせ、一緒に現れた3名へと手を向ける。

「こちらは高町なのは。……『魔王』の二つ名で呼ばれてたりするわ」

「高町なのはです。よろしくね。……って言うか、ルナさん！ 誰が『魔王』ですか！」

なのはと呼ばれた女性は自己紹介した後、思い出したようにルナ「クリアへと喰って掛かった。

「こちらはフェイト・T・ハラオウン。……一若干バトルマニア戦闘狂な部分があるから気を付けてちょうだいね」

「初めまして。フェイト・T・ハラオウンです。……で、誰が戦闘狂ですか？」

続いて紹介されたフェイトという女性は一礼した後、その眼光を鋭くしてルナ「クリアへと睨みを入れた。

「最後は八神はやて。……狡賢い子狸だから、気を抜いてると罠に落ちるわよ」

「八神はやてや。よろしゅう。……って、誰が子狸やねん！」

最後に紹介された八神はやてという女性の行動は、なのはと同じ

ようなものだったが、その動きにはどこか洗練されたものがあつた。

「ウム！ よろしく頼む。余はリフィア・イリーナ・マーシルンである」

「あ、どうも……。マリーニャ・クラブです」

こちららも自己紹介をする。顔には出さなかつたものの、ルナはクリアらしからぬ言葉に戸惑いを覚えたマリーニャであつたが、敢えて考えないようにした。

「そちらの方たちは紹介をしてもらえないのかしら？」

言われ、彼女の視線を追ってみれば、担任の少年と同級生の金髪少女がいた。

(うわ……。すっかり忘れてた)

目の前で起こつた現象に気を取られて、2人の存在をすっかりと忘れていた。

もしここが戦場であつたならば、場合によってはあの世行きである。

「ウム……。こちらは余等の学友と担任である！」

そんなマリーニャの気持ちを露知らぬリフィアの言葉には、相も変わらず無駄な勢いがある。

「こつちの赤毛の子が担任のネギ・スプリングフィールド先生で、こつちの金髪の娘が同級生のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルよ」

「あ、どうも……」
「フン……」

マリーニヤの紹介に、イギリス紳士を自称するネギは一礼したものの、エヴァンジェリンは鼻を鳴らすに留めていた。

「初めまして。エヴァンジェリンさん？ ちょっとよろしいかしら？」
「何だ」

ルナ＝クリアの呼び掛けに、そっぽを向いたまま答えるエヴァンジェリン。

「活力を……」
「！？ これは……。ルナ＝クリアとかいったな。一体どうやった？」

しかし、次の瞬間には変化を迎えていた。
言葉と共にルナ＝クリアから放たれた光。
それを浴びると同時に、自身に掛けられていた呪いが解け、全盛の力を取り戻していたからだ。

エヴァンジェリンの呪いを解くことは、麻帆良学園の学園長にして関東魔法協会の理事たる近衛近右衛門にも不可能だった。しかし、このルナ＝クリアという女性は、それを軽々とやってのけたのだ。

その方法を問うのは、至極当然であろう。

「どう……と言われても、浄化の光を当てただけですか？」

問われたルナ＝クリアも当然のように答える。

浄化の光は、所謂状態不良バッド・ステータスを治すための魔術である。流石に全てを治せるわけではないが、大概の状態不良は完治できる。

ルナ「クリアから見たエヴァンジェリンは、軒並み『〜』低下』状態にあったので、取り敢えず浄化の光を当ててみたのである。

その結果、エヴァンジェリンに掛けられていた呪いが解呪されたのだ。

「フム……聞いた事がないな。治癒系の魔法は使うのこそ苦手だが、それでも一通りは調べたのだが……」

「恐らく、この世界には存在しないのだと思いますよ？」

エヴァンジェリンの呟きに、ルナ「クリアに何事かを確認したフェイトが口を挟む。

「それは……どういう意味だ？」

「そうですね。世界は決して単一ではなく、いくつも存在します。

そして世界が異なれば、当然の如く似て非なる事柄が存在します」

「例えば……私たちの場合、魔法を使うのには『リンカーコア』を持つているのが前提なんだけど、ルナさんは持っていないの。にも拘わらず、ルナさんは魔法を使うことが出来る」

「それは私たちとルナさんの扱う魔法が根本から違うからや。どちらかと言うと、私たちの使う魔法は科学的な側面が強い。けど、ルナさんの魔法はその逆や」

エヴァンジェリンの問い掛けに、フェイト、なのは、はやてが順に答える。

「私たちは職業柄異世界のヒトに出会うことは少なくないんだけど、ルナさんと出会った時にはそれまでの常識が壊されたしね……」

「時空震も何も検知しなかったのに、突然私たちの目の前に現れたんだもの……」

「あの時はマジでビビったわ。まあ、そのお陰で上にはルナさんの事を知られずに済んでるんやけど……」

「そうそう。上に知られちゃったら……多分、終焉を迎えるわよね」

段々と話がズレていったが、垣間見えるルナ「クリアの恐ろしさ」に、エヴァンジェリンは口を挟めなかった。

「……………!?」「……………」

瞬間　ネギを除いた　面々が、油断なく、同時に構えた。

見据える方角は、中等部の女子寮。

「え？　え？」

ネギは、そんな一同の行動が理解できず、オロオロと首を振る。

「尋常ならざる殺気と魔力だな……」

「それに、微かに聞こえる金属音……」

「誰かが戦っている……?」

「私たちも行くで!」

「そうね。片方は仲間みたいだし……」

「こりゃ気を抜けないわね……」

「ウム……リンスが此程までに実力を出すとなれば、相手は最低でも神格者レベルであるな……」

見合わせ、頷き、女性陣は音源へと向かっていった。

「ま、待ってくださいーい!」

何が起こっているのかは分からないが、ネギも慌てて後を追った。

「妙だな……。まさかとは思うが、ひよっとしてテメエはサーヴァントじゃねえのか？」

一際強い激突音を響かせた直後、後方へと飛び下がったランサーは、怪訝そうにリンスへと問い掛けた。

現在、ランサーは”令呪”によって縛られている。

そのため、サーヴァント相手だと全力を発揮することが出来ないでいた。

この縛りは、自分以外のサーヴァント全てと戦わない限り解除されず、現時点で自分が戦ったのはライダー、キャスター、バーサーカーと、イレギュラーサーヴァントのみ。

当然、解除されている筈がない。　だというのに、リンス相手には全力を発揮する事が出来る。

ならば、考えられるのはただ一つ。

非常に有り得ない事だとは思うが、この蒼髪の少年はサーヴァントではない。

しかし、実際に戦りあったわけではないが、イレギュラーサーヴァントのマスターもまた、強者の気配を放っていたのだ。

そしてよくよく見てみれば、イレギュラーサーヴァントのマスターとこの少年の風貌は似通っている。

決して考えられない事ではない。

最初はセイバーかと思ったイレギュラーサーヴァントのクラスは
パラディン
聖騎士。

そのパラディンに『陛下』と呼ばれていた男。
マスターの名前くらいは聞いておくべきだったか……と、今更ながらにランサーは後悔した。

パラディンと戦り合ったのは、バーサーカーと戦った直後だ。
流石に消耗しきっており、最低限戦って早々と逃げ帰ったわけである。

その時はそれが最善の行動であった事に間違いはない。が、
やはり後悔は先に立たないものだ。

「ようやく話を聞く気になったか……」

ランサーの問い掛けに、リンスは深々と溜息を吐いた。

未だ発展途上なリンスとしては、強者との戦いは望むところであり、真実ランサーは強者であった。しかし、如何せんタイミン
グが悪かった。

己の背後には 自分視点で 無力な少女が4名。

彼女らに気を回しつつ戦うのは、流石に消耗が激しい。

「察しの通り、俺はサーヴァントとやらではない。俺の名はリンス・
アリア・マーシルン。こちらとしても、貴公の名を教えて欲しいのだが？」

「そうだな。名乗られたら名乗り返さないわけにはいかねえか……。
ま、テメエはマスターでもサーヴァントでもないみたいだし、別に
構わんだろ。赤枝の騎士、クー・フリーンだ」

互いに自己紹介を交わしたその時だった。

「大丈夫!？」

新たなる女性の声が響いた。

振り向かないでも、リンスには声の主がマリーニヤだと分かった。それから間をおかず、複数の気配がその場集った。

「ヒュウ……イイ女揃いじゃねえか。おい、リンス……テメエの知り合いか？」

「急に馴れ馴れしくなったな。知り合いもいるが、全員じゃない」

その場に現れた人員を見て、先程までの戦り合いを気にする素振りもなく、ランサーがリンスへと問い掛ける。

若干呆れつつも、その気持ちも分からなくはないので、リンスは素直に答えておいた。

何せ、全員が美女・美少女なのだ。1人例外が混ざっているが、リンスとランサーは、自然にその少年を無視シカトしていた。

日本には『英雄色を好む』という諺がある。

リンスとランサーは知らなかったが、両者の気質は見事に当て嵌まっていた。

ランサーは文字通りの英雄だから仕方ないにして、リンスの場合やはり受け継いだ血による部分が大きい。

そも、彼の祖父はリウイ・マーシルン。

イリーナという美人の正妻を持ち、その愛情も確かであったがそれと同時に、部下を側室にし、同盟国の協力者（にも手を出している剛の漢だ。……リンスの祖母は、この『同盟国の協力者』に該当する。

その食指が動く条件は、相手が『美』を冠するに相応しいかどうかのみ

望む望まないに拘わらず、リンスはこの性質を見事に受け継いでいた。

そして、そんな似通った気質の2人であったから、当然の如くその行動も似通ったのだった。

「俺はリンスといいます。お名前を教えてくださいますが、お姉様方？」

「俺はランサーで通ってる者だが、名前を覚えてもらえるかい、お嬢ちゃんたち？」

まあ、一言で言えばナンパであった。

「イキナリそれかぁーっ！」

次の瞬間、明日菜とマリーニヤは物理的にツッコミを入れていた。明日菜はリンスに跳び蹴りをかまし、マリーニヤはランサーへと拳の一撃を。

「ぐは……！」

「ぐふ……！」

そして、2人の男は大地に沈んだ。

リンスの場合、余裕で避けれる攻撃だったが、魅せる戦いで上げた と、本人は思っている。明日菜の好感度をこれ以上下げないために敢えて喰らった。

ランサーの場合、マリーニヤの動きが想像以上だったためだ。

後にランサーは『本気の俺とタメを張れる動きだった』と述懐したとかしなかったとか……。

共通して言えるのは、その威力が想像以上に重かった……という事である。

「活力を……」

斃れた2人に、ルナクリアの魔術が掛けられる。

その術の名は聖なる蘇生。……瀕死状態へと陥った者を完全復活

させる魔術である。

「っあゝ……………」

「ッテテ……………」

即座に、伏していた2人が頭を振りつつ起き上がった。

「チツ……………またコレか」

起き上がったランサーは、周囲を見渡し呟いた。
ランサーの周囲が、目に見えて歪んでいた。

「運があつたら、また戦り合おうぜ……………！」

その言葉を残し、歪みが消えると同時にランサーも消えていた。
そして、消えるのはランサーだけではなかった。

「あら？ 私たちも……………みたいね」

その言葉に横を見れば、ルナックリアたちの周囲も歪んでいた。

「御心のままに……………。また会いましょう」

「またね」

「それじゃあ」

「またなゝ」

それぞれに言葉を残し、女性たちも消え去った。

ここに……例え一時とはいえ、本来交わることのない世界、交わることのない物語が重なった。

それは『未だ知られざる結末』へと続く序章にして、新たなる『真実 VERITA』が刻まれる物語の幕開け。

そして『神殺し』と『半魔人の闇王』に続く、新たなる『世界の律を手繰る者』が産声を上げた瞬間であった。

変革（後書き）

そんなわけでランサーの兄貴にお越し願いました。

今話でお気付きの方もいらっしゃると思いますが、妄想の元はスパロボとディケイドです。

もし『この作品の〇〇というキャラを出して』という方がおられましたら、感想のついでにタイトルとキャラ名をお書き下さい。

自分の拙い筆力と妄想で可能であれば、そして自分がその作品を知っていれば、登場させるかもしれません。……尚、巨大ロボット物は勘弁を。

妄想の元がスパロボだから上記の旨を書いてみたけど、そんな方がいるんだろうか……？

運命（前書き）

我ながらサブタイトルが合っていない感が……。

運命

それは偶然だったのか……？

それとも必然だったのか……？

確かな答えは誰にも分からない。

分かることはただ一つ。……確定された時点で、それが運命と化したことである。

「問おう。貴方が私のマスターか？」

突然現れた美少女にそう問われてから然程経っていない。に
も拘わらず、色んな事が起こりすぎてる。

それが、衛宮士郎の抱いた率直な感想だった。

いや、色んな事というのであれば、少女と会う前からしてそうであらう。

学校にて慎二からの頼まれ事を済ませたその帰り、校庭で人外同士の殺し合いを目の当たりにした。

立ち去ろうとした際に気付かれ、慌てて逃げたものの結局は逃げ切れず、自分は死んだ 殺された筈だった。

だというのに自分は生きており、這々の体で家に帰ってみれば、自分を殺した男に再び襲われ、そして少女が現れた。

少女は、その細身からは想像できぬほどに男を圧倒し かと思えば、男の槍に貫かれた。

それでも少女は生きており、男は舌打ち混じりに退散した。

夥しいほどの血を流していた少女の傷は次の瞬間に消えており、それを含めて問い詰めた矢先『新手が来た』と屋敷の外へと出て行

った。

後を追った自分が見たのは、校庭で先程の槍男と戦っていた相手を一撃の下に斬り伏せ、その背後にいた少女へと斬りかからんとするセイバーだった。

無我夢中でそれを止め、斬られかけていた少女が遠坂凜と判明し、彼女から今回の事の説明を受けた。

そして『行くところがあるから同行して』と遠坂に言われた直後に呼び鈴が鳴った。

「こんな時間に一体誰だ……？」

ぼやきながらも扉を開ければ、自分の親友である柳洞一成がそこにいた。

「フム……流石にこの時間であれば帰っておったか。夜分遅くにすまぬ。衛宮への預かり物を届けに来た。学校帰りに一度寄ったのだが、生憎と不在だったのな……」

そんな事を言いながら、一成は可愛らしい小袋を土郎へと渡す。

「わざわざ悪いな。けど、何だってこんな時間に？ 明日じゃダメだったのか？」

「ダメというわけではないが、預かった以上、出来るだけ早く渡すのが礼儀というものだ。それに、明日になってから渡したのでは、自分が預かった意味がない」

当然であろう土郎の問いに、一成も当然の如くそう返す。

「だが、最近は物騒だろう？ 大丈夫だったのか？」

「無論だ。そも、近頃物騒であるからこそ預かったのだし、心強い御仁が護衛を務めて下さっているのでは……」

「心強い御仁？」

一成の言葉に、思わず土郎は問い返す。

確かに、柳洞寺には零観や多くの修行僧を始め、世間一般で心強いと評される人材はいる。しかし、今現在の土郎にとっては首を傾げざるを得ない。

そこらのゴロツキあたりであれば、何ら問題はないだろう。

だが、もしもあの人外と遭遇してしまったならば、その末路は簡単に想像できる。

(遠坂に着いていく前に、一成を送り届けなきゃいけないか……?)

土郎がそう考えるのは、寧ろ当然であった。が、間もなく考えを改めることになった。

「そういえば紹介したことが無かったな……。うむ。丁度良い。この場で紹介するでしょう。暫し待っておれ」

そう言い放って、一成は門の外へと歩いて行く。

待つと言うほどの時間も経たぬ内に、二つの人影を連れて一成が戻ってきた。

「衛宮、こちらが今し方話した御仁だ。男性の方がリウイ・マーシリン殿。女性の方がシルフィア・ルーハンス殿だ。お二方、こちらが自分の親友、衛宮土郎です」

一成が間に立ち、お互いを紹介する。

「どうも、衛宮士郎です」

「リウイだ。よろしく頼む」

順当な自己紹介は、次の瞬間に様相を変えた。

「シルフィア・ルーハンスと申します。……バリエイン聖騎士のクラスを戴いております」

シルフィアと名乗る女性のその言葉。

「何ですってー！ーっ!?!」

その意味を士郎が理解するよりも早く　聞き耳を立てていたのだろう　凜の叫びが木霊した。

「動きが甘いですよ……!」

「うわっ……!?!」

メイド服を着た女性に、少年は軽々と転ばされた。

少年の名は平賀才人。

幸か不幸か、平々凡々な高校生であったのだが、異世界のハルケギニア大陸はトリステイン魔法学院の生徒、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……通称『ゼロのルイズ』

に召喚されてしまったのである。

そして、自身の意志とは関係のないところで召喚主であるルイズと口づけを交わすこととなり、その結果、ルイズの『使い魔』となつてしまった少年だ。

少女とのキスは『幸』なのかもしれないが　やはり、全体的に見れば『不幸』であろう。

一方、メイド服の女性の名はエクリア・フェミリス。

トリステイン王国の王女にしてルイズの幼馴染み、アンリエッタ・ド・トリステイン専属メイドである。　とは言っても、別に忠誠を誓っているわけではないらしい。

この2人が何をやっているかと言えば、手合わせの名を借りた、エクリア主導の才人の訓練である。

本日、アンリエッタが魔法学院の視察を敢行し、専属メイドという立場上、エクリアもこれに同行。

そして日が暮れた現在、アンリエッタはルイズの元を訪れている。何をしに訊ねに行ったのかはエクリアも理解しているので、振り回されることになるであろう少年を鍛えているのだ。

王宮内において『我が儘王女』と思われている感のあるアンリエッタだが、実際の彼女は聡明である。　いや、出会ったばかりの頃はその評判も間違つてなかったのだが、今現在は違う。

その言動からは我が儘を感じさせるも、その実確かな思惑があつて動いている。

政略によりゲルマニアへと嫁ぐ予定のアンリエッタだが、彼女は自らの想い人である、従兄にしてアルビオン王国の皇太子、ウエルズ・テューダーへと恋文を渡していた。

そして現在、アルビオンでは貴族派と王統派に分かれて内乱が起こっている。

貴族派が優勢であり、王統派の敗北は時間の問題……昨今はこの様な情報ばかりが入っており、それが真実だとすれば、トリステインにとっては喜ばしくない。

このまま貴族派が勝利すれば、当然の如く次の狙いはトリステインであろう。

そして実際に攻め込まれば、トリステインの敗北は濃厚である。それを回避するための政略結婚であるが、ウェールズへと渡した恋文が問題となる。

恋文を回収しようにも、アンリエッタ自らが行くことは出来ない。……アンリエッタが動けば当然の如く軍が護衛に付き、結果として大事になってしまふので意味がない。

そんな時に入った情報。……最近巷を騒がす怪盗『土くれのフーケ』の捕縛と、それを成し遂げた者たちの名前。

居ても立ってもいられず、視察にかこつけてその捕縛者の1人……自身の幼馴染みであるルイズに手紙の回収を頼みに来た。それが表向きの理由である。

表向きだけで全くの嘘ではない。が、ほかにも理由が存在するのだ。

「どうしました？ もう終わりなのですか？」

「っ……まだまだっ……！」

その理由を知っているがために、エクリアは才人を鍛える。……これ見よがしに挑発して、自身へと向かってこさせる。

幼馴染みとはいえ、自身の我が儘で公爵家の息女を動かすのだから、その間の世話係として信を置くメイドを同行させる……という、これまた表向きの理由でエクリアも同行することになる。

腕には覚えのあるエクリアだが、過信してはいない。何が起こるか分からないのが世の常だからだ。

その予期せぬ事態が起こった際に取れる選択肢を増やすため、エクリアは才人を鍛えている。

「まだ武器に　いえ、そのルーンに振り回されています」

「うおっ！？ …… った」

最小限の動きで才人の攻撃を回避し、カウンターの一撃を入れる。

(これも『才能』でしょうか……？)

まだまだ余裕のあるエクリアだが、才人には目を見張るものがあった。

そも、エクリアが才人を鍛えるのには、ルイズの使い魔　ガン　ダールヴ　であること以外にも理由があった。

それは、才人から微かに感じる魔力。　エクリアとて余程注意しなければ感じ取れない微々たる量ではあるが、秘められた力はバカに出来ない。

ともすれば自身の義弟、リウイ・マーシルンに匹敵するかもしれない。……そう感じさせるほどだ。

その気になれば神にも匹敵する力を秘めているリウイだが、それを完全開放する事は闇に堕ちるのと同義だ。

故に、『人と魔の共存』を理想に掲げるリウイは、普段その力を封印している。……まあ、僅かに開放することはあるが、それでも完全に開放することはない。

才人はそんなリウイに匹敵するかもしれない力を秘めており、それでいて自覚していないようだ。

もし才人がその力を自覚したらどうなるか……？　暴走した挙げ句に自滅するだろう事は想像に難くない。そしてその際に周囲を巻き込むであろう事も……。

自身の中で様々な思いが絡み合った結果、エクリアは才人を鍛える事にした。

魔力の制御には様々な要素が絡み合う。

肉体を鍛えておくだけでも、安全性は格段に上がる。……また、同時に精神も鍛えられる。

そして、そんなエクリアの思惑は良い意味で裏切られていた。才人の成長速度と習熟具合は半端じゃなかった。

エクリアが注意すれば注意しただけ、目に見えて動きが良くなっ
ていく。ただの一般市民だったという才人の経歴からはとても
信じられないほどだ。

今は自身の動きとルーンの動きが咬み合っていないようだが、ル
ーンを制御しさえすれば、或いはルーンに合わせる事さえ可能にな
れば、そこいらの者など相手になるまい。

(フフ……本当に楽しいですね)

そのお転婆振りが、どこかリフィアを彷彿とさせるアンリエッタ。
どこまで成長するのか予想も付かない才人は、どこかリンスを思
わせる。

「さあ、今度はこちらから行きますよ……!!」

そんな思いを顔には出さず、エクリアは才人へと向かっていった。

ある夜の、とある高層ビル。

その最上階の一室から光芒が漏れていた。しかし、部屋を照
らすにはまるで足りない。

光芒の正体はパソコンのモニターだった。
パソコンの前に座るのは、端正な顔立ちをした青年だ。
投資企業『D & P』の若社長。

それが青年 登太牙の表向きの役職だった。

彼は『ファンガイア』という異種族を統べる、キングと呼ばれる存在である。もつとも、今現在は弟と共同で行っているが……。ファンガイアは人間の生命エネルギーである、通称ライフエナジーを糧としている。

つまり、ファンガイアにとって人間は食料でしかない。

太牙自身、それを忌避してはいなかったのだが、様々な体験と経験を経て、現在は『人とファンガイアが共存できる世界』を目指し、ライフエナジーに代わる新エネルギーの開発に着手している。

当然のことながら、そう簡単に完成する筈がない。

それでも、徐々に見通しが付いてきた近頃 問題が発生した。

ここ最近、奇妙な現象が多発しているのである。

それは空間の歪み。

気付く者と気付かない者がいるようで、両者の違いも不明だが、それだけならば大した問題ではない。

問題なのは、その現象が起こり始めてから ファンガイアと人間問わず 行方不明者が続発している事だ。

その様な状況で、開発、及びそれに伴う実験が順調に進むわけがない。

なので、この問題を早期に解決するためにも、太牙自ら情報の収集と整理に勤しんでいたのだ。

「また電気を点けないで……。目を悪くするよ、本当に」

そんな呆れ混じりの声が聞こえたかと思えば、白光が部屋全体を照らし出す。

「ああ、忘れていた。すまないな渡」

画面から目を離し、声の主 弟の紅渡へと向き直りながら太牙は謝罪する。

だが、その顔に浮かんでいるのはこれ以上ないほどの笑みであり、本当に悪いと思っっているかは甚だ疑問である。

「どう、状況は？」

「芳しくないな。行方不明者の行動範囲と歪みの発生地点が重なっている箇所もあるが、それだけでは判断できない。……圧倒的に歪みの目撃例が少ないんだ。『歪みの中に人が消えていった』という稀有な目撃情報もあるにはあるが、今度は行方不明者と一致しない部分もある」

表情と声の鋭さを変えた渡の問いに、太牙も表情を改めて答える。その声には、隠しきれない苦々しさが含まれていた。

「そつちの方はどうなんだ？」

今度は太牙が渡へと問い掛ける。

太牙と渡はそれぞれ違う手段で情報を収集しているのだ。

太牙は、主にネットや仕事の付き合いから収集している。……所謂上層階級の者たちは、変人だと思われるのを防ぐためか、こんな突飛な話には中々付き合わない。だが、酔わせてしまえば、こんな話にも付き合ってくれる場合が殆どなのだ。

一方の渡は、主に口コミの情報を収集している。……渡自身は話し下手な部分があるが、襟立健吾や野村静香 自称『渡のお母さん』を名乗る年下の少女である という友人がいたので協力を頼んでいた。

結果、時に重複している情報もあるが、時に新たな情報が得られていた。

「うん……ここで『歪みを見た』って話があったみたい。あと、こつちで『人が消えた』ってという話も……」

画面上に開かれた地図を指さしながら、渡は入手した情報を話す。

「このこと……ここだな。 どうした？ まだ何か情報があるのか？」

情報を入力した太牙は、渡の表情を見て問い掛けた。

「関係あるかは分からないんだけど、歪みから自転車に乗った高校生くらいの子供が現れて、暫く進んだと思っただら急に止まって変な動きをして、かと思っただら消えたんだって……」

渡は自信なさげに話す。

「確かに妙だな……」

渡の話聞いた太牙は呟いた。

歪みを通って消えている人がいる以上、逆に歪みを通って現れる人がいてもおかしくはない。

そう思ったから、そっちに関する情報も収集してはいる。

しかし、現状その手の情報は皆無だ。

それが、ここに来て入ってきた。

継続して情報を集める見込みが出てきたのはいいが、更なる問題も出てきた。

変な動きは分からないでもない。……自分がいた場所ではない、そう気付いたが故の動きと捉える事も出来るからだ。

問題は、暫く進んだ先で消えたという事だ。

暫く進んだという事は、歪みから離れたと考えていいだろう。

歪みから離れ、にも拘わらず人が消えた。

これは『歪み以外にも人が消える要因がある』という事だ。

目撃者は歪みを視認している。しかし、何故消えたかは不明。ここから考えられるのは、『歪みと別の要因は、そのベクトルが違ふ』という事。

「……待て！ 渡、その少年が消えた場所と日時は分かるか？」
「ちよつと待つて」

不意に、太牙はある可能性に思い至つた。
太牙の問いに、渡はメモ帳を捲る。

「場所は……で、日時は……日の……時頃だね」

渡の告げた答えは太牙を確信へと至らせた。

自身のパートナーであるキバツトバツト？世が、膨大な魔力を感じた日時と方角。

それと渡の告げた内容が一致している。

「渡、以前キバツト？世が魔力を感知した事がなかったか？」

太牙は確信をより高めるために、渡にも確認する。

「どう？ キバツト。心当たり……ある？」

渡は知らなかったのか、キバツトバツト？世へと訊ねる。

「うーん……つとそうだ！ その日時と場所！ この間感じたスッゲー魔力の発生地点だ！ いや、反応が消えるのが早かったからすっかり忘れてたぜ」

暫し動きを止めたかと思えば、次の瞬間には渡の周囲をバサバサ

と飛び回りつつキバツトバツト？世は答えた。

「渡、その少年が消えたのは……恐らく召喚でもされたのだろう。魔法が廃れ科学が発達したこの世界において、その様な事を可能とする者など存在しない筈だ。故に考えられるのは別次元からの干渉……だが、もし本当にそうだとするならば、僕たちにはその少年を救う術がない」

キバツトバツト？世の言葉に、より確信を高めた太牙だったが、その表情は暗い。

そして、紡がれる言葉も重かった。

次元を超えて召喚するなど、並の術者に出来るはずがない。

余程魔力が高く、そして術式に精通していなければ、そんな事は不可能なはずだ。

高魔力という点で考えれば、変身した自分たちなら問題ないだろう。

だが、如何に魔力が高かろうとも、自分たちには次元に干渉する術がない。

時間と次元は似て非なるが故に、キャッスルドラン内にある『時間の扉』を用いようとも不可能だ。

知識さえあれば可能ともなるうが、失われて久しい昨今、可能性は皆無に等しい。

「今、僕らがその少年に対して出来る事は、安否を願う事だけだ」

重い言葉が室内に木霊した。

「そんな……」

返す言葉も、また重かった。

「君の奨学金はAランクになる。学費は免除ということだね。君は自分の生活費を稼ぐ程度に……………」

淡々と語る目の前の青年……………ここ、学園都市ツエルニの生徒会長、カリアン・ロスの言葉は　しかし、一般教養科の新生、レイフオン・アルセイフにはハッキリと聞こえていなかった。

それでも、言っている内容は理解できた。

長々と語っているが、本題自体は既に終えているのだ。

では、何話が終わらないのか？

簡単だ。レイフオンが　カリ안의望む　返答を言っていないからだ。

それはレイフオンにしてみれば当然であった。

自分は間違った。それが故に武芸を捨て、新たな道を探しに来たのだ。　なのに、何故ここまで来て武芸を行わなければならない

……………！

激情渦巻き、レイフオンは叫びたくなるも、そうする事が出来な
いでいた。

大気が汚染されているこの荒廃した世界において、人々は『自立
ギョース
型移動都市』での居住を余儀なくされている。

当然ながら都市は一つだけではなく、学園都市・槍殻都市・交通
都市など多岐に渡る。　それが故に、都市間を行き来する情報な
ど限られてくる。

名称を例に挙げれば、それがその都市にとってどれだけ重大な意
味を持つとも、都市を移れば噂にも上らないのが普通だ。　だ
と言つのに、カリアンは知っていた。

レイフォン・ヴォルフシュティン・アルセイフ……カリアンはこ
う呼んだのだ。

姓と名の上に付けられた呼称。

それは、かつてのレイフォンを現す名前。自らの過ちにより剥奪
された名前。

そしてその名を知られている以上、どれだけの時間を粘るうとも、
レイフォンはカリアンの望み通りの答えを言うしかない。

それはカリアンとて分かっているだろうに、語る事でレイフォン
の逃げ道を埋め、さっさと答えを言わせようとする辛辣さだ。

「僕は……」

頷きたくはない。 しかし頷かなければどうなる……？

感情から来る理性。
理性を伴う感情。

互いが互いにぶつかり合い、ついにレイフォンが答えを言おうと
した刹那。

「そこまでにしておけ」

ぶつきらばうな声が静かに響いた。

「君か……」

次いで聞こえたのはカリアンの声。 しかし、苦々しさ……と
でも言うのだろうか？ そんなものが見え隠れしている。

（綺麗な女性だな……）

顔を上げたレイフォンは、先程までいなかった人物を見て、第一

にそう思った。

どこか修道女シスターを思わせる服装に、帽子から零れる紅い髪が映えている。本来なら異質であろう、腰に差している剣も、何故かその女性にはよく似合っていた。

(つて剣……!?)

見間違いかと思ってもう一度見る。
間違いなく剣だった。

(アレは……タイト練金鋼じゃない)

この御時世においては、実剣などレア中のレアである。
ある所にはあるだろうが、利便性では練金鋼の方が上回っている。
練金鋼は『剽脈』と呼ばれる内臓器官を持っている『武者』しか扱う事が出来ないが、それでも特に問題は出ていない。

剣…… 武器を振るう相手など、同じ武者か、或いは人類共通の天敵である『汚染獣』しかないからだ。

汚染した大気を栄養源として取り込む事の出来る汚染獣は、より効率的な栄養源として人間を喰らうために都市へと襲撃をかけてくることがある。

そして都市防衛のために武者は前線に出る。

確かに実剣ならば一般人でも使えるだろう。

それは間違いないが、『一般人は武者に敵わず、武者も1人では汚染獣に敵わない』と言うのが共通認識である。

故に 全ての都市を知っているわけではないので断言は出来ないが 実剣など最早造られてはいないだろう。

(けど、本当に剣なのか……?)

練金鋼でない以上、それは剣の筈である。しかし、その剣からは剝的な何かを感じられる。

「……何だ？」

「！？ あっ……いえ……」

自分でも気付かぬほどに見ていたのだろう、女性から掛けられた声にレイフォンはハツとしたが、その口から零れたのは弱々しい言葉だった。

「？ まあいい。カリアン・ロス……そいつを武芸科に移すのは止めておけ。そいつは休息を必要としているし、ツエルニもそれを望んでいる」

「だが……！」

「そいつはかつての俺と同じだ。故に分かる。刻が来れば、そいつは自ずと剣を執る。もっとも、それがいつになるかまでは分からないが……」

「それではダメなのだよ！ この様な状況でなければ、私とレイフォン君が休息を取る事に異存はない。しかし、ツエルニにはもう後がない！ セルニウムが残り一つしかなく敗北が許されない現状、そんな悠長なことは言っていられないのだ！」

カリアンの拳が机を叩いた。

ダンツという音が響く。

「……なら、そいつに剣を執らせるのは『武芸大会』とやらだけにしておけ。それだけならば、そいつも許容する事が出来るだろうし、運が良ければ……」

交わされる女生とカリアンの会話。

それが自身の事であるにも拘わらず、レイフォンは置いてけぼりになっていた。

女性が自分の事を庇っており、カリアンがそれに反論している。

……レイフォンに分かるのはその程度だった。

「……と、こついう事になったが、レイフォン君はどうかな？」

「……え？」

不意にカリアンから掛けられた声に、レイフォンはそうとしか返せなかった。

「聞いていなかったのかい？ では、分かりやすく話そう。……君が練金鋼を執るのは武芸大会のみ。一応、形として武芸科には移ってもらうが、授業はともかく訓練に出る必要はない。ただし、奨学金のランクはAではなくBとなる。……これがギリギリのラインだ。どうだい？」

カリアンが語った内容に、レイフォンは素直に驚いた。

先程に比べて随分と好条件になっている。

まあ、武芸大会では練金鋼を握らなくてはいけないし、奨学金のランクもBとなっているが、それでも、当初の奨学金ランクよりも高いことに違いはない。

ギリギリのラインと言っている以上、これを断れば先程の条件に逆戻りだろう。

一般教養科のまま過ごせないのは残念だが、奨学金のランクが上がることで時間に余裕は出来る。

ならば、その空いた時間で補填すればいいだろう。

世の中自分の思うようにはいかない。……身を以てそれを知っているレイフォンは、ここを落とし処だと判断した。

「分かりました。その条件であればお受けします」

「微妙なところだが、一応ありがとう……と言っておくよ。君の憎悪を一身に背負うことは覚悟していたのだが、その必要は無くなっただと思ってもいいのかな？」

「ええ。自分でも納得のいく範囲ですので。　とは言え、条件が守られる限りですが……」

「その点は心配しなくても　あっ!？」

レイフォンの念押しに笑顔で頷こうとしたカリアンだったが不意に声を上げ、その表情を曇らせた。

次の瞬間、ノックの音が響く。

ドンドンツと響くことから、ノックの主が苛立っているであろうことは想像できる。

「いやあゝ、まいったねゝ。セリカ君……助けてくれないかな？」

響き渡るノックの音を無視し、カリアンは女性　セリカという名前らしい　へと弱々しげに訊ねる。

「しらん」

「そんな!？　無関心な君が、さっきは珍しく積極的にレイフォン君を庇っていたじゃないか!？　ならば、私のことも庇ってくれて良いではないか!？」

「言っただろう。そいつを庇ったのはツエルニが望んだからだ。そして、そいつがかつての俺に似ているが故の気まぐれだ」

叫ぶカリアンに、セリカは淡々と返す。

（そう、俺は水の巫女に受け入れられ、エクリアとルナークリアに支えられた。……記憶と感情が抜け落ちやすい俺が未だに覚えてい

るということは、それだけで意味があるのだろうか)

レイフォンはツエルニに受け入れられた。……ならば、今度は自分が支えてみるのも一興だろう。

相も変わらぬ無表情ながら、セリカはそんな事を思っていた。

「あーもうっ！ 失礼します！ 武芸科三年、ニーナ・アントーク！ 会長がお呼びと伺ったのですが！ と言うか、いるならさっさと入室許可を下さい！」

最早マシンガンの如く扉を連打していた人物は、埒が明かないと思っただろう、カリアンが許可を出す前に扉を開け、入室するなり捲し立てた。

ニーナという名前らしいその人物は、麗人という表現が遜色ないであろう少女だった。

「相変わらず騒がしい奴だ」

「セリカじゃないか。何故貴方がここに？ それにその格好は？」

「ツエルニに頼まれてな……」

セリカが呟く。

そこで初めてセリカの存在に気付いたのだろう、ニーナが問い掛ける。

答えるセリカは相変わらず淡々としていたが、どことなく哀愁が感じられた。

「そうか……」

セリカの答えを聞いたニーナは、ただ一言そう言った。

（なんかグダグダだな……）

レイトンは思ったが、決して声には出さなかった。

これがレイトン・アルセイフのツエルニにおける出会いであり、この瞬間、それは運命となった。

運命（後書き）

今回リンス出番なしでした。

更に原作を増やす無謀。しかもキバ。

分かってても出したくなりました。

風の聖痕も出したくなってきました。

妄想は留まる事知りません。

文才が追いつく事はあるのでしょうか……？

加速（前書き）

ようやくここまで書けました。
文章にするのは難しいです。

加速

交わるはずのない物語。

出会っはずのない者たち。

されど世界は繋がりを見せる。

交錯と邂逅……新たなる『真実VERITA』が刻まれる時 物語

は加速する。

「こんのおーっ！」

神楽坂明日菜は、叫び、蹴撃を繰り出す。

蹴りは見事に異形を仕留める。 事は無かった。

当然だ。

如何に常人離れた運動能力・身体能力を有していようと、明日菜はか弱き少女に過ぎない。

気や魔力による強化を施していなければ、ダメージを与えることはあれ、還すことなど叶わない。

「明日菜さん、下がって！」

掛けられた声に従うまま、明日菜は蹴った勢いを利用して、バク宙しながら異形との距離を離す。

中空にある明日菜の瞳が捉えたのは、自らの下を駆け抜ける黒髪の少女 桜咲刹那の姿だった。

気を向けていなかった。……いや、その余りの強さ故に刹那はリンスに気を許してはいなかったのだが、リフィアとマリーニヤがリンスと一緒にいたために、リンスへの警戒を解いてしまったのだ。

無論、刹那とてリンス、リフィア、マリーニヤの仲が親しいことは理解していた。逆に言えば、刹那はそれしか理解していなかった。

刹那はリフィアとマリーニヤの強さを知らなかったために、普段の彼女たちの振る舞いから一般人だと思い込んでいたのだ。

故に、『一般人と一緒にならば妙な行動は起こさないだろう……』と刹那はリンスへの警戒を解いたのだ。

そして刹那以外の者たちは、本山に張られた結界を過信していたがために、その警戒レベルは極々低かった。

その結果、リンスに木乃香を誘拐された。……木乃香の誘拐に気付いた時点で部屋を確認したのだが、リフィアとマリーニヤは暢気に寝ていた。

斯様な理由から怒りに支配された刹那の動きは、極々単調なものとなっていた。

確かに神鳴流の剣技は周囲の異形へと多大な効果をもたらすが、それも技として成り立っていればの話だ。

怒りによって『心』が欠け、『技』と『体』が未成熟な刹那の剣は、この場においては技として成り立っていなかった。

それ故に

「刹那さんっ!?!」

明日菜の声で、刹那が仮初めながらも我を取り戻した時には既に遅く、異形の剣は防ぐことも回避することも出来ない距離へと迫っていた。

そして、剣の道に身を置いているからこそ、彼女は否応なく理解してしまった。

召喚主に不殺を命じられている以上、自分がここで死ぬことは有り得ない。しかし、この一撃は、自分を動けなくするだけの威力を持っている。

自分自身の手で木乃香を救うことが出来ない以上、それは敗北と同義である。

(無念……！)

刹那は静かに瞳を閉じた。

10秒か？ 1分か？ それとも1時間か？ 正しく刹那の時間が、彼女にはとても永く感じられた。

それと比例するかのように、一向に身を襲うはずの衝撃が訪れない。代わりに感じたのは、この時期には有り得ないであろう冷やかなる空気だ。

(何が……？)

疑問に思いつつ瞳を開けた刹那の視界に映ったのは、剣を翳したまま動かない異形の姿。……その身は無数の氷の刃に貫かれており、さながら氷の墓標のようだ。

「フン……気が逸りすぎだ、桜咲刹那。そんなだから、この様な雑魚相手にその様な醜態を晒すハメになる」

静かな声が響く。

声の主は、この場における最強の存在……エヴァンジェリンだ。

「近衛木乃香が心配か？ だとするならば、これ以上なく無駄な行為だ」

「何を……！」

エヴァンジェリンの言葉に、刹那は噛み付く。

「まあ聞け。近衛木乃香の身の安全は、これ以上ないほどに保証されている。『聖炎の騎士』の護りを突破して、近衛木乃香に危害を加えらるゝとなれば、私でも1人では不可能だ。ああこら、ぼーや。直ぐに大規模呪文に頼ろうとするんじゃない。この程度ならば魔法の射手でも充分に相手取れる」

刹那に語りかけながらも、エヴァンジェリンはネギに助言する。

「そもそも、何故私がここにいると思っっている？ 簡単だ。仮初めでも自らの主に頼まれたからだよ」

「……エヴァンジェリンさん、貴女はリンス・アリア・マーシルンと”仮契約”をしたのですか？」

「その通りだ。……屈辱を受けたままではいられんのでな。呪いも解けたことだし逆襲しに行ったら、逆に私の方が負けてしまったよ。接戦ではあったが、真つ向勝負で負けたとあれば、不思議と屈辱は湧かなかつたな……」

エヴァンジェリンは、どこか遠くを見ながら語る。……恐らくは、勝負した時の事を思いだしているのだろう。

そして、その間にも氷の墓標は次から次へと造られていく。

「話を戻すが、修学旅行中安全に過ごせたのは、リンスが常に目を光らせていたからだ。」

それに、今夜リンスが近衛木乃香を連れて行ったのは 近衛木乃香を護る事もそうだが お前たちを鍛えるためでもある。

頭の固いお前相手だから率直に言うが、リンスがジジイから受けた依頼は『特定人物の護衛』と『魔法生徒を鍛える事』だ。……最

初は普通に接しようとしていたそうだが、あの夜以降、お前はリンスを近衛木乃香に近付けようとせず、自身も決して近付かなかった。護衛として、その行為は悪くないが、リンスの事を調べなかったのは問題だな。軽くまほネットを調べるだけで、リンスの情報はわんさかと出てくるぞ？

英雄の子と稀少^{レア・スキル}能力保持者。……幾ら平穩に過ごして欲しいと願ったところで、この仮初めの平和の中では不可能だ。

加えて、最近は妙な歪み現象が頻繁に起こっている。

だからこそ、リンスはこの機を利用した。お前に憎まれるであらう事を覚悟の上でな……」

エヴァンジェリンの言葉を、刹那は直ぐに理解できなかった。そんな刹那を気にもせず、エヴァンジェリンは尚も続ける。

「神楽坂明日菜を試してみる。……気も魔力も使えないながら、この状況下で見事に立ち回っている。

元より身体能力に優れてはいたが、それでも、普通ならばこうはいかない。

短期間ではあるが、リンスから教えを受けた成果だよ。それに比べてお前はどうか？」

言われ、刹那は視界を移す。

確かに、明日菜の動きは見事という他なかった。

その一撃は大振りであり、たとえ当たったとしても、還すことは叶わない。しかし、自らの安全を常に確保しているが故の動きでもある。

大振りの一撃を入れ、その反動でもって距離を取り、或いは次の攻撃へと繋ぐ。

一撃では確かに還せないが、二撃三撃と入れることにより、徐々に、しかし着実に仕留めている。

とても素人とは思えない。……刹那は素直にそう思った。
では、自分はどうか……？
思い返すも、無様さばかりが先に立つ。

「ヒトは極限状況下において、大きく成長を遂げる……そう言われている。

確かに近衛木乃香の安全は保証されているが、だからといって鬼神が召喚されないわけでもないぞ？　いくら魔力を使ったところで、死に直結する事もないしな……。

さて、ここまで聞いてお前は どうする、桜咲刹那？　尚も醜態を晒すか？　それとも成長してみせるか？」

嗤いながら、エヴァンジェリンは刹那に問う。

挑発。

そう分かっているても　否。そう分かっているからこそ、刹那は言っただけだ。

「成長してみせます！」

言葉と共に夕風が振り抜かれ、直線上の化生数体が塵へと還る。

木乃香を護り、救うことに変わりはない。　しかし、自らの安

全を確保できぬ者が抜かしたところで、言語道断なことこの上ない。

未来を見据え、それと同時に現在を見据える。

振るわれる刃に曇りはなく、確かに刹那は成長してみせていた。

（「状況はどうだ？」）

睥睨するエヴァンジェリンに、”仮契約カード”を通してリンスから念話が届く。

（「可もなく不可もなく……と言ったところだ。時間は掛かったが、桜咲刹那も大丈夫だろう」）

念話越しの問い掛けに、エヴァンジェリンも念話で返す。

（「そうか……。悪いが油断はしないように頼む。悪い意味で、そろそろタイムリミットが近そうだ」）

（「まさか……!?」）

（「ああ。未だ何も現れてはいないが、こっちは歪みが発生している。そっちはどうだ？」）

即座にエヴァンジェリンは周囲を見回す。

前方……問題なし。

左右……異常なし。

後方……ビンゴ。見事なまでに空間が歪んでいる。

（「……こっちもだ。出来るだけ早く合流するでしょう」）

伝え、念話を終了する。

己の実力には自信を持っているエヴァンジェリンではあるが、初めて歪み現象を見た際に出会った者たち……あのレベルの者が複数現れたならば、流石に敗北は必至である。

ルナークリアなどであれば危険性は低いだろうが、ランサーであれば危険性は半々だ。

その他にも、更なる強者が現れないとも限らず、その者に話を通じる保証はない。

自分1人だけならばまだしも、ネギ、明日菜、刹那が一緒となつては、逃走すら覚束ないだろう。

「ぼーや！ 神楽坂明日菜！ 桜咲刹那！ 取り敢えず集まれ！」

警戒を歪みへと向けたままで、エヴァンジェリンは呼び掛ける。

「どうしたのよ？」

開口一番の明日菜の問いに、エヴァンジェリンは無言で指さす。

「ちょ……あれって」

「……ですね」

「この間の人たちでしょうか？」

エヴァンジェリンの指さす先、歪みの存在を確認した3人は、それぞれに零す。

明日菜と刹那の脳裏に過ぎるのは、真紅の魔槍の担い手、ランサーである。……後半は『気の良い兄ちゃん』といった感じのランサーだったが、前半部分のリンスとのバトルを直に目にしている彼女たちとしては、自然と言葉は重くなり、危機感を抱かずにはいられない。

一方で、リンスとランサーとのバトルを目撃しておらず、出会ったのが優しい女性たちだったネギは、何ら危機感を抱くこともなく、その言葉もどこかのほほんとしていた。

「何が現れるかは分からんが、樂觀も出来ん。さっさとこの場を片付けてリンスと合流する。 には、どうやら遅かったようだな…

…」

「……みたいね」

「会話が成立すればいいのですが……」

「え？ え？」

明日菜、刹那、エヴァンジェリンの言葉は重さを増した。

疑問の声を上げ、キヨロキヨロと首を振るネギを意識の外に追いつ出しながら、3人の少女は歪みを凝視する。

歪みの中には、二つの人影が見え隠れしていた。

「さて、お客様を丁重にお持て成ししなければ……。手伝って貰うぞ？ フェイト・アーウェルンクス」

「やれやれ……。ま、仕方ないね。久々に君の剣を魅せてもらうよ？ リンス・アリア・マーシルン」

儀式場にて、2人の少年が言葉を交わす。

その視界に映るのは、幾体かの正体不明の巨大生物。……歪みから現れたモノである。

「それで、君たちはアレが何なのか知っているのかい？」

フェイトは、肩越しに後方へと確認を取る。

そこにいるのは、1人の少年と1人の少女。どちら共に学生服と思しき服装であり、巨大生物と同じく、歪みから現れた者たちだ。

フェイトの問い掛けに、分かりやすいほど少年が眉を顰める。

その対応に、フェイトは更なる問いを掛ける。

「おや？ 僕はそこまで妙な問い掛けをしたかな？」

「そう訊ねてくる時点で、妙なですけど？ 実物を見たことがあるかどうかはともかくとして、人類の天敵たる汚染獣の存在を知らない者がいるとは考えられません」

答えたのは少女の方だ。長く美しい白銀の髪が、風を受けて靡いている。

「汚染獣……ね。知っているかい？」

「少なくとも、新旧どちらの世界でも聞いたことはない。となれば、考えられるのは一つ。……あの歪みは、次元を超えて、異なる世界同士を結んでいる」

「荒唐無稽ではあるが、そう考えるのが妥当か。まあ、人間でないなら問題はない。早々に消滅して貰うとしよう……！」

「……だな。会話が出来ないなら尚更だ。フォローは任せた！」

リンスが駆け、その後にフェイトが続く。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト……小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。時を奪う毒の吐息を……石の息吹……！」

フェイトが詠唱し、続いて広範囲を煙が包む。

攻撃力こそないが、煙に包まれたものを石化するこの魔法は、それを補って余りある。

しかし

「なるほど。あの巨体かつこの数では効果が薄いか……」

汚染獣には、大した効果を望めなかった。

効果がないわけではない。

石化し、動きを鈍らせている汚染獣も存在する。

だが、本来の効果を發揮していないのも確かだった。

そも、『石の息吹』は逃げ場のない密閉された空間で発動するのが普通である。

如何に強力な石化魔法であっても、風に流されてしまえば効果は

落ちる。

それでも、ヒト相手であれば十分に石化させられるが、汚染獣のような巨体では石化しきるのに時間が掛かる。

「なら、純粹に破壊するだけだ」

呟き、フェイトは魔力を込めた襲撃を、鈍くなった汚染獣に叩き込む。

そのまま汚染獣の上に立ち、呪文詠唱を開始する。

その隙を逃さんとばかりに、他の汚染獣がフェイトを狙う。

だが

「俺を忘れるな……!!」

それが叶うことは有り得ない。

言葉と共に放たれたリンスの一撃が、フェイトへと迫った汚染獣を両断する。

「……その光我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ……石化の邪眼
!!!」

続いて、フェイトの指から光の線が放たれる。

直撃を受けた汚染獣の巨体が割れ、石化し、碎け散った。

「闇に沈め……!!」

リンスが更なる追撃 『滅びの暗礁壁』を放つ。

暗黒の壁に閉じこめられた汚染獣は、一切の抵抗も出来ずに屍と化した。

「「凄い……」」

その光景を見ていた少年と少女は、異口同音に呟いた。

少年とて、目の前にいる幼生体程度であれば、軽く駆逐することが出来る。しかし、それでも武器となる練金鋼ダイトは必須である。

今現在も練金鋼を持ってはいるが、普段は学生生活を行っているために、刃引きされたままだ。

それでも、そこらの武芸者程度に負ける気はしないが、汚染獣相手では心許ない。

しかし、フェイトとかいう白銀の髪の少年は、本当に素手のままで汚染獣と相手取っているのだ。

(サヴァリスさんとどっちが強いだろうか……?)

益体もないことを少年は考える。しかし、次の瞬間には霧散した。

「レイフォンも……あれくらい強いのですか？」

「……分かりません。少なくとも、僕は練金鋼も無しに汚染獣と戦いたいとは思いません」

「そうですね……。ところで、アレは外力系衝剄なのですか？」
「……フェリ先輩も分かりませんか？」

フェリの問い掛けに、暫し考えレイフォンは逆に問い返す。

「僕たちの常識で考えるのなら、あれは外力系衝剄だと思います。

ですが、僕の知る中にあの様な技はありませんし、さっきの2人の会話を信じるならば、答えは僕たちの常識の外にあるんだと思います」

次いで、自らの考えを述べた。

「異世界……ですか。あの2人も言っていました。荒唐無稽なところの上ありませんね。けれど、もしそれが真実だとするならば……これからどうしましょうか？」

フェリの静かな声流れる。

「ここが真実異世界だと仮定するならば、恐らく私たちの常識の殆どは通用しないでしょう」

「はい」

「ですが、常識の喪失は……それだけ未知なる事柄に溢れているとも考えられます」

「確かに……そうですね」

「それはつまり、新しい生き方に溢れているとも考えられませんか？」

フェリの言葉を受けて、レイフォンは考える。

「ここが異世界だという確証はない。」

「また、平和な世界だという確証もない。」

「それと同時に、危険な世界だという確証もない。」

「無い無い尽くしではあるが、それと同時に心が弾む。」

「自分にとっては『武者でない生き方』であり、フェリにとっては『念威を強要されることのない生き方』が、ここには溢れている可能性がある。」

「逆の可能性も等しく存在するが、夢ぐらいは見てみたい。」

「だからレイフォンは言った。」

「溢れていると……良いですね」

「本当に……そう思います」

続くフェリの声は、相変わらず静かであったが、やけにレイフォンの耳に残った。

「ここは……？」

エヴァンジェリンたちの前、歪みから現れたのは2人の青年だった。

その内の一方が呟き、彼女たちがそれに答えるよりも早く、答える声があった。

「異世界だ」

響くのは低い声。しかし、もう1人の青年は言葉を発していない。

では、誰だ？ それに、何故ここが異世界と分かるのか？

「……それは本当か？ キバットバット？世」
「本当だ」

エヴァンジェリンたちの声なき疑問に答えるかのように、再度青年が疑問を發し、それに答えるように姿を現したのは、紅い色の機械的な蝙蝠だった。

「ここは魔力が充ち満ちている。単純に考えれば、世界が違っつてこった」

「俗に言う『並行世界』ってやつですかね？」

「@ ○ ?！」

その他にも、黄色い機械的な蝙蝠や、機械的な龍。何を喋っているか分からない、白い円盤状の物体もあった。

「なるほど。では、歪みはゲートだということか？」

「そう考えるのが妥当だ」

「横からすまないが、現時点において貴様たちは敵か？ 味方か？」

ある程度現状を認識したと思つたところで、エヴァンジェリンが口を挟んだ。

「それに答えるだけの情報も今はない。 が、味方だと思つてくれて差し支えはない」

「ファンガイア……じゃないみたいだね、兄さん」

「ああ。しかし、人間に仇なすならば、取るべき行為は一つだ」

警戒は解かぬまま、化生を見つつ、青年はエヴァンジェリンの問いに答える。

もう1人の青年の言葉から2人が兄弟だと分かったが、それ同時、彼女たちには分からぬ単語もあった。

エヴァンジェリンは警戒を解かぬまま、慎重に事を運ぶ。

2人の青年から感じる魔力は高い。

実際の戦闘能力は不明だが、敵にするよりは味方にした方が良かったろう。

考えを顔には出さず、おかしくない流れで自己紹介へと繋げる。

「ファンガイア……とやらが何かは分からぬが、共闘する以上、自己紹介はしておこう。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

「神楽坂明日菜よ」

「桜咲刹那と申します」

「ネギ・スプリングフィールドです」

エヴァンジェリンに続いて、残りの3名も自己紹介をする。

「登太牙だ。こいつはサガーク」

太牙と名乗る青年は、白い円盤状の物体を指しながら告げた。

「紅渡です」

「俺はキバットバット？世。こっちは父ちゃんのキバットバット？世だ」

「タツロットと申します」

残りの面々　蝙蝠や龍を含む　も自己紹介を終えた。

「それで、あいつらは敵だと思っただけなのか？」

「構わん。それよりも、貴様たちは戦えるのか？」

「フツ……問題ない」

笑みを浮かべて太牙は答える。

「王が判決を下す。貴様たちは　死だ！」

「キバット！　タツロット！」

渡と太牙が腕を出しながら言う。

「喜べ！　絶滅タイムだ！」

「オーケーだ！　渡！」

「ガブリ！」

両者の言葉に答えるかのように、二匹の蝙蝠がその腕を噛む。蝙蝠が噛むと同時、2人の頬にステンドグラスの様な模様が煌めき、その腰には鎖が巻き付けられ、次の瞬間、鎖はベルトとなった。

「変身」

「テンション・フォルテッシモ」

言いながら、2人は蝙蝠をベルトの中央へとセットする。タツロツトは、渡の左腕へと留まる。

「何だと……!?」

思わず、エヴァンジェリンは驚愕の声を漏らした。それは文字通りに『変身』だった。

渡が変身したのは、キバの鎧を纏い、その全ての拘束を解き放った姿。金と赤を基調とした『エンペラーフォーム』である。

一方の太牙が変身したのは、闇のキバの鎧を纏った姿。赤と黒を基調とした『ダークキバ』だ。

カラーリングが違う以外は、どちらの姿も似通っていた。

「フン……!!」

「ハッ……!!」

両者共に、異形の中へと飛び込んでいく。繰り出されるのは、単純なパンチやキック。そのたった一撃ごとに、化生は塵へと還っていく。

「面倒だ……!!」

ダークキバから、波動　　とても言えばいいのだろうか？　　が
放出される。

その波動を受けた化生も、瞬く間に塵へと還る。

「ザンバット！」

キバの声を受けて、一降りの剣が現れる。

「ハア……ッ！」

キバが剣を振るう度に衝撃波が放たれ、それを受けた化生も塵へと還る。

「信じられんな……」

エヴァンジェリンが力なく呟く。

2人が変身してから、然程間をおかずに化生が全滅したのだ。

エヴァンジェリンとて出来なくもないが、相応の魔力消費は免れない。

「さて、これからどうするんだ？」

「仲間と合流する。出来れば同行を願いたい？」

変身を解いた太牙の問いに、エヴァンジェリンは答える。

渡と太牙は強い……エヴァンジェリンは素直にそう思った。

同行するのは危険性が大きい、味方に出来る可能性もまた大きくなる。

そして、懸念材料もあった。

以前見たとき、歪みは直ぐに消え去った。　　しかし、今は尚も

歪みが残っている。

何かが起ころうとしている。

何かが変わるうとしている。

漠然とした不安も手伝って、戦力たり得る者と分かれることを、エヴァンジェリンは良しとしなかった。

「……いいだろう。こちらとしても情報は欲しい。道々、情報交換
というふう」

暫し考え、エヴァンジェリンの言葉に太牙は同意する。

そして、一行は儀式場へと歩を進めた。

「何が起こった……？」

平賀才人は独りごちた。

教会で、本性を露わにしたワルドを、エクリアと協力して吹っ飛ばした。

そしてその後、周囲が歪んだと思ったらここにいた。……サツパ
リと分からない。

「分かりません。　　が、転移したと考えた方がよさそうです」

「どういうこと？」

「信じがたいが、ここはアルビオンでもなければ、ハルケギニアで
もないようだ。　　月が一つしかない」

気付けば、自分の傍にルイズ、ウェールズ、エクリアがいた。

こんな近くにいて気付かないほどに、どうやら自分は動転していたようだ。

自嘲した才人だったが、ウェールズの言葉を聞いた瞬間に空を見上げた。

次いで、ガンダールヴのルーンを利用して、近場の木の頂上まで登る。

「は……はは……」

才人から力ない笑いが漏れる。

この風景を自分は知っている。いや、正確に言えば風景は知らない。知っているのは、遠方に映る幾つかの建物ぐらいだ。

帰ってきた。……喜びに打ち震える才人だったが、次の瞬間には打ち消していた。

ルイズたちの事もあるが、自分の瞳に、故郷たる世界では有り得ないような巨大生物が映ったからだ。

「ここは多分俺の故郷だと思う。けど、確証はない」

大地に降り立った才人は、開口一番に告げた。

「それはどうということだい？」

「木のとっぺんから見た景色の中に、俺の故郷である日本固有の建物があつた。けど、俺の故郷であれば存在しないような生き物まで見えた」

ウェールズの問いに才人は答える。

「……誰かヒトはいませんか？」

「いた。その生き物と戦つてた」

思案の為所であった。

情報は欲しい。 が、それは危険に近付くことと同義である。

「……俺は行く。ここでこうしていても何にもならないしな」

暫し思考し、才人は言った。

「才人さん、その方向を教えてくださいてもよろしいですか？」

「あつちですけど……」

エクリアからの問い掛けに、困惑しながらも才人は指さす。

「なるほど。……行きましょう。そちらからは見知った気配も感じますし、ここにいるよりも有意義でしょう」

「では、皆で行きましょう。この4人の中で二強が揃っていないなくなってしまうば、たとえ僕とヴァリエール嬢がここに残ったところで、危険なことに変わりはない」

「そうね……。ちゃんと私を護りなさいよ!？」

「へいへい。ご主人様の仰せのままに」

そして、一行は歩き出した。

「やれやれ……どうにも千客万来だな」

汚染獣を駆逐し終え、身体を休めていたリンスが呟いた。

種族に性別……何もかもが様々な者たちが、儀式場にて邂逅した。

「そうみたいだね。それはともかく、僕はこれで失礼させてもらうよ。目的も達成できそうにないんでね。機会があればまた会おう、リンス・アリア・マーシルン」

言い捨て、フェイトはその場から姿を消した。……後には水溜まりが残っていた。

「ま、取り敢えず木乃香嬢はお返ししよう」

「お嬢様……！」

リンスは横たわらせていた木乃香を抱き抱え、刹那へと渡す。

当初は鬼神と戦わせるつもりであったのだが、移り変わる事態に諦め、早々に術者である天ヶ崎千草を気絶させたのだ。

「それで、どうする？」

「自己紹介と情報交換……と行きたいところですが、その余裕はなさそうですね」

「確かに……な」

太牙が問い、フェリが答え、才人が同意する。

歪みは、一層激しさを増していた。

徐々に範囲が狭まり、歪み同士がぶつかり合い、重なり合っている。

最早逃げ場がないほどに、歪みに囲まれていた。

「取り敢えず、吹っ飛ばされないよう互いに手を繋いで、これから願うとしますか」

リンスの言葉に、それぞれが頷き、手を繋げていく。
全員が手を繋ぎ終えた時、白光が彼らを包み込んだ。

加速（後書き）

多重クロスな本作。

取り敢えずここまでが序章部分のつもりです。

プロローグ 2 (前書き)

エヴォリミット、ネタ割れあります。そんな大層なものでもないですが……。

プロローグ 2

「……ガッ……ッフ……！」

血が零れる。

口元から。身体のいたる部分から。

目の前には奇怪な存在。

そこに在ると視認は出来る。しかし、存在感も何も感じ取ることは出来ない。

この存在を相手にしては、たとえ前世を覚えていようと何にもならない。

なにせ、こちらの攻撃は届かないのだ。

通用しないのではなく、届かない。

通用しないだけならば、まだ救いはある。……何故ならば、届いていることに変わりはないからだ。

そして届いているのならば、只管に繰り返せば通用することもあるだろう。

しかし、現状はそれすらにも到達していないのだ。

この状況を打破するためには、まずは届く一撃を放たなければならない。

だが、そう理解していながらも、その方法が分からない。見えてこない。

「……ギッ……グフッ……！」

腹部を貫いていた得物が抜かれた。

それにより、更に血が零れる。

最早身体の感覚はなく、眼に映るものも霞んでいる。
いたい。イタイ。痛い。

諦めたくなる。膝を着きたくなる。屈したくなる。

(……っぎげんな！)

全霊で弱音を吹っ飛ばす。

自分が諦めればどうなる？

膝を着けばどうなる？

屈すればどうなる？

……考えるまでもない。

自分は死ぬ。……それだけではなく、自分の後ろにいる妹たちと、引いてはその友人たちも同様の末路を辿るだろう。

仮に自分が死ぬだけですんだとしても、間違いなく妹たちは哀しむだろう。

(そんなのは御免だ！)

内心で咆吼するも、状況は変化無し。いや、より血が失われ

ている以上、悪化している。

状況打破の方法を必死で考える。考える。考える。

そうして、ふと気付いた。

(待て……妹『たち』とは何だ？ 前世も今世も、俺の妹は1人だけだ)

疑問に思い至り

(そういうことか……。自分で気付いていなかっただけで、既に家族だと思ってたわけだ)

存外答えは早く出た。

その思考は、既に逃避のそれに近い。

「ハ……ハハ……なら、余計に負けられないな……」

しかし、打破するために至った以上、その思考が逃避であるわけがない。

「ウオオオオオ……ッッ!!」

咆吼する。

自分は人間だ。

非常に打たれ弱い生き物だ。

だが、それがどうした？

だからこそ、人間は前へと進むことが出来る。……その可能性を秘めているのだ。

前世と違って『ある物』が無い。それすらも問題にならない。

Aが無ければBで。BがなければCで。それすらもなければDとEを組み合わせて……。

そうやって、頭を、身体を、全身をフルに活用して、色々な物を代用してきたのが人間だ。

ならば、現状とても同じ事。

現状打破。

ただ、それだけが出来ればいいのだ。

……そうして、彼はそこへと行き着いた。

「あっ！ おはよう、コウ、ココロ」

「ちつす、明日菜。修学旅行は楽しかったか？」
「おはよう、明日菜」

ある日曜日の朝。

麻帆良学園敷地内のある公園に、挨拶を交わす人影があった。

1人の少年と2人の少女。

少年の名は一条皇。少女は不知火心と神楽坂明日菜。

この3人は、麻帆良学園・学園長である近衛近右衛門の経営する孤児院で、一時期一緒に生活していた。

人懐っこい癖に、どこか人と距離を取りたがるコウ。

そんなコウをサポートしつつ、人との触れ合いを大切にするココロ。

今は寮生活をしているが、それでも時折孤児院に顔を出す明日菜。今でこそ仲の良い3人ではあるが、出会った当初はそうでもなかった。

当時のコウは、今以上に人と距離を取りたがっていた。

当時のココロは、今以上に人との触れ合いを求めていた。

そしてそんな中に、明日菜が加わった。

今でこそ活発な明日菜だが、引き取られた当時は正に真逆であった。

人との接し方が分からない明日菜。

不器用な3人は、仲を縮めるのにも非常に時間が掛かった。

しかしだからこそ、その絆は深い。もっとも、コウはその事

に気付いていなかったが……。

ちなみに、名字こそ異なるものの、コウとココロは実の兄妹である。

近右衛門に引き取られた際、2人は敢えて別姓を名乗った。

理由を問うた近右衛門に、2人はただ一言『絆だから……』と答えた。

「まあ、色々であったけど楽しかったわ。　　っと、そうそう。丁度良かった。今向かってたのよ。はい、お土産」

どこか疲れたような顔を見せ、次の瞬間には満面の笑顔で、明日菜はそれを取り出した。

それはちよつとしたアクセサリー。

木・火・土・金・水の『五行』を刻んだペンダント。

「ワリいな」

「ありがとっ」

礼を言いつつ、コウとココロはそれを受け取った。

そしてコウは、我知らずに涙を零した。

それは、かつての『絆』を現していた。……少なくとも、コウはそう思った。

木は”大嵐”テンベストことシャノン・ワードワーズを。火は”噴火”ヴォルケイこと

ドミトリ・カラニコフを。土は”地震”アースクエイクことタイロン・ビストワー

クを。水は”雪崩”アバランチことマヤ・リンドグレーンを。……そして金は

己自身”通り魔”ファントムキラーこと皇文傑を。

自身の犯した罪。憎悪のままに、数多の人たちを殺した過去。

しかして、尚も大切な絆。

戒めるために名乗った”災害の猿たち”カラミティ・モンキーズの名。だが、自分た

ちはそれに反し、その名のままに”災害”カラミティとなった。

そして、同じ名を冠しながらも、決してそうはならなかった不知火義一と一条雫。そしてドミトリの娘である、ツナミ・カラニコフに、タイロンの造ったロボット、ブラザー・チャペック。

前世を揺り起こされ、それに浸りたくなるも

（俺に……これ以上幸せになる権利はない。大罪を犯した俺が、再び千慧チエンフイ　いや、ココロと兄妹になれたんだ。……それだけで充分

だ。……これ以上を望んだらバチが当たる)

コウは必死で自制する。

「兄さん……」

「コウ……」

急に涙を流したコウに、ココロと明日菜は掛ける言葉が見付けられない。

「いや、ホント……ワリいな」

ようやく、自分が涙を流していたことに気付いたのだろう、目元を拭きながらコウが言う。

「ううん……ねえコウ？ ココロ？ ちょっと弱音って言うか何て

言うか分からないけど……聞いてもらっていいかな？」

「何だ？」

「なあに？」

どこか辛そうな表情の明日菜に、コウとココロは顔を引き締める。

「……………」

3人は無言のまま歩き続ける。

やがて現れたベンチに腰掛けたところで、やっと明日菜は言葉を発した。

「私……2人のことは親友だって、家族だって思ってる。 けれど同時に……どこか違ってる、そう思ってる自分もいる。」

この想いは間違いじゃないって思ってるのに……どうしてかな？
なんか実感が湧かないんだ。

この世界は本物だって感じる自分がいる一方で……良くできた偽物だって感じる自分もいる。

こんな私が……2人の傍にいていいのかな？」

明日菜の声は徐々に小さくなり、目尻には涙も浮かんでいる。

「私は、傍にいて欲しいって思ってる。

だって明日菜が好きだもの。……本物が偽物かなんて関係ないわ。本物であればそれでいいし、仮に偽物だったとしたら、本物にすればいいだけよ。　違う？」

明日菜を抱きしめ、その頭を撫でながら、ココロは言う。

(俺は……どう思っている……?)

明日菜の慟哭。それに対するココロの答えを聞きながら、コウは自問する。

何故ならば、コウも明日菜と似たような感じだったからだ。

コウの瞳に映る世界に色はない。　いや、実際に色はある。信号然り、ポスト然り、世界に色が溢れている。

しかし、コウはそれらに意味を見出せない。躍動が感じられない。故に、全てがモノクロに見える。

例外などほんの僅かであり、当然の如くココロはそれに該当する。ココロの言葉。ココロの仕草。

その一つ一つに確かな色が見える。意味を感じることが出来る。躍動を感じることが出来る。

「俺は　　」

結局、答えが出ないまま言葉を発しようとして

「うわっ……！」

「くっ……！」

「ひゃん……！」

「チッ……！」

事態は急転した。

公園の敷地外から吹っ飛ばされてきた四つの人影。

「何だ……！？」

何が何だかは分からないが、3人は取り敢えず助け起こそうと走る。

距離が狭まり、ハッキリと確認できる位置に来たところで

「ネギ！？ 木乃香に刹那さん。それにエヴァちゃんまで！？」

明日菜が驚愕の声を発した。

「くっ……ぼーやたちを連れて逃げろ、神楽坂明日菜。アレ相手には

一足早く体勢を整えたエヴァンジェリンが、自分たちの飛んできた方を凝視しながら告げる。

そこにはいつもの余裕がない。

封印されているとて、齢600年を数える真祖の吸血鬼。

明日菜の想像も及ばぬほどに、幾多の戦場を潜り抜けた百戦錬磨の少女。

そんなエヴァンジェリンですら余裕を失う相手。

明日菜がその意味に気付くよりも前に
エヴァンジェリンが全てを言い終える前に

「いや、もう遅いか……」

それは姿を現した。

一言で現すならば黒。まるで一筆書きで書いたような人型をしている。口も、目も、鼻も、耳もなければ、『関節』というものすらも見受けられない。

本当に、ただ人型をしているだけで、決してヒトではありえない。そこに在ると見えているのに、まるで存在が感じられない。

「あ、ああ、あ……あああああつつつつつ！！」

明日菜の口から絶叫が迸る。

殆どの場合、ヒトは己の理解できぬモノに対して恐怖を抱く。

その例に漏れず、明日菜もまた恐怖を抱き、それ故に絶叫した。

そして恐怖に囚われた者は、冷静な判断を、思考能力を、著しく低下させるのもまた常だ。

「^{アデファクト}来たれ……！」

明日菜は”仮契約カード”を発動。”アーティファクト”を召喚し

「あああああつつつつつ！！」

咆吼のままに突貫する。

明日菜の”アーティファクト”である『ハマノツルギ』は、召喚

された異形を一撃の下に送り還す能力を持っている。……修学旅行において、それは実証済みである。

それ故の突貫。……確かにその判断は正しい。目の前の人型が何であるかは分からぬが、少なくとも真つ当な存在ではない。ならば、送り還すことは叶わずとも、ダメージを負わせることは可能であるう。

明日菜の判断は至極真つ当なものであり　だからこそ間違っていた。

「あああああつつつつ！！」

明日菜の振りかぶったハリセンは、見事人型に命中し、勢いのままにすり抜けた。

そも、冷静であつたならば考えられぬ事ではない。

明日菜の『ハマノツルギ』が通用するのであれば、ネギやエヴァンジェリンの魔法、刹那の剣が通用するのもまた道理である。

にも拘わらず、ネギたちが一方的にやられているのだ。

ならば、そこには道理を覆す『ナニカ』が存在するのも、また道理である。

「……え？」

明日菜の口から紡がれるのは、呆けたような呟き。

理解できない。理解できない。理解できない。……明日菜の頭の中で、同じ言葉が渦を巻く。

瞳に映るのは、限りなくスローモーション。

人型の腕の先端。真ん丸な部分が、まるで指のように分かれたる。

その指は見る見る伸び、獲物　明日菜へと襲いかかる。

勢いが強すぎたためか、明日菜の身体はまるで動かない。

元より近かつた距離は瞬く間にゼロになり

「きゃ……………！」

衝撃。

明日菜の口から弱々しい悲鳴が零れる。

（何ともない……………？　じゃあ、一体何が……………？）

即座に自身の体を確かめた明日菜は、目に見える怪我がないことに安堵し、次いで、その事実^に首を傾げた。

顔を上げる。

少しばかりの距離を隔てたそこでは

「……………ガツ……………ツフ……………！」

コウが、計10もの指に、その身を貫かれていた。

コウの身体からは、夥しいほどの赤が流れ、見る間に足下に赤が溜まっていく。

その現実を理解したとき

「いやああああああっつつつつつ！！！」

明日菜の口から、再度絶叫が放たれた。

蒼い、蒼い、静謐な空間。

コウはそこを知っていた。……………正確にはコウの前世である、^{ホアウエ}皇文^{ンジエ}

傑の記憶が知っていた。

テーブルがあり、椅子がある。

椅子には誰かが腰掛けているようだが、現在の場所からは顔を判別することが出来なかった。

一步。また一步。

歩を進める。距離を縮める。

カツン、カツンと足音が鳴り響く。

「うん……？」

椅子に腰掛けている人物が、その顔を上げた。

黒い長髪。整った顔立ち。左目の下にある黒子が、仄かな色気を放っている。

瞳と瞳が交差した。

「おや？ お客さんかな？ フム……『時間』という概念の存在しないここでは、この表現が正しいのかどうか不明だが『久し振り』の人間だな。まあ正確に言えば、私がここで過ごすようになってからは『初めて』の人間ということだが……。

まあ何はともあれ、ようこそお客人。……私は君を歓迎しよう。

いやいや、そういえば挨拶がまだだった。……初めまして。私の名は

「いや、『初めまして』じゃない……」

その人物の言葉を遮り、コウは言った。

「俺たちは『初めまして』じゃないんだよ！ シヤノン！ シヤノン・ワードワーズ！」

叫んだ。吼えた。身体の奥底、心の奥底から湧き上がる激情のま

まに、コウはがなり立てた。

「ほう……私を知っているのか？　しかし、私がここで『宇宙』せかいを見守り始めてから、ここに来たのは君が初めてだ。これは間違いない。だとするならば……」

シャノンがコウを視る。見る。診る。観察する。

やがて、その顔に理解の色と　微かな驚きが浮かび上がった。

「そうか！　そうかそうかそうか！　そういうことか！　いやはや、やはり人間は素晴らしい！　……改めて。『久し振り』だ、コウ。皇文傑。ホアウエンシエそれとも『通り魔』ファントムキラーと呼んだ方がいいかな？」

「どれでもいい。どれも俺だ。もつとも、今の俺は一条コウって名前だけだな。　つくしよう……！　何でだろうな？　アンタのこととはこれ以上ないほど憎いはずなのに、恨んでいるはずなのに……喜びしか浮かんでこねえ」

コウの瞳から涙が落ちる。気付き、目元を拭う。

そんなコウを見て、シャノンの顔に微かな笑みが浮かぶ。

「さて、久方ぶりの再会だ。旧交を温めたくもあるが　ここに来たということとは、『進化』する必要が出てきたということだろう？　「ああ、そうだ。新しい『家族』絆を護るために、俺は『進化』の階段を上りに来た」

シャノンの問い掛けを肯定し、コウは階段へと足を向ける。

「まあ待ちたまえ。先も言ったが、ここには『時間』という概念は存在しない。

また、私は不知火義一と一条雫との約束として、ここから世界を

見守っている。……それを、己が贖罪としている。

故に、私から世界に干渉することはない。　　が、わざわざ訊ねてきた客人を門前払いするほど狭量でもない」

コウの背にシャノンの声が掛けられる。

「……ってことはアレか？　色々教えてくれたりするの？」

立ち止まり、肩越しに視線を向けて、コウは問う。

「その通り。　　とは言え、一度に全てを教えられるわけでもないがね」

「フン……『毒にもなれば薬にも』ってやつだったか……？　　まあいいや。それで、何を教えてくれるんだ？」

戻り、椅子に腰掛け、正面からシャノンの瞳を見据えて、コウは問い掛ける。

「さて、それでは教えよう。　　ああ、その前に……珈琲と紅茶、どちらが好みかね？」

「……おい」

仰々しく、それでいてウインクなんぞをしながら茶目つ気たつぷりに訊いてくるシャノンに対し、コウは険呑な視線を向ける。

そんな視線を意にも介さず、シャノンは軽く肩を竦めて告げた。

「それだよ。今の君には余裕が感じられない。日本の諺にもあったろう？　『急いで事はし損じる』……と。」

家族が心配なのだろうが、だからこそ落ち着きたまえ。　　それでは、改めて訊こう。珈琲と紅茶、どちらが好みかね？」

コウは深く深く深呼吸をする。
それを幾度か繰り返した後、言った。

「……ほうじ茶はねえのか？」

シャノンは満面の笑みを浮かべて言った。

「あるとも」

……そして、シャノンはコウへと語り始めた。

現在、神楽坂明日菜の瞳には何も映っていなかった。いや、それは正しくはない。空、大地、目の前の光景。全てがハッキリと、そしてクッキリと映っている。

しかしだからこそ、明日菜の瞳には何も映ってはいないのだ。如何に魔法に関わることになったとはいえ、明日菜は未だに凄惨な部分を目撃したことは、直視したことはない。……しそうになつたことはあるが、結局は助かったので、やはり理解してはいなかったのだ。

則ち『死』が起こり得るということを……。
加えて、以前目撃しそうになったのは、石化の過程での死であり、結果としての死ではなかったことも関係しているのだろう。

全身から止めどなく流れ落ちる血。……それを流しているのが、自分が親友だと、家族だと思っっている少年である事も相俟って、現在の明日菜は思考や理解 則ち『人間らしさ』と評される諸々を

放棄していた。

それ故に気付いていなかった。

全身を貫かれ、夥しいまでの血を流し、それでも尚地に膝を着かず立ち塞がらんとするコウを無視し、漆黒の人型が明日菜へと迫っていることに。

ネギが、木乃香が、刹那が、エヴァンジェリンが言っている言葉の意味に。

開けながらに瞳を閉じ、立てながらも耳を塞ぎ、心の奥底に引きこもって、最後に扉を閉め、それが閉め切られる刹那

「明日菜ああっつっ!!」

響いた声に、明日菜は『人間らしさ』を取り戻した。取り戻してしまった。

「…………え？」

唇から茫洋とした眩きが漏れる。

自身の前には黒い人型。その腕は半ばから無くなっている。自身と人型の間に挟まれるように、自身の兄が立っている。

「コ…………ウ…………？」

「おお、目え覚ましたか、明日菜」

尚も全身から血を流し、それでも顔には笑みを浮かべて、兄は自分に言ってきた。

「さて…………明日菜、良く聞け。 シッ…………!!」

その背中越しに、コウの声が明日菜へと届く。

同時、コウの襲撃によって、人型が吹き飛んでいく。

「俺とココロは『前世』ってやつを覚えている。リヤッ……！
だからなのは分からねえし、ココロもそうなのは分からねえ
が シェアツ……！」

少なくとも、俺の瞳に映る世界に、色は存在していなかった。全
てがモノクロだった。 しつげんだよっ……！」

コウは語りながらも、人型を迎え撃つ。
拳を、手刀を、蹴りを、動く度にコウの身体からは血が流れる。
それでも尚動き、人型が動きを停止したのを確認して、しかし決
して構えは解かずにコウは続ける。

「それでも、やっぱり例外ってやつはあるもんでな。ココロに近右衛
門の爺さん。それに明日菜……お前には色を感じることが出来た。
躍動を感じる事が出来た。

つまり何が言いたいのか、つーとだ。明日菜、お前は俺の家族だ。
妹だ。お前がどんなに変わっちゃっても、それは決して変わらねえ。
だから、違和感を肯定しろ。世界が混じりあっちゃった時に閉じ
こめられちゃった記憶を引きずり出せ。

あるがままを受け入れて、それと同時に、必要に応じて否定して、
”特異点”を思い出せ……！」

明日菜にはコウの言葉が理解できない。 しかし、『自分がナ
ニかを忘れている』ことは理解できた。

故に、明日菜は思い出そうとする。
何を忘れていたのかは分からないが、そんなことは関係ない。

コウの言葉には、確かな信頼が込められていた。

兄が信頼しているのだ。……ならば、応えてみせてこそ、『妹冥
利に尽きる』というやつであろう。

元来、明日菜はゴチャゴチャと難しいことを考えるのは得意ではない。

愚直なまでに楽観思考で猪突猛進するのが、神楽坂明日菜の持ち味である。

そんなわけで、瞳を閉じ、明日菜は記憶の海へと飛び込んだ。

「『コウ』と呼称される存在を”特異点”と認識。よって攻撃優先順位を変更。”特異点”を排除し、後に”異端”の抹消へと移行する。それに伴い援軍を要請する」

明日菜が瞳を閉じた直後、人型が声を発した。いや、正確には『声』ではない。そも、この存在には口がない。故に、声を出せるはずがない。

しかし、意味ある『言葉』として認識できたならば、『声』と表現しても問題は無いだろう。

それは、頭の中に直接響いたかのように感じられた。

そして、それらは現れた。

1……5……コウが吹き飛ばしたモノも合わせて計10体。

「チツ……半死人相手にご苦労なことだ」

舌打ちしつつも、コウはシャノンの言葉を反芻する。

() ”異端”が認識することによって、初めて”特異点”は存在を許される。また、”特異点”の存在によって”異端”はその恩恵を受けられることが出来る。”異端”と”特異点”は互いが互いに干渉し合

い、数が増えることにその力も上昇していく。但し、初めから全ての”異端”と”特異点”が干渉し合うわけではない……か)

まあ、”異端”だの”特異点”だのと言ったところで、そんなのは立場によって表現が変化する。

いくら仰々しく言ったところで、要するにコウたちは『世界同士の喧嘩(?)』に巻き込まれただけなのだ。

物事において、最終的な始まりと終わりは同一である。……例えば『太極』と呼ばれ、例えば『虚無』と呼ばれ、例えば『アカシックレコード』等と呼称されるものだ。

そんな中、とある世界が『過程』に彩りを求めた。

彩り 則ち『変化』と呼称されるものである。

だが、閉じた世界においては、もたらされる変化は膨大であれど無限ではない。

同一世界の中で、何度も何度も似て非なる過程が繰り返され、やがて全てを網羅した時、『世界』は別の『世界』へと助力を求めた。そうして、ある『世界』は賛同し、ある『世界』は否定し、ある『世界』は黙秘を貫き 『世界』は混ざり合った。それにより、あらゆる部分に不具合が発生。

それは微少にして 甚大。

過去と未来が混ざり合い、歴史やら常識やらにもズレが生じる事となった。

(そんなこんなで今に至る……と。まったく……俺とココロが『前世』を覚えているのも、そのとぼっちを受けさせたせいであったとはな。呆れりゃいいのか怒ればいいのか分かりやしねえ)

深い溜息を吐き、コウは痛む身体のままに人型の群れを見据え

「けどまあ、今やるべき事は一つだけか。　　良いぜ！　来いよガ
ーディアン！」

吼えた。

「だが覚悟しな……！　　忌まわしき名であるが……故に、我は再び
この名を名乗る……！」

そう……我が掲げし”災害”の名は”カラミティ通り魔”！

我　則ち人災！

我　人の身にして天に並び立つ者！

然るに我　悪を以て己が我が儘エゴを貫き通さんつ！」

咆吼し、圧倒的不利の状況の中、ガーディアンを迎え撃つ。

「シエアツ……！」

呼吸と共に、コウが腕を、脚を振るう。

生じるのは不可視の刃。……これこそが、『進化』したコウが手
に入れた能力。魔力や気といった超常の力をエネルギー動力源として発動され
る。　　しかし、未だ『前世』の時には遠く及ばない。

故に、これを受けたガーディアンを或いは両断したが、或いは耐
え抜かれた。

「チツ……ツラア……！」

耐え抜かれた事実には舌打ちし、危険を承知で接近。

より至近距離でその一撃を受けたガーディアンは、今度は耐えき
れずに、その身を粒子と化し溶け消えた。

それを最後まで確認することもなく、コウはその場で独楽の如く
回転。

周囲のガーディアンを悉くを斬り捨てる。 つもりだった。

「…………グツ…………！」

バランスを崩す。地面が迫る。

如何に『進化』したとはいえ、常に血が失われ、痛みが身体を苛んでいるのだ。

痛みだけならば問題ない。

痛みは証だ。生きていることの、証明だ。…………故に我慢することが出来る。

しかし、血の喪失はその限りではない。

如何せん流しすぎた。

気力で、そして精神で肉体を動かしていたが、ここにきて無理が形となって現れた。

だが、決して諦めるわけにはいかない。

その思いとは裏腹に、コウは瞳を開けたまま気を失い、剣と化したガーディアンの腕が振り降ろされ

「あーもうっ！」

記憶の海の中、波に流され翻弄されながら、明日菜は怒気を露わにする。

コウは『“特異点”を思い出せ』と言った。

その言葉通りに『記憶の結晶』とでもいうべきものを片っ端から拾い上げてみるが、どれもこれもしっくりこない。…………紅い外套を纏った白髪の青年には琴線が揺れたりもしたが、それと同時にどう

もしつくり来なかった。

拾い、確認しては放り投げ、拾い、確認しては放り投げ……延々とこの繰り返しである。

コウとココロが存在しないことを除けば、自分の記憶通り……というものもあつたのだが、”特異点”と思しきモノもまた出てこなかったので、遺憾ながら放り投げた。

「これは……？」

それを幾度繰り返し返したのか？ 考えるのも億劫になった頃、再度琴線に引っ掛かるものがあつた。

よくよく見ても、何故かぼやけて見える。

「よし……！」

考えても分からないので、本能に身を任せて、同じ感覚を感じるものを探すことにした。……ここにきて初めて気付いたのだが、どうも『記憶の結晶』はそれぞれが波動とでもいっべきものを放出しているようなのだ。

感じる。仄かに揺れる。感じる。微かに揺れる。感じる。揺れる気がする。感じる。ハッキリと揺れた。

「これだ！」

感覚を頼りに急いでそれを引き上げる。
瞳を凝らしてそれを見て

「きゃあああああつっつっ！！」

頭の中が爆発でもしたかのような衝撃を感じた。

剣がコウへと突き刺さる刹那　閃光が奔る。

間をおかずに再び閃光。

そして、コウの身体を闇が包む。

何が起こっている？　そう思うよりも早く、そのガーディアンは幾多の氷に貫かれた。

「チツ……どうも本調子じゃないな」

「右に同じく」

「何はともあれ、これで終いじゃ」

「さて……何故私はお前を忘れていたんだろうな？」

そんな声を聞きながら、最後の一体が溶け消えた。

「取り急ぎ、まずは病院か……」

「そうね」

「急ぐのだ！」

「行くよ、ココロ！」

言って、彼らは駆け出した。

リンス・アリア・マーシルン、リファイア・イリーナ・マーシルン、マリーニャ・クルップ……神楽坂明日菜が思い出すことによって、認識され、存在を許された”特異点”と。

彼らが存在を許されたことにより、干渉し、一部ではあるが記憶を思い出した、ネギ・スプリングフィールドを始めとする、”異端”の一行が。

……この混ざり合った世界に、開演を告げる鐘の音が響き渡った瞬間であった。

プロローグ 2 (後書き)

オリ展開しつつ、原作展開混ぜ合わせつつ、妄想は続いていく……。。

混沌世界

静かな、そして小さな部屋。

ベッドの中には、眠っている少年。

少年の身体には管が取り付けられ、それを通して赤い液体が少年へと流れていく。

「……ココロはコウを見て。 私は、ちょっと話してくる事があるから……」

「分かったわ。 後で私にも聞かせて頂戴ね？」

「ええ」

それを眺めながら交わされる会話。

やがて1人の少女 神楽坂明日菜は部屋を出て行った。

残った少女 不知火心は、眠る少年を見ながら咳いた。

「ねえ、兄さん。 一体何が起こってるの？」

少年からの答えは、ただ小さな呼吸音のみだった。

音を立てて扉が閉まる。

それから暫し 心の中で10秒数え、念のために更に5秒数えてから 麻帆良学園・学園長であるところの近衛近右衛門は、大きく溜息を吐き、その眉間を揉んだ。

現在の近右衛門の心境を現すにはただ一言 『訳が分からない』

で済んだ。

つい先程……といつても幾らか時間は経過しているが、自分が孫同然に思っている少年が、文字通り病院に担ぎ込まれた。

ただそれだけであれば、近右衛門とてそこまで心配はしない
何せ麻帆良の敷地内に住まう者は、老若男女関係なく全般的にタフである　のだが、そうも言っていられない要因があった。

病院に担ぎ込まれた孫　一条皇の傷は、とても喧嘩で付くようなものではなかったのだ。

止血こそされていたものの、その10にも及ぶ傷は、正面と背面に等しく付いていた。……つまりは、身体を貫いたということである。

服に付着していた血の量から考えても、死んでいてもおかしくないほどの傷だったろう。

しかし、それだけの傷を負いながらも未だに孫が生きているのは、治癒魔法を受けたからであろう。

これは間違いなく”裏”に関わることだ。

そう確信したが故に、近右衛門は見舞いに行きたいのを堪えて、当事者から情報を集めている。……傷を負わせた者と、傷を癒した者の情報を。

取り敢えず、傷を癒した者は3人連れであり、軽く礼を言った後、現在は別室で待機してもらっている。

救ってもらった者の家族としては、この対応は間違っているとも思うが、一つの学園を治める者としては如何せんどうしようもないことであり、件の3人もそれを了承してくれた。

1人の少年に2人の少女。

それぞれ、リンス・アリア・マーシルン、リファイア・イリーナ・マーシルン、マリーニャ・クルップというらしい。

「むう……」

手元の紙を眺めつつ、近右衛門は唸った。

今のところ、ネギ、木乃香、刹那の3人に聞いただけではあるが、この時点で曖昧だ。

いや、傷を負わせた者に関しては、軒並み証言が一致している。

……『瞳も口も何もない。まるで一筆書きで書いたような人型』だったと。

この時点で近右衛門としては『流石にそれはどうよ?』と思うわけだが、件の3人に関しての証言が、また曖昧だ。

ネギ曰く『リフィアさんとマリーニヤさんは自分のクラスの生徒。リンスさんはリフィアさんの親戚であり、自分はちよつと苦手』とのこと。

木乃香曰く『リフィアとマリーニヤはクラスメイト。まるで本当の姉妹のように仲が良い。マリーニヤはリフィアのブレイキ役であるが、時々抑えきれないことも……。リンスは所謂プレイボーイ。女に優しく男に厳しくを地で行っている。その一方で、相手によってはただ優しくするだけでなく、優しいから厳しいことも行える人物』とのこと。

刹那曰く『リフィアさんとマリーニヤさんはクラスメイト。端から見ているだけでも仲良しだと思う。自分の弱さ故ですが何度嫉妬したことが……。リンスさんは、自分など足下にも及ばぬほど桁外れに強い』とのこと。

「むう……」

近右衛門は再度唸った。

リンスに関してはさておいても、問題はリフィアとマリーニヤに關してである。……3人揃って『3-Aの生徒である』と供述しているのだ。にも拘わらず、その様な事実はない。……少なくとも、生徒名簿には載っていない。

これは一体どうしたことが……。? 悩めども答えは出ない。

順当に考えるならば、3人の証言がデタラメである、となるのだろうか、そう断ずるのも些か早計と思えてならない。……何故ならば、リンスに関しての内容がバラバラだからである。

襲撃者とリフィア、マリーニヤに関してのみ口を合わせて、リンスに関してのみ口を合わせない理由がない。……少なくとも、近右衛門には考えられない。

ならば、3人の言っていることは真実である、となるのだろうか、そうすると今度は事実と齟齬が生じる。

「むう……」

「おいおい、じじい……何をそんなにウンウン唸っている?」

三度近右衛門が唸ったところで、自分以外の声が響いた。

扉を見ると、自分の囲碁仲間にして酒飲み仲間である金髪少女が、無駄に無い胸を張って立っていた。

「これが唸らいでか……。ほれエヴァ、これ見てみい」

自分が言う間にもズカズカと部屋に入り、ドツカリとソファに腰を下ろした少女へと、近右衛門は証言内容を記載した紙を渡す。

この少女とは長い付き合いであり、こうしなければ話が進まないことを、近右衛門は理解していた。

「フム……」

呟き、少女 エヴァンジェリンはそれを眺める。

「なるほどな……。それで、一体何を唸っていたんだ?」

エヴァンジェリンのその言葉に、近右衛門は更に疑念を深めなが

ら問い掛けた。

「エヴァよ、もしやとは思うが」
「ああ。リファイア・イリーナ・マーシルンとマリーニャ・クルップは間違いなく3-Aの生徒だ」

近右衛門が最後まで続ける前に、エヴァンジェリンは言ったのけた。

その内容に、近右衛門がまたもや唸ろうとしたところで

「とは言え、それが正しいか？ と問われると、何とも言えんがな……」

エヴァンジェリンが、自分の言葉を否定する様なことを言ってきた。

それは、別の意味で近右衛門を困惑させた。

「エヴァよ、それは一体どういう意味じゃ？」

近右衛門は当然の如く問い掛ける。……エヴァンジェリンの言い回しは、答えを知っているかのようなようである。

「……じじい、” 真実 ” とは何だ？ ” 存在 ” とは何だ？」

エヴァンジェリンは暫し考え、逆にそう問い返した。

「……………」

近右衛門は答えられない。答えられるわけがない。それらには模範的回答はあっても、明確な回答は存在しないからだ。

そんな近右衛門を見て、エヴァンジェリンは言った。

「それが答えだ。……もつとも、私としても恐らくとしか言い様のない、確証のないことなんだがな……」

近右衛門が眉を顰める間にも、エヴァンジェリンは言葉を続ける。

「組織を例に挙げるなら、”関東魔法協会”、”関西呪術協会”、”魔術協会”、”聖堂教会”、”時空管理局”、”青空の会”……有名どころだけでもこれだけあるし、今後更に増えないとも限らん。起こった出来事を例に挙げるなら、大きいとこだけで”鬼神の乱”、”冬木大火災”、”闇の書事件”に”ファンガイア事変”ときてる。」

これらは、この世界に間違いなく存在しているし、この世界で起こった紛れもない真実だ。

しかしな？ それ故にこそ、ここ最近の私は違和感と既視感を抱き続けてきた。『そんなのあったか？』、『以前にもこんな事がなかったか？』……とな。

寝ては忘れ、起きたらそれ以上に苛まされる。それがどれだけ続いたかなど分からんし、考えたくもない。だが、そうハッキリ言えるのもあくまで今日からであり、より正確に言うならば、リンスの存在を認識した瞬間からだと言えるだろう。……リフィアとマリーニヤも含まれているのだろうが、私の場合、どちらかと言えばリンスとの繋がりの方が大きいからな……」

エヴァンジェリンは一端言葉を止める。

眉を顰め、何事かを考える。

どれくらい経っただろうか？ やがて言葉を再開した。

あ、そういうことか……』と呟いて……。

『あ

「エヴァ？」

その呟きに近右衛門が声を掛けるも、エヴァンジェリンは首を横に振った。

「いや、何でもない。……病院に担ぎ込まれた貴様の孫は、神楽坂明日菜に向かつて。」特異点”を思い出せ」と言っていた。その後でリンスたちが現れた以上、リンスたちが”特異点”なのだろう。そう考えれば、証言内容に奇妙な一致とバラツキがあるのも納得できる」

エヴァンジェリンは結局、何を自問し、どのような答えに至ったのかは言わなかった。

所詮は仮定に次ぐ仮定でしか無く、確証も何もありません。そしてそもそも、この仮定が真実だとするならば、今はまだ戦力が足りていない。

エヴァンジェリンはこの世界において、間違いなく”最強”と謳われるに等しい実力者であり、それに比例してプライドも大きい。そんな彼女であるからして、このまま『なあなあ』で済ますつもりなどは毛頭無い。

誰 或いは何 かは分からないが、今すぐにも逆撃を喰らわせ息の根を止めたい、というのが彼女の本音である。

しかし、今はグツと堪えねばならない。

この世界は正しく混沌だ。

今のエヴァンジェリンからすれば、何故気付かなかったのか分からないほどに、この世界は無理と矛盾が蔓延っている。だが、つい数刻前、リンスに会う前のエヴァンジェリンにしてみれば、違和感や既視感程度にしか感じ取ることが出来なかったのだ。

それはつまり、もの見事に出し抜かれ、それだけでなく、その事実にもエヴァンジェリンが気付けなかったことを指し示している。

相手は自身を凌駕するほどの実力者である。……その事実を認めているが故に、エヴァンジェリンは憤怒を堪えるしかない。

その一方で、決して手の届かない相手ではないのもまた事実である。

そうでなければ、違和感や既視感程度であろうとも感じることは無かつただろうし、今現在、こうして考察することすら不可能であろう。

結局のところ、数さえ揃えば逆襲も可能となるはずなのだ。

だが、その『数』を揃えるのが難しい。

仮定を話す事によって揃えられなくもないとも思うが　同時に、一切合切手に入らない可能性の方が高い。

其程までに、この仮定は恐怖を促すだろうとエヴァンジェリンは思っている。

齢600年を生きるエヴァンジェリンだからこそ冷静に受け止めることが出来ているが、10年そこいらの若者たちには苦痛すぎるだろう。

しかし、そう考慮しても尚、エヴァンジェリンは何れ話すことになるだろう事を確信していた。

何故ならば、今日リンスと合った瞬間に、間違いなく『世界』は変わったのだ。

それは全体で見れば微々たるものであるが、確実に伝播していくであろう。

徐々に、ゆつくりと広がっていき、最後には一丸となって牙を剥く。

その刻には、エヴァンジェリンが言わずとも薄々と気付く者たちもいるだろう。

仮に気付いていないとて、その恐怖に負けず、乗り越えることのできる者たちで揃っているはずだ。……そんな奇妙な確信が、エヴァンジェリンにはあった。

その際の歓喜を想像すれば、我慢するのも苦ではない。

「……クッ」

気付けば笑みを堪えていた。

自分では随分丸くなったと思っていたが、根っこの部分は早々変わらならしい。

漏れ出ようとする狂笑を抑え、エヴァンジェリンは話を戻した。

「さて、話を戻すぞ？ リンスは間違いなく”最強”と謳われるに相応しい実力者だ。『聖炎の騎士』や『黒龍騎士』、『バグズライバル』等、それ相応の二つ名も持っている。が、この世界においては、それを知る者は皆無に等しいだろう。もしかしたら、現状では私だけかもしれないな」

「確かにのう。その様な実力者であれば、ワシとて当然の如く聞き及んでおるはずじゃ。が、ワシは全然聞いたことがない」

難しい顔で近右衛門は言葉を紡ぐ。

口にごそ出していないが、その瞳が雄弁に語っていた。

この食い違いをどう説明する？『……』と。

「簡単な話だ。仮にこの世界を”現実”とするならば、リンスたちは”夢”に出てくる者たちだからさ」

アツサリと告げられたエヴァンジェリンの言葉。

一笑に付したい近右衛門だったが、妙に納得している自分を自覚した。

「なるほどのう……」

「そついうことだ」

故に、近右衛門はそう答え、それを聞き届けたエヴァンジェリンは退室していった。

「何れワシもその夢を見るのかのう……？」

零しつつも、近右衛門はエヴァンジェリンから聞き及んだことを書き記していった。……扉がノックされたのは、それから間もなくのことだった。

ハラリ、と紙が捲られていく。

暫しの静寂の後、またハラリ。

それがどれだけ続いたか分からない頃になって、ようやく音が発せられた。

「これはまた随分と……」

苦笑しつつも、リンスは新聞紙を折り畳む。

「……同感」

「右に同じである」

暫し遅れ、リフィアとマリーニヤも読んでいた新聞紙を折り畳んだ。

「どうかしたかい？」

「いえ、何でもありません」

自分たちの接待兼監視役を任されている男性　タカミチ・T・高畑の問い掛けに素っ気なく答えながら、リンスは麦茶を一口運んだ。

近右衛門からお呼びが掛かるまでこの部屋で待機を余儀なくされたわけだが、リンスたちはその時間を情報収集に当てることにした。自分たちに対する態度について、首を傾げざるを得なかったからである。明日菜やエヴァンジェリンの態度は特に変わりなかったが……。

ネギや刹那たちはともかくとしても、近右衛門やタカミチたちの態度は、まるで初対面の相手に対するソレであった。

当然、それを『気のせい』で済ますことなど出来るはずもなく、かといって正面から訊くわけにもいかないのです、外堀から埋めることにしたのだ。

そんなわけで、同一日付で数種類ある新聞を順に読んでいったのだが、そこかしこがズレにズレてズレまくっていた。

いや、”表”の部分ではそれほどズレは感じられないのだが

それでも、知らない地名はあった　”裏”の部分のズレ具合は半端がない。

まあ『麻帆良タイムズ』だけでなく『英霊通信』や『時空管理局発報』、果ては『青空とファンガイア』等という物まである時点でカオスつぷりは想像付いたのだが……。

読んでみて、それが甘いと思ひ知らされた。

無理が跳梁し、矛盾が跋扈しているにも拘わらず、その点に関する指摘が一切載っていない。

結論として、この世界では”常識”が一切アテにならない、と思つたところで何ら不思議は無いだろう。

カオスワールド

こんな混沌世界では、タカミチや近右衛門の態度など異常とも言えまい。寧ろ、態度が変わりない明日菜やエヴァンジェリンの

方こそ異常である。

(さて、どうするべきか……?)

リンスは思考する。

「こつも」常識”が異なっているのは、情報の出し具合が難しい。…
それに付け加えて、どうも記憶や身体能力に障害があるように感じられる。

例えば剣を振る速度。……記憶ではもつと速く振れるはずなのに、
身体がそれに付いてこない。

例えば詠唱速度。……記憶ではもつと時間が掛かるはずなのに、
口は滑らかに紡いでいく。

今の自分が間違っているのか、それとも記憶の方が間違っているのか……
答えの出ないエンドレスゲームである。

そんな状態では、自分の知っている事を真つ正直に話したところで『
イタイ奴』と思われるであろう。……別に男にどう思われよう
と知ったことではないが、女性にそう思われるのはリンス的に我慢
ならない。

かといって、てんでデタラメな事を話すのも不可能だ。

あの場にいた一行から近右衛門が話を聞きだしている以上、当然
自分たちの事も識っているだろう。

その結果、あまりに話が食い違つては、今以上に疑われて身動き
が取れなくなる。

(語るのは最低限。後は黙秘で通すしかないか……)

どちらにしろ怪しまれるならば、それが最善であろう。

エヴァンジェリンたちと口裏を合わせる事が出来ない以上、その
位はしょうがあるまい。

ガンツ、と扉が開かれたのは、リンスがその様な結論に至った瞬間
であった。

何かか？ と思う必要もない。……今の状況でこの様な不作法を行う輩などたった1人 則ち、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルしかいまい。

「タカミチ、暫しの間席を外せ。私は少々こいつ等と話がある」

想像通りの高飛車少女は、入室するなり監視者へと無理難題を言い放った。

「おいおいエヴァ、無理を言わないでくれ。流石にそれは不可能だよ」

当然の如く、タカミチは斬って捨てる。

「勘違いするなよタカミチ。私は頼んでいるんじゃない。 命令しているんだ」

正しく絶対零度の瞳と口調で、エヴァンジェリンはタカミチへと向き直る。

「やれやれ……。5分だけだ、いいね？ ま、流石に客人の前で煙草を吸うわけにはいかないからね」

深い溜息を吐いた後、そう言ってタカミチは部屋を出て行った。

「さて、時間がない。早速話を合わせるぞ？」

「それは助かる。なにせ”常識”が違いすぎて、どこからどこまで話すべきか判断が付かなかった」

エヴァンジェリンの言葉に、軽く新聞を叩きながらリンスは答え

る。

「そこら辺は一通り言って問題ない。どちらにしろじいには確かめる術がないからな。問題はコレだ」

「それは……」仮契約カード”か？」

「ああ。私と貴様を結ぶ物だ。コレは今ここに存在している。貴様も持っているだろう？」

言われ、懐に手を入れて、リンスはそれを取り出した。

「ああ。これだろう？」

「そうだ。 が、私に言われる前にも確かに持っていたか？」

「！？」

リンスは言葉に詰まった。

持っていた、とは思う。 が、それはあくまで思うだけであり、実際に触れたわけでもなく、取り出して確認したわけでもない。

記憶がアテにならない以上、持っていたと断言することは出来ない。

「……断言はできんな」

「正直だな。まあ、私の想像では恐らく貴様は持っていただろうな」

エヴァンジェリンの言葉には、どこか含みが感じられた。

「エヴァ、その言い様だとお前は持っていなかったように聞こえるんだが？」

「事実その通りだ。少なくともじいの部屋にいるときは、私はコシを持っていなかった。……それだけじゃない。普段の私は呪いに縛られている」

「……その割には、今俺の目の前にいるエヴァからはそんな感じがしないんだが？」

不可解さを隠しきれずにリンスは言う。

「ああ。今の私は呪いから解放されている。さて、これは一体どういう事だろうな？」

ククツ、と笑いながらエヴァンジェリンはリンスへと問い掛ける。

「……ウム、つまりはこういう事か？ 余等の”認識”ではリンスとエヴァは”仮契約”を結んでいる。2人が”仮契約”を結んだ時点でエヴァの呪いは解けておった。故に、その事実を知っている者たちの間では、それが適用されて現実となる。いや、それだと辻褃が合わんな……？ 少なくとも、タカミチがおった時点でエヴァの呪いは解けていたように感じる」

首を捻りながら、リファイアが紡ぐ。

「そうね。……だとすると、距離によって効力が変化するのかしら？」

「恐らく、としか言えんがな。」

貴様たちはこの世界の外に位置する者であるが故に、完全にこの世界に囚われることがない。その反面、この世界の者に認識されない限り、貴様たちはこの世界に干渉することが出来ない。

あくまで仮定でしかないが、そう考えると一番しっくり来る。

貴様たちを認識している者との距離が近ければ、自然と貴様たちの干渉力も強まり、距離が遠のけば低下する。また、幾ら距離が近くても、貴様たちを知らぬ者が多ければ、個々人への干渉力が分散されて、結果弱体化する事になりかねんだろうな。

現状、貴様たちをきちんと認識出来ているのは、私と神楽坂明日菜だけだろう。　　ぼーや、近衛木乃香、刹那の場合は、認識こそ出来ているものの、どこか曖昧さが漂っている。

かく言う私も、封印が解け、リンスと戦い合い、その結果、私が従者となる”仮契約”を結んだ事は覚えているもの。　　いつ・どこで・どうやって封印を解いたのかは記憶の彼方だ」

最後に、やれやれと溜息を吐きつつ首を振りながら、エヴァンジェリンは言った。

「何だそんな事が。エヴァの呪いを解いたのは」

「かんら、と笑いながらリフィアは言葉を紡ぎ

「妙だ。覚えているのに、名前を言う事ができんぞ？」

次の瞬間、ものの見事に狼狽した。

「だろうな。今現在の貴様たちは、私を始めとした『貴様たちを思いついた者たちの認識』によって成り立っていると考えられる。結果、私たちの認識外にある事を私たちに教える事は不可能なのだ」

「……つまりは枷をはめられているわけだ」

「けど、それじゃあどうするの？」

リンスは舌打ちし、マリーニヤは首を傾げる。

「なに簡単な事だ。貴様たちも識つての通り、この世界は無理と矛盾が蔓延している。……ならば、そこいらを突っついてやればいい」

「つまり、無理と矛盾に気付かせるといふ事か？」

「そういう事だ。……そんなわけで、今夜付き合え」

エヴァンジェリンが言うと同時に、ガラリと扉が開かれ、タカミチが再び姿を現した。

「それで……一体どこへ向かっているんだ？」

月光が照らす下、ゆっくりと歩を進めながら、リンスはエヴァンジェリンへと問い掛けた。

近右衛門との話し合いは思いの外すんなりと終わった。

取り敢えずの住居として宛がわれたエヴァンジェリン宅で仮眠を取り、叩き起こされてからかなりの時間が経っている。

それでも、初めの内は寝ぼけ頭を覚ますために夜風を楽しんでいたわけだが、それも既に飽きてきた。

麻帆良の敷地は無駄に広い。

現在は、その外れの方へと向かってゆっくりと歩いている。

そう、歩いているのだ。……走るでも飛ぶでもなく、歩いているのである。

流石に疲れこそはしないが、現状は別の意味で耐えられない。

つまりは無言である。

風が音を運んでくれるので、静寂と言うほどではない。

が、3人もいて無言というのは耐えられない。

(普段一番騒がしいリフィアは、俺の背中であんな眠ってるしな……)

リフィアを起こすまいと、無言の状況に耐えていたが、リンス的

に最早限界である。

「フム……確かに些か時間が掛かりすぎているか。おい、リフィアを起こせ。ここからは少々急いでいく」

「りよ〜か〜い。ほ〜らリフィア、とっくと起きなさ〜い」

エヴァンジェリンの言葉を受けて、マリーニヤがリフィアを起こしに掛かる。

「うみゆ？ マリーニヤよ、余はまだ眠いぞ？」

目を擦り、欠伸をしながら首を振り、夜風を浴びてようやく現状を理解したのだろう。

「な、ななななな、なな……！？」

リフィアは顔を赤く染め、口をパクパクとさせた。

「起きたな？ よし、急いでいくぞ」

言うや否や、エヴァンジェリンはリフィアの手を取り、見る見るうちに飛んでいく。

「俺たちも行くか……」

「おっけー」

見失わぬように、リンスとマリーニヤも急いで駆ける。

ハッ、ハッ、と呼吸音がやけに大きく聞こえる。

駆けること暫し、やがてエヴァンジェリンに追いついた。

「来たか」

迎えるエヴァンジェリンは冷笑を浮かべ

「うにゅ〜。何かクラクラするぞ」

リフィアは目を回していた。

「あ〜、はいはい。これ飲みなさい」

マリーニヤがペットボトルをリフィアの口元に運ぶのを横目に

「それで、ここが目的地なのか？」

リンスはエヴァンジェリンへと問い掛けた。

「ああ。ここが”境界”の筈だ」
「境界？」

エヴァンジェリンの零した単語にリンスは抱く。

「……………取り敢えず行くぞ」

リンスの疑問に答えることなくエヴァンジェリンは歩を進め、それにリンスたちも続き

「……………なるほど」

言葉の意味を、嫌が応にも理解した。……………原理はサツパリとして

静かな怒りが感じられた。

「……それで、ここで一体何を？」

「ここでは、ある戦争が行われている。……7人の魔術師とその使い魔が、あらゆる願いが叶う万能の釜『聖杯』を求めて戦うバトルロイヤルがな。その、通称『聖杯戦争』に介入する」

「介入してどうするのだ？」

「取り敢えずはどうもしない。介入するだけだ」

「介入するだけ？」

「ああ。ここにもこの世界の”常識”に対して違和感を覚えている者がいるはずであり、自然と”裏”に関わっている可能性が高いからな」

順々に3人が問い、エヴァンジェリンはそれに答える。

行き当たりばったり感この上ないが、それでも3人は納得した。介入して、違和感を覚えている人物に接触できればそれでよし。

出来なければ、また別の手段を考えればいい。

他の案を挙げようにも、現状ではそれ以上の案が浮かばない。

「……どうやら『噂をすれば』って奴みたいだな」

ポツリとリンスが呟いた。

微かに聞こえた金属音と何らかの破砕音。

今の時間を鑑みれば『聖杯戦争』の可能性が高い。

それぞれが無言で頷き、音の聞こえた方へと駆けていった。

英雄乱舞 (上) (前書き)

暑い日々が続くせいか、頭が上手く回らず、筆もあまり進みません。

英雄乱舞（上）

衛宮士郎は混乱していた。

目まぐるしく、刻一刻と状況は変化していくにも拘わらず、当事者の1人たる自分は未だに現状を理解しきれていない。

いや、現在自分が陥っている状況の理由が、“聖杯戦争”に關与していることぐらいは理解している。

遠坂凜と言峰綺礼から説明を受け、『正義の味方』志望としては放っておけないと思っただ。

だからこそ、自分の未熟は百も承知で参戦を決意した。

その帰り道、深山の交差点で遠坂と別れようとした矢先、雪のような少女と鉛色の巨人が姿を現した。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと名乗る少女と、バーサーカーのサーヴァント。

そして戦いが始まった。いや、それは『戦い』と呼べるほど上等なものではなかった。

咆吼と共に振るわれる巨人の斧剣を、前に出たセイバーがろうじて防ぐ。……そう、かろうじてだ。

理性を失い、技もなく、ただ“暴”と化した剣だからこそ、魔力放出を用いることで、セイバーはバーサーカーの攻撃を捌くことが出来ていた。

しかし、あらゆる点において、セイバーとバーサーカーには差がありすぎた。

例えば体格。例えば状態。例えばマスター。

少女の如きセイバーと、2メートルを越す巨人。

ランサーに穿たれた傷が完治していないセイバーと、“理性”がないだけで他は万全なバーサーカー。

未熟に未熟すぎて『見習い』の文字を付けることすら考えさせられる士郎と、連綿と受け継がれる正当なる魔術師の家系『アインツ

ベルン』に連なるイリヤスフィール。

全ての面において、セイバーが劣勢となっていた。

アーチャーが援護射撃を入れるものの、バーサーカーには然程の効果も上げていない。

故に、セイバーが地に膝を付けるのは必然だった。

どこかで何か違っていたならば、また別の結果を迎えていただろう。

満身創痍たるセイバーには、振り落とされるバーサーカーの剣を防ぐことも躲すことも不可能だ。

故に、セイバーの敗北は確定である。……最早覆すことなど出来ない。

だからこそ、士郎はセイバーを助け出そうとした結果、バーサーカーの斧剣をその身に喰らうこととなり

「……………!?!」

飛来した無数の矢が、その運命を覆した。

「やれやれ……何とか間に合ったか」

涼やかなる声を響かせて登場したのは、金色の少女。

この瞬間、衛宮士郎を置き去りに、状況は更なる変化を告げたのだ。

「ハッ……ハッ……」

駆ける、駆ける。

ただただ耳に届く音を頼りに、3人は見知らぬ道を駆け抜ける。

「チィッ……」

我知らずリンスは舌打ちをした。飛翔できぬのがもどかしい。

アクセサリ 装飾具を変えることで飛行は可能となるが、流石に飛翔までは出来ない。……慣れればまた別なのだろうが、少なくとも現状では不可能だ。

飛翔できるエヴァンジェリンは、一定距離を進む度に停滞を繰り返している。

道無き空と、道に縛られる大地。

エヴァンジェリンを先行させたいところではあるが、ここも麻帆良の敷地内に位置する以上、距離が離れすぎると呪いが復活してしまう。あくまで推測でしかないが……。

「リファイア、次はどっちだ？」

分岐路に差し掛かる度に、リンスはリファイアに問い掛ける。

どのようなものかまでは不明だが、まず間違いなく結界が張られているだろう。

人払い、認識阻害、視覚遮断、聴覚遮断……例を挙げればキリがない。

それでも、結界が魔力によって張られている以上、そこには何らかの流れが生じ、その流れは外へと向かう。……閉じたままでは爆発するからだ。

だからこそ、この流れを遡れば音源へと辿り着く。

リンスも魔術を使えるが、その本質は戦士であり、魔力の知覚と扱いに関してはリファイアの方が上である。

「……右じゃ！」
「了解」

速度を緩めぬままにカーブを曲がり、それを幾度繰り返したかも分からない。

やがて、リンスにも音源がハッキリと知覚できた。

「乗れ、リファイア。もう充分だ。飛ばす」

言つと同時に多少速度を抑えて前傾姿勢となり、リファイアが背中に乗つたと同時にリンスは速度を上げる。

「さて……問うが、”聖杯戦争”の参加者で間違いないか？」

笑みを浮かべて問い掛ける少女に対し、警戒の視線が突き刺さる。

「アンタ……キャスター？」

怪訝そうに凜が問う。……それも無理はない。

少女から放たれる威圧感。少女から感じる魔力量。そのどれを取っても只人とは言い難い。

ならばサ・ヴァントと考えるのが至極妥当だ。

そして、現在凜が知っているサーヴァントは、セイバー、アーチャー、ランサー、バーサーカーの4騎である。

セオリー通りならば、残るはライダー、キャスター、アサシンの3騎。

また、先程バーサーカーに放たれたのは氷の矢であった。
アーチャーが自分のサーヴァントである以上、考えられる可能性としては、先の矢は魔術である。

だとするならば、該当サーヴァントはキャスターとなるだろう。
しかし、そうだとしてキャスターが前線に出張ることなど有り得るだろうか？

キャスターは魔術師のサーヴァントだ。

故に、その攻撃は当然の如く魔術となる。 まあ、”宝具”はどうか知らないが……。

そして大概のサーヴァントは”対魔力”のスキルを保有している。
よって、こと正攻法においては、キャスターは最も勝率の低いサーヴァントであると言えるだろう。

そんなキャスターが前線に出張るとするのは、凜としては考えられない。

「違うわリン。だってキャスターはお寺に籠もってるもの」

そんな凜の疑問に答えたのは、バーサーカーのマスターであるイリヤだった。

「フム……確かに私はサーヴァントではない。 と言うか、本来”聖杯戦争”には関わりない」

イリヤに同意するかのよう金色の少女が言った。

「じゃあ、アンタ何よ？」

「名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。お前たち魔術師の分類で言えば、”死徒”に当たる吸血鬼だ。ここに来たのは……まあ仕事だな」

「仕事？ いえ、それよりもエヴァンジェリンってどこかで……」

「……？」

「吸血鬼……だって？」

凜と士郎が同時に疑問の声を上げる。疑問点は全く別であったが……。

「どつという状況だ？」

そこに、新たに3名が加わった。

1人の少年と2人の少女。

少女の1人と少年の魔力量も並大抵のものではない。

「ああ。取り敢えずは自己紹介をしたところだ」

「そうか」

エヴァンジェリンに答えつつ、少年は視線を動かす。

「さて、それでは互いに自己紹介と行きたいのですが……お嬢様方もそれでよろしいでしょうか？」

おどけたように言う少年に、しかし誰も答えない。

その言動と行動とは裏腹に、少年には隙がなかった。

「自己紹介……ね。まあいいわ。当然、そう言うからにはそちらから名乗るんでしょうね？」

バーサーカーとエヴァンジェリン一行、両者への警戒は些かも緩めずに凜は言う。

現状、自分たちは不利である。アーチャーは言うに及ばず、自然共同戦線を張っているセイバーも負傷している。挙げ句の果てにバ

「サーカーの真名はヘラクレスときた。」

結論として、自分たちの敗北色は濃厚だ。にも拘わらず、この状況を覆す算段が思いつかない。

ならば、取り敢えずは時間を稼ぎ、その間に算段を立てればいい。エヴァンジェリン一行の目的はハッキリしていないが、場合によつては引き込むのも一つの手だ。

この様な理由から、凜は自己紹介に賛同した。

「それとも、私たちから名乗った方がいいかしら？」

他方 認識が追いついていない士郎はさておき イリヤもまた言ってきた。

何故か？ イリヤは貴族だからである。

貴族とは常に余裕を持っていなければならないのだ。

そして、自身のサーヴァントは無敵である。……つまり、自分たちの勝利は確定している。

ならば、結果を先延ばしにする程度の時間を凜とお兄ちゃんに恵んでやるのも貴族の義務であろう。

エヴァンジェリン一行と戦うにしろ戦わないにしろ結果は変わらない。……バーサーカーの勝利は間違いないのだ。

以上の理由から、イリヤも自己紹介に賛同した。

「いえいえ。提案したのは私どもなれば、こちらから名乗るのが礼儀でありましょう」

芝居がかった台詞を言いながら少年は一礼し、名乗った。

「私はリンス・アリア・マーシルンと申します。リンスとお呼び下さい」

「余はリフィア・イリーナ・マーシルンである。リフィアと呼んで

くれると嬉しいぞ」

「どうも、マリーニャ・クルップっていいです。マリーニャって呼んで下さい」

3人の名前 正確にはリンスとリファイアのファミリーネームを聞いた凜は、我知らず首を傾げた。……凜は知らぬ事だが、士郎、セイバー、アーチャーの3人も同じであった。

（『マーシルン』ってどっかで聞いたような……？ けどまあ、気のせいよね）

抱いた疑問をアツサリと凜は流した。……奇しくも、他の3人も同じように疑問を抱き、同じように流していた。

「私は遠坂凜。そして私のサーヴァント
「アーチャーだ」

凜は端的に告げ、被さるようにアーチャーが続く。

「私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ。こっちは私のサーヴァントのバーサーカー、よろしくね」

無邪気な笑顔でイリヤが名乗る。

「あ、俺は衛宮士郎っていいです」
「そのサーヴァント、セイバーです」

最後にシロウとセイバーが名乗った。

しかし、互いに自己紹介をしたからといって和やかな雰囲気になどなるはずはなく、警戒 或いはその類 の視線は変わらず行

き交う。

「さて、自己紹介もしたことだし……そろそろこちらの質問に答え
てくれないかしら？」

「質問？」

「ええ。そちらの吸血鬼の方の言う『仕事』とは何でしょうか？」

「一言で言えば”聖杯戦争”への介入だ。こっちとしても魔術師と
関わり合いになどなりたくはないのだが、如何せんそうも言つてら
れんのでな。長物による殺人事件、連続発生している集団昏睡事件
……例を挙げればキリがない。

面倒ではあるが私は麻帆良の警備員なんぞでな。こつちも物騒なこと
を立て続けに起こされては、介入せざるを得んというわけだ」

深い溜息を吐きながら、如何にも面倒くさげにエヴァンジェリン
は言う。

無論のことながら、これは建前であり本音は別に存在する。

しかし、本音は説明が難しい事に加えて、その方法からして分か
らない。

故に、何でもかんでも試してみるより他はなく、その為には何ら
かの形で関わるのが手っ取り早い。

その理由として告げた建前は、然程無理のないものである。

事実、エヴァンジェリンは麻帆良学園の警備員であり、冬木が麻
帆良の敷地内に存在しており、かつ、如何に神秘が関わるとはいえ
物騒な事件が立て続けに起こるとなれば、実力者である彼女が介入
するのは自然であるとも言える。

また、確かに”聖杯戦争”は”魔術協会”と”聖堂教会”の管轄
ではあるが、それが起こっているのは”関東魔法教会”の総本山た
る麻帆良の敷地内なのだ。……その教義が異なる以上、普段は互い
に干渉を貫いているが、時と場合によっては手を組むこともある。

当然の如く、その逆もまた然りなのだが……。

よって、エヴァンジェリンの言葉は、理論的には有り得なくもない。

正当なる魔術師の家系である『遠坂』と『アインツベルン』であれば、充分に理解は出来よう。……それがエヴァンジェリンの考えであった。

「ふうん。リン、お兄ちゃん……この場は見逃してあげるわ」

「冗談。帰んならアンタが帰りなさい」

しかし、現実とは無情なものだ。

確かに、凜もイリヤもエヴァンジェリンの言葉に理解は示した。

だが、あくまでも理解だけである。

彼女たちはどうしようもなく魔術師であり、それと同時に、どうしようもなくヒトであった。

つまりは、その感情を抑えることが出来なかったのだ。……俗に言う『理解は出来ても 納得は出来ない』という奴である。

彼女たちにとって、『魔法』とは『奇跡』であり、それを人為的に起こすことの出来る『奇跡の行使者』を、畏怖や賞賛、その他諸々を込めて『魔法使い』と呼ぶのである。

しかし……だ。凜とイリヤの識る限り、関東に限らず”魔法協会”に属する者たちは、『奇跡』など起こせぬ分際で『魔法使い』を名乗っているのだ。

それは、彼女たちにしてみればとても許せる事ではない。

更に、凜に関してのみ言うならば、彼女は魔術師たる自分が”不魔術者共不法協会”の敷地内に住んでいることすら耐え難いことだったのだ。

それでも、今まで耐えることが出来ていたのは、未だかつて不埒者に出会うことが無かったからだ。

自分が認識できぬ以上、それは存在しないと同じである。……そう思っているが故に、問題なく生活することが出来た。

自分が認識できぬだけで、それは確かに存在している。……それ

が事実であるが故に、知らず苦痛を帯びてきた。

相反する事実と現実。

そう、『魔術師』遠坂凜の内面に封じ込められた怒りは、日に日に肥大化していく一方で ただの一度も発散されることが無かったのだ。

一方のイリヤも似たようなものである

そも、『アインツベルン』は手にしていた魔法を失い、それを再び手にすることを至上としており、最早妄執の域にまで及んでいる。そんな彼女にしてみれば、やはり軽々しく『魔法使い』を名乗られるのは堪ったものではない。

その存在を識ってはいても、出会うことが無かったのはイリヤも同じなのである。

よって、凜とイリヤの自身すらも知らぬうちに蓄積された怒りは、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという『現実』と出会うことで、これ幸いと爆発したのであった。

「邪魔はしないでよね？」

「そっちこそ、そのデカイ図体でアーチャーの射線を塞ぐんじゃないわよ？」

瞳に冷たさを宿しながら、凜とイリヤはエヴァンジェリンを見据える。

現在の2人にとって、”聖杯戦争”は二次と化していた。

故に、先程まで殺し合いをしていた2人の少女は

「やっちゃえ、バーサーカー！」

「やりなさい、アーチャー！」

同時に告げた。

そしてその命令を受けた2騎のサーヴァントは

「—————！」

「やれやれ……慌ただしいことだ」

片や咆吼を上げて突撃し、片や溜息を吐きつつ跳躍して、屋根の上から矢を放った。

「えーい！ 融通の効かん……っ！」

巨人の速度はその体躯とは反比例に速く、放たれた矢は正に閃光の如き速度で迫る。

エヴァンジェリンが並外れた実力者であり、その周囲には恒常的に障壁を展開しているとは言え、相手もまた彼女に比肩する実力者だ。

何故なら相手はサーヴァント。……過去・現在・未来を問わず、実在した英雄である。

故に、流石のエヴァンジェリンとて、その連撃を防ぎきることもなご不可能に等しい。

「チツ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

しかし、エヴァンジェリンは舌打ちをしつつ詠唱を行うだけ。…

…その姿には護りの色が一切見えない。

エヴァンジェリンは吸血鬼であり、通常の武器で死ぬことはない。それは相手がサーヴァントでも同じことだ。

彼女を滅ぼし尽くすには、それ相応の神秘が必要である。

とは言え、相手はサーヴァント。

現在彼女に放たれた攻撃を受けても死ぬことは無いが、キツチリとダメージは受けることになる。……バーサーカーの攻撃であれば、頭に『大』を付けることになるだろう。

当然のことながら、それを理解していないエヴァンジェリンではない。

にも拘わらず、護りを一切考えないのは何故か？ 答えは簡

単である。

何故なら彼女は1人ではない。

「……………らあっ！」

リンスが氣勢を上げ、迫り来る斧剣へと割って入る。

鈍い音が響き、次の瞬間、両者がたたらを踏む。

これは順当な結果ではあったのだが、リンスにとってはそうではなかった。得物、体格、速度……………諸々から想定した威力よりも、斧剣の一撃は重かったのだ。

ために、リンスの狙いとはズレてしまった。

リンスとしては、斧剣を弾いた勢いのままに、飛来する矢も始末するつもりだったのだ。

しかし、現実として動きは止まってしまった。止められてしまった。

同時に巨人の動きも止めることが出来たのは、この状況下では僥倖と言えるだろう。……………もし巨人の動きを止めることが出来なかったならば、間違いなく自分は負傷していた。たとえ死ぬことは無いにしても、行動に支障が出ることは否めなかった。

だが、幸運を喜んでいる暇はない。

動きを止められてしまった以上、自分には矢を防ぐことが出来ない。

障壁に期待するか？ ……否だ。エヴァンジェリンが詠唱に専念しているのは、決して届かぬと確信しているからだ。それはつまり、自分たちへの信用の表れだ。

ならば、その期待には応えなければならぬだろう。そうは思うが、リンスには出来なくなってしまう。

故に

「マリーニヤ、頼む！」

リンスは己が仲間へと任せることにした。

「はいよ……っ！」

即座に気っ風の良い声が答える。

「そりゃ」

次いで、甲高い音が響いた。

一度だけではない。二度三度と断続的に響き渡る。

「ハッ！」

それを耳に捉えながら、リンスは再び剣を振るう。

またしてもたたらを踏んだ。先程よりも強く、速く振るったにも拘わらずだ。

（なるほど……”英雄” ってのは伊達じゃあないか）

リンスは意気を改める。

眼前の巨人はバーサーカーと呼ばれていた。……その呼び名に嘘は無いだろう。

その名の通り、巨人の攻撃には『技』が無い。武勇を現す『流れ』が無い。ただただ斧剣を振るっているだけだ。

故に、適切なタイミングで、適切な角度に、適切な速度と威力で合わせれば、捌くことは可能であろう。

(だが　それじゃあ意味がない)

捌くだけでは勝負に勝てない。

負けることもないが　勝つこともない。

こちらの目的は、取り敢えず会話の席に着くことだ。

彼女たちから直接話を聞くことで、より詳しい情報を得ることが出来るし、互いに言葉を交わすことで、彼女たちが綻びに気付く可能性も出てくるからだ。

警戒こそ途切れなかったが、自己紹介は上手くいったのだ。

その後、ここに来た目的を告げた途端に、凜とイリヤの態度が一転した。

そして、それぞれサーヴァントをけしかけてきた。

考えられるとすれば、感情の爆発だろう。

道中、エヴァンジェリンは『魔法使いと魔術師は仲が悪い』と言っていた。それでいて『自身は魔術師に会ったことがない』的なことも言っていた。

エヴァンジェリンがそうであった以上、それは彼女たちにも当て嵌まるはずであり、感情が爆発したところでおかしくはない。

そして、感情が爆発しているということは、冷静さを失っているということであり、それは論理的思考が出来ていないということだ。一度冷静さを取り戻すことが出来れば、数多の疑問が浮かんでくるだろう。

それに対し、或いは自答できるものもあるだろうが、或いは自答できないものもあるだろう。

結果、あわよくば言葉を交わさずして、彼女たちがこの世界の無理と矛盾に気付く可能性もある。

だが、その為には、バーサーカーとアーチャーを行動不能にさせなければならぬ。……自ら擁する”英雄”が動けなくなれば、流石に冷静さを取り戻すだろうからだ。　その一方で、殺してしま

つては意味がない。

だからこそ、エヴァンジェリンがその為の魔法を唱えているのだが……。

(コイツに通用するのか……?)

漠然とした不安がリンスの脳裏を過ぎる。

この巨人と剣を合わせていると、リンスはある人物を思い出さなければならない。

その人物とはジャック・ラカン。魔法世界における、リンスの好敵手の1人であり、様々な二つ名を持つ”英雄”である。

バーサーカーの筋骨隆々振りやその巨躯が、どうにもラカンと被るのだ。

そしてそれ故に、リンスは不安を抱く。

なにせ、ラカンは『バグキャラ』という二つ名を持っており、その名に相応しく一定以下の攻撃は持ち前の気によって防がれる。…

…仮に、気の防御を突破したとしても、その肉体は鋼の如しであり、生半可な攻撃ではダメージを与えることすら出来ないのだ。

リンスがテオドラの護衛をやっている時、非公式にラカンと勝負した事が三度あった。……何れも僅差であったが、結果は一勝一敗一引き分けである。

最初の勝負では負けた。次に引き分けた。そして最後に勝った。

運に左右された部分も少なくないだろうが、リンスの気構えも勝負毎に異なっていた。

一度目は倒すつもりで、二度目は殺すつもりで、三度目は殺し尽くすつもりで戦った上での結果である。

無論、バーサーカーはラカンではない。

故に、この不安も杞憂である可能性が高い。その一方で、バ

ーサーカーも間違いない”英雄”である以上、決して『有り得ない』とは言えない。

そう、意志は目に見えぬ力を生じさせる。反面、結果は意志に左右される部分がある。

自分たちは 少なくとも今はまだ 相手を殺すわけにはいかない。

故に、エヴァンジェリンが魔法を放つ際、その意志は『打倒』となるだろう。

魔法自体の威力でバーサーカーを戦闘不能に出来ればいいが、それが出来なかった場合 果たして、『打倒』の意志でそこまで追い込む事が出来るのか……？

「この……っ！」

不安を抱え、その場合の対応策を考えながら、リンスは剣を振り続ける。

「……ッ！」

リンスがバーサーカーと相手取っている間、アーチャーは絶え間なく矢を放っている。

そして、最初に放った矢から今に至るまで、その悉くをマリーニヤに防がれている。

アーチャーが放つ矢はただの矢では無い。……無銘とはいえ、その全てが剣なのだ。

流石に”宝具”の域にこそ届かぬが、その全てが逸品揃いである。強度からしてただの矢とは比べものにならず、それを射ているのは他ならぬアーチャーなのだ。

それを

「よっつ」

またしても、軽々と弾かれた。

決して、アーチャーに油断はない。

確かにセイバーに斬られた事で負傷しているが、そんなのは些細な事だ。……”宝具”級を放つならば支障が出るが、無銘の剣を放つだけなら些かの問題もない。

故に、自身の矢が弾かれているのは純粹にマリーニヤの力量によるものである。

その技量も見事なれば、その手に持つ短刀もまた見事だ。

自身の放つ矢の悉くを弾いていながら、一切の刃毀れもない。

「このままでは益も無し……か」

呟き、アーチャーは矢を放つのを止めて地へと降りる。

このまま矢を放ち続けたところで、効果がないのは証明されている。

マリーニヤは飛来する矢が中るか中らないかを見極めた上で弾いている。また、自身に中る軌道であっても、他の者に中る軌道で無ければ、弾くことすらしていない。……つまりは回避している。

「ちょっと、アーチャー！」

「いやなに……このまま矢を放ち続けたところで、何ら意味はなさそうなのでね」

空かさず凜が怒声を上げるが、もっともらしい言葉で返す。

「づぐ……」

どこかで感じてはいたのだろう、呻く凜を横目に見ながら、彼女の前へと進み出る。

「さて、確かマリーニヤと言ったかな？」
「そうだけど……？」

名前が合っているかを確認したアーチャーは一つ頷き、再度マリーニヤの持つ短刀へと視線を向け、次いでリンスの持つ両手剣へと視線を向け、最後にリフィアの持つ杖へと視線を向ける。

(やはり、気のせいでは無かったか……)

結果を確認したアーチャーは嘆息する。

リンスの持つ両手剣 正確には鎧と1セット と、マリーニヤの持つ短刀、リフィアの持つ杖は、自身の”結界”に登録されていない。……挙げ句の果てには、そのどれもが一級の”宝具”に相当する。

(どうしたものか……?)

取り敢えず”結界”へと登録しながらも、アーチャーは悩む。

アーチャーとしては、エヴァンジェリン一行と刃を交わす必要性を見出せない。

現在、最優先すべきは”聖杯戦争”である。

エヴァンジェリン一行は本来”聖杯戦争”には関わり合いがない。……言葉を鵜呑みにするのは危険であるが、彼女自身がそう言っていたし、何よりも彼女たちの行動がそれを証明している様にアーチャーは思った。

リンスはバーサーカーを迎え撃ち、マリーニヤは自身の放つ矢を担当し、エヴァンジェリンは詠唱をしているが、リフィアは何もしていない。

真実、彼女たちが自分たちに害を及ぼすつもりであれば、リフィアが何も行動を起こさないのはおかしい。

エヴァンジェリンが詠唱しているのが自衛の為だとすれば、一応納得は出来る。……アーチャーたる自分と違って、バーサーカーには理性がない。結果、彼女たちがバーサーカーを止めるには力尽くしかない。その一方で、理性あるアーチャーの自分に対しては無理して力に訴える必要がない。ただ『手強い』と思わせるだけでいい。

この推測が正しければ、やはり刃を交える必要がない。本来ならば、エヴァンジェリンが吸血鬼という事だけで、刃を向ける理由にはなる。が、それもまた理由にならない。

聖杯から流れる知識を信じるならば、掲げる教義が”魔法協会”と”魔術協会”で異なるように、吸血鬼の定義もまた異なるらしい。そして、エヴァンジェリンは”魔法協会”側の吸血鬼の定義に該当する。

事実、『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』を始め、”魔法協会”から様々な二つ名を付けられ、その首に莫大な賞金を懸けられているエヴァンジェリンは”魔術協会”や”聖堂教会”で言うところの”死徒二七祖”に匹敵する実力を保有しているにも拘わらず、祖には数えられていない。何故かと言えば、”魔法協会”側の吸血鬼の定義に該当するモノは、”魔術協会”と”聖堂教会”の定義する吸血鬼に比べて、その行いが『温い』からである。

アーチャーから見ても、血を吸っても殺さず、死者も生み出さないとなれば、それは最早吸血鬼ではない。

よって、如何にエヴァンジェリンが吸血鬼であっても、アーチャーとしては積極的に刃を向ける理由にはならないのだ。

加えて、一級”宝具”相当の得物を持ち、確かな実力もあるマリニヤたちと刃を交えるのは、自らの敗退を促すだけである。

以上の理由から気乗りのしないアーチャーではあるが、『やりなさい、アーチャー！』と命令されてしまった以上は、刃を向けないわけにもいかないのだ。……”礼呪”によって縛られており、凜の命令に背くとペナルティが掛かるためである。

「個人的には刃を向ける必要性が見当たらないが、如何せんマスターの命令なのでね。申し訳ないが、今暫く付き合っていたらどう」

結果、深い溜息を吐きつつも、今度は接近戦を挑むべくアーチャ―は使い慣れた夫婦剣を用意する。

その、どこか疲労感を感じさせる言葉とは裏腹に、鷹の如く鋭い瞳はしっかりとマリーニヤを捉えている。本来抱くべき疑問を抱くことなく。そして、その事に気付かないままで……。

「アンタも苦勞してんのね……」

リファイアに振り回されている自分と 言動から察するに 凜に振り回されているアーチャ―。

どこか共感を覚えつつ、しみじみと呟きながらも、マリーニヤは得物を構える。

「……………」

周囲を置き去りに静寂の中に身を包み、互いに動こうとしたその刹那。

「痺れる！ 雷の斧！」

エヴァンジェリンの声が響き、次いで斧を象ったような雷がバ―サーカーへと叩き込まれた。

「はあ……………」

「ふう……………」

出足を挫かれたことに溜息を吐きつつも、油断無く両者は対峙を続けるのだった。

英雄乱舞 (上) (後書き)

頑張って早めに次話を投稿したいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4149/>

VERITA ~ 光から続く物語 ~

2010年10月8日21時58分発行